

注意事項

JのPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

プリキュアコネクト

【作者名】

おじ

【あらすじ】

心の国の失われた“哀しみ”を取り戻すため、プリキュアたちが戦う。中学一年生に進級した嬉野ゆかりは、行方不明の母親を捜してい る妖精タリアと出会い、“喜びのプリキュア”キュアリンクとして心 の国の戦いに巻き込まれていく。喜びと哀しみを巡る、プリキュアの 物語。

1 1・誕生！　囁きのプリキュア

嬉野ゆかりは、みんなの環の中心にいた。

暖かな春の陽気に当たられて、よひよひく彼女は自分がどこかの野原に立っているのだと気づく。

まるで絵本の世界にいるような、穏やかで幻想的な風景。彼女の足元には、小さく多彩な花がいくつも咲いている。

エネルギーを感じさせる赤。控えめな白。優しそうなピンクのそれは、一見すると桜のようにも見えた。

そして、その花々を囲んでいる、ぬいぐるみのような生き物たち。子犬や子猫のような可愛らしい見た目をしており、ゆかりはこのメルヘンチックな体験に嬉しさが込み上げてくる。

つい頬が緩みそうになつたとき、皿の前にいたぬいぐるみがワッと泣き出した。

爽やかな薰風は、雨が降る前兆のように冷やかなものとなり、一瞬にして辺りを包み込んだ。

これまで我慢していた緊張の糸が切れてしまつたのか、他のぬいぐるみたちも次々と泣き出す。見た目の通り幼い様子の彼らは、涙を流すことでしか悲しみを処理できないのかもしれない。

「泣かないで」

ゆかりは、最初に泣き出したぬいぐるみの頭に手を伸ばす。しかし、体が思うように動かなかつた。足も、まるで靴の裏と地面がのりでくつついでいるかのように、びくともしない。

「大丈夫だから……、ね？」

どうしてこんなことが言えるのか、ゆかりには分からなかつた。みんなが悲しんでいる理由も、ここがどこかも知らないのに、『大丈夫』なんて無責任ではないのか。一瞬、そんな嫌な考えが頭をよぎる。だけど、この子に泣いてほしくない。その気持ちだけは、強くあつた。

ようやく指先がぬいぐるみの頭にかすりかけたとき、彼女を囲む環

から外れたところで、誰かが言った。

「許してくれ……」

喉から搾り出したような、苦しそうで、哀しみを帶びた声色だった。その直後、悲鳴にも聞こえる甲高い音がして、ぼんやりとしていた風景が、またたく間にかすんでいく。

ゆかりは必死に手を伸ばす。先ほどまでえんえんと泣いていたぬいぐるみたちは一斉に泣き止み、何事もなかつたように四方に散つていぐ。あつとう間に、環は崩壊してしまった。

それでも、最初に泣き出したあの子だけはまだそこにいる。すぐ近くにいるのに、どうしても手が届かない。

もう少し……。

彼女の手はしつかりと、田舎まし時計を押さえていた。
ここは自分の部屋の、ベッドの中。時刻は午前八時前。わきせどま
でとは違い、今の状況はすぐに理解できた。

「寝坊した～～っ！」

飛び起きてリビングに駆け下りると、家族はのんびりテレビの上に
一人で見てくる。

「お母さん、今日は早めに起こうして言つたのにー！」

「だって、あなた起こしても起きないんだもの。私は、まだ寝たいくつ
いうゆかりの意思を尊重してあげたの」

「そういうときはだな、甘いんだからー！」

言ひ合ひしている時間も惜しい。台所には、彼女が二度寝した時点で
寝坊すると判断したのだろう、おむすびと味噌汁だけがあつた。急いで
それらを握き込むと、一切の無駄がない動きで朝の支度を済ませ
る。

鏡で自分の姿を確認して、氣づく。なぜか、リビングには父の姿
もあった。いつもなら、とっくに家を出でている時間なのに。

「お父さん、今日はお仕事休むんだっけ？」

リビングに戻つて声をかけると、よつやく自分の存在に気づいてくれ
たことが嬉しいのか、父は微かにほにかんだ。

「午前中だけでも出ようと思つたんだけど、ゆかりも今日は午前だけで終わるんだろ？ それならいつそのこと休んだ方がいいかなって」

このやり取りを聞いて和室から出てきた祖母が、念を押す。

「お昼前にはお坊さん見えるから、それまでには帰つておいで」

今日の嬉野家が忙しいのは、ゆかりが寝坊したせいではない。一年前から決まっていたことだ。それならば、なお起こしてくれたらよかつたのに、と思つ。

「うん、わかつてる。それじゃ、行つてきます！」

ゆかりは元気よく、玄関の扉を開けた。厳しくも優しい太陽の日差しが、彼女の体を包み込む。布団の中にいるようで、頭の中を空っぽにして走り出したくなるような感覚。ゆかりは、無償に嬉しくなつた。

天気は晴れ。朝起きて、家族とふれ合い、桜の綺麗な道を通りて学校に行く。人目を気にせずバンザイしてしまったかった。

そんな気持ちにブレークをかけ、玄関の扉が閉まるタイミングに合わせて回れ右をする。表札を見上げて、彼女は呟いた。

「行つてきます」

そこにある名前は、喜多^{きよ}。母の旧姓であり、祖父母の苗字だ。

中学校に着くと、昇降口の掲示板にはクラス分けの表が張り出されていた。

數十分なら生徒が群がつていたかもしれないが、今は人づ子一人いない。もつとも、ゆかりが登校した時間にまだ他の生徒が掲示板前で押し合つているような、この学校の生徒指導は教頭あたりに指導されるべきだろ？

ゆかりは今日から、一年生に進級する。彼女の名前は、二年一組の上から一番目にあつた。そして、自分の上にある名前を見て、つい笑みがこぼれる。

「ちなみちゃん！ また同じクラスだね！」

新しい教室の前側の扉を開けながら、ゆかりはすぐそこにいるであろう親友に声をかけた。

案の定、廊下側の先頭の席に座っていた愛花ちなみは、作業の手を止めてむすつとした顔を上げる。

「ゆかり、今何時だと思う?」

「えっと、八時二十分?」

おどけた調子で返すが、ちなみの鬼のよつたな形相を見てたじたじになる。

「私がたしか昨日ゆかりに七時四十分ぐらいに来てつて言われたから、その時間通りに来たんだけど?」

いつ、誰が、何を、どうしたか、を強調したその言い方には、迫力があった。

「ごめん、不思議な夢を見ちゃつて、つい寝坊を……」

「あんたがその“不思議な夢”を見てるとき、私は学校でずっとこれ作ってたんだからね」

机の上いつぱいに積まれている造花の山から一つ取り出すると、ゆかりの目の前に突きだした。

「言いだしつべはあんたでしょうが

「うん、本当にごめんね?」

謝りながら、ゆかりはカバンのファスナーを開く。ちなみが中を覗くと、机に積まれている数以上の造花が、そこにあった。

「でも、こんなこともあるうかと、タベのうちにたくさん作つておいたから。ちなみにちなみちゃんが作ってくれたのと、他のみんなのも合わせたら何とかなると思つ」

ゆかりはこいつと笑つてみせた。それを見て、思わずちなみはため息を吐く。

「まったく、あんたは……」

呆れながら笑つてしまつ。「こんなこともありますか」という発言に対してではない。夜なべをして、早起きもする。そんな器用なことが、嬉野ゆかりに出来るわけがないのだ。

「それだけあれば十分だよ。じゃあ、急いでみんなの分も回収しに行

こつー」

ゆかりの手を取り、ちなみは教室を飛び出した。

時刻は八時二十八分。チャイムが鳴るまで、あと一分。

始業式が終わると、体育館にはゆかりとちなみを中心にして、彼女たちが所属するテニス部の仲間や、同じクラスの友達が残った。厳密には、一週間前まで同じクラスだった子もいる。

「それでは、みなさん、まずは」協力ありがとうございました。それでは、リーダー、後はお願ひ

仰々しく挨拶の口火を切つたちなみは、すぐに切つたばかりの口火を放り投げた。あまり人前で話すこと慣れていないゆかりは、深く息を吸つてから口を開く。

「えっと、ちなみに先に言われちゃつたけど、本当にみんなありがとう。私の段取りが悪かつたせいで、ギリギリまで手伝わせることになつてごめんなさい。でも、みんなのおかげで間に合わせることができました」

みんなから拍手が送られる。しかし、喜ぶのはまだ少し早い。在校生が下校した後で行われる入学式で、入場のときに使う花のアーチ。これが完成して、新入生が新たな門をくぐるとも、もっと大きな拍手が沸き起こり、会場は喜びに満ち溢れるはずだ。

「それじゃあ、急いでアーチに花を飾りつけていきましょう」

ゆかりの指示に従い、有志は分担して作業を進める。集まつたメンバーの中には、お互い初対面の者もいるはずなのに、みんな楽しげに話しながら手を動かし、そこかしごに笑顔が見える。ゆかりにはそれが嬉しかった。

「それにしても、ゆかりが何かを指揮するなんて、ホントびっくりだつたよ」

自分の頭の上に造花をぽんと落として遊びながら、ちなみは言った。その言い方に嫌味は含まれておらず、爽やかな口調だった。

「最初は子どもっぽい、って誰かさんに反対されたけどね」

「」やどばかりに反撃すると、「『リ』と頭を小突かれた。ゆかりは大げさに痛がる素振りをしてみせ、頭をさする。

「私には」れくらいたしか思いつかなかつたけど、みんな喜んでくれる

かな？」

すると、みなみは先ほどまで手玉にしていた造花を、ゆかりの頭をさすつて「いる方の手に軽く投げて当てる。」

「私が新入生だったら、きっと嬉しい」

そう言つと、にかつと笑つてみせた。それを見て、ゆかりも笑顔になつた。

花のアーチが完成し、有志は急いで教室へ戻る。みんなのおかげで作業は渉り、休み時間内に終わらせることができた。

この後、各教室で帰りの会があり、少しの間が空いて入学式となる。

「ゆかりー！ 早く戻ろうよ、何やつてんの」

先に体育館を飛び出したみなみが、外から声をかけた。

「『めん、すぐ行くから先に戻つて』

最後に、ちゃんと確認をしておきたかった。万が一、新入生が通っている間にアーチが壊れたりしたら大変だ。それに、造花だって、せっかくみんなが作ってくれたのだから、一つも落ちてほしくない。「これも、これも、大丈夫……」

チャイムの鳴る時刻が迫り、ほとんどの生徒は既に教室で待機しているのだろう。不意に静かで大きな体育館に一人でいることが怖くなり、気づかないうちに声に出しながら確認をしていた。

「これも大丈夫」

すると、用具入れの暗闇から、微かに音が聞こえた。

ガサ……。

「え？」

おかしい。このアーチは用具入れから取り出したのだから、中に誰もいるはずがない。窓は閉まっていたはずだし、生徒なら今はみんな教室に戻っている時間だ。

「誰……？」

ガサ……。

音は近づいてきた。音の大きさからして、人間ではなさそうだった。もしかすると、猫か何かの動物が潜んでいたのかもしれない。

「あの～……？」

ガサ……。ガサ……。

音はどうぞん近づいてきて、暗闇から飛び出した。ゆかりは悲鳴を上げ、その場から逃げようとしたが、腰が抜けたてなかつた。すると、ほすん……。

暗闇から飛び出した物体は、ゆかりの手の中にあまつた。

「お母さん!! 探したリア！」

それは猫ではなかつた。そうとも、言葉を発したのだから、猫でないことは間違いない。ゆかりには、この生き物が何かも、言つていふことの意味もわからず、ただ気が動転していた。

「お、お、お母さん!! 私、あなたのお母さんじゃないよ!!」

手の中の生き物は、顔を上げてゆかりの顔をじっと見た。すると、仰天して彼女の体から離れる。

「あ！ よく見ると、お母さんじゃないリア！ あなたは誰リア！」

よく喋り、よく動くぬいぐるみだった。実に奇妙だが、子犬や子猫のようで、そのどちらでもない。

「だから、今さつまつたじゃん!!」

そして、『づづく。』このぬいぐるみは、見覚えがある。

今朝の夢の中に出てきた、あの泣いていたぬいぐるみだ。

1 2・誕生！ 売びのプリキュア

「あなたは……」

体育館の用具入れから飛び出してきた、奇妙な喋るぬいぐるみは、今朝の夢に出てきたぬいぐるみにそっくりだつた。ゆかりの腕の中に収まるほどの小さな体、犬や猫が合わさつたような動物的な顔立ちをしているが、一足歩行で、よく喋る。

「お母さんと雰囲気が似ていたから間違つたりア。もし、お母さんを知らないリア？」

夢に登場したときは違う、表情や声色から、悲しんでいる様子は一切感じられなかつた。ゆかりは、自分が抱えている奇妙な生き物を目の当たりにして、しばらくの間ぼうとしていたが、耳元で大きな声を出されてようやく意識を取り戻す。

「ちゃんと聞いてるリア!?」

「あ、えつと……、『ごめん。何だっけ？』

聞き返すと、今度はちゃんと聞いてもらえるように、さらに大きな声を出した。

「ボクのお母さんのことコア!!」

あまりの「いぬわせ」に、ゆかりは思わず手を放す。すると、その生き物はバランスを崩し、床に強く頭を打つた。

「わっ、大丈夫!?」

また夢での出来事のように、この子が泣き出すのではないかと、ゆかりは心配になつた。しかし、その心配をよそに、謎の生き物はすくと立ち上がり笑顔を見せた。

「大丈夫リアー！」

その笑顔に、ゆかりもついおかしくなる。

「あなた、強いんだね」

言いながら、頭の打つた部分を擦つてあげる。大きなたんこぶができていた。自分が幼い頃であれば、きっと泣いていただろう。そのくらい、大きなこぶだつた。

「『めんね。あと、私は知らないんだけど、お母さんを探しているの？』

心配無用とばかりに、ゆかりの手を払いのけたと、その生き物は胸を張った。

「そりア！ ボクはお母さんを探すために、一人でこんな遠くまで來たりア！」

「こんな遠くまでって、あなた一体どこから來たの？」

「この生き物が、自分の夢の中から飛び出したりでなければ、果たして何なのか。すると、またしても奇妙な答えが返ってきた。

「ボクは心の国から來たりア！」

「心の国……？ それってどこにあるの？」

「すぐそこにあるけど、すこしく遠い場所リア！」

ため息が出てしまって、そのままの回答だった。結局、心の国がどんなところなのか、その場所も行く手段も分かりそうにない。

「お母さんは、どうしていなくなつたの？」

「分からぬリア！」

「いつからいなかつたの？」

「気が付いたらいなかつたりア！」

「じゃあ、いつまでいたの？」

「それも分からぬリア！」

元気よくはきはきと返事をする。面接などでは大事なことかもしないが、今は活発さよりもこの子の素性を知りたかった。まるで、履歴書も予約もなしに面接会場に現れたようなものだ。

「それじゃあ、あなたの名前は？」

記憶喪失です、なんてオチは無しでお願いします。ゆかりはそう願つた。すると、いつもなら五円や十円をひつたくなつたうえ、願い事を聞くだけ聞いてほつたらかす神様が、ぬいぐるみの名前を彼女に授けた。

「タリアアリアア！」

「タリアアリアア？」

「違うアリア！ タリアアリアア！」

「タリアリア」彼女は復唱する。

「タリア!! ……リア」

名前ひとつ聞くだけで一苦労だ。まったく、この子の行方不明の母親とやらば、どうしてこんな名前の子を、こんな語尾で話すよつて育てたのだろう。

「タリアね？」

「そつリア！ タリアリア！」

よつやく名前が分かったところで、ゆかりは更に核心に迫る。

「私は嬉野ゆかりってこうの。それで、あなたは猫さん？ 犬さん？ すると、これまでの全てに辻褄の合つ、奇跡の答えが返ってきた。

「ボクは、心の国の妖精リア」

「妖精……？」

ゆかりは、一つの仮説にたどり着いた。これは夢なのだ。打ち切られた、あの夢の続きだ。それならば早く起きないと、今度こそ本当に遅刻してしまう。

両手で、自分の頬を引っ叩く。じーんと痛みを感じた。そして、目の前の自称妖精は、相変わらずそこにいる。つまり、これは、夢じゃない。

「妖精——!?」

現実だと認識した途端、戸惑いは大きな驚きに変わった。彼女はマンガも読むし、ドラマも映画も見る。その中に架空の生き物が出てきたことは多々あるが、現実にそんな経験をした人と会ったこともなければ、会いたいとも思つたことはない。

だって、それは、ありえないことだから。

「あなた、本当に妖精なの!?」

「どこをどう見たって、ボクは妖精リア」

えつへん、と胸を張るが、どこをどう見たら妖精と言えるのかは分からぬ。

「じゃあ、妖精の村とかあるの？」

「だから、ボクは心の国から来たって言つてるリア」

あまりにも話を聞いてもらえないことに鬱憤も溜まっていたのだ

る。少し口調が激しくなった。

「あ、そつか。それで、お母さんを探しに来たんだよね？」

「そうコトア」

ふと、思つ。この子は、お母さんがいなくなつたといつのに、少しも寂しそうな様子がない。自分が幼少時に母とはぐれたときは、その場でどうしたらよいか分からずただ泣いていた。

「あなた、寂しくはないの？」

すると、意外な答えが返つてきた。

「“ ゆびしー ” って、何リア？」

あまりよく覚えてはいないが、ゆかりは幼稚園のころから、寂しい “ という言葉は知つていたはずだ。このタリアといつ妖精は、年齢的に 妖精に年齢の概念があるのかは不明だが 幼稚園はどうに過ぎてこないよつて思える。

「心細くなつて、悲しい気持ちになることだよ」

ゆかりは優しく教えた。しかし、またしてもタリアは首をかしげる。

「“ かなしー ” って、何リア？」

これには、ゆかりも驚いた。この子は、悲しいや寂しいといつ気持ちを知らない。それどころか、そんな感情を持つていないことここまで考えられる。

もしかすると、妖精と人間の感情の在り方は違うのかもしれない。しかし、妖精が決して群れず、単体で生涯を終えるのならまだしも、この子にはお母さんがいる。そして、その母が失踪し、探しているにもかかわらず、寂しいといつ感情を知らない。これは、矛盾しているのではないか。

「えつと、お母さんがいなつて分かつたとき、どんな気持ちになつた？」

ゆかりは慎重に尋ねた。

「いないなー、つて思つて、探しに行つて思つたりア」

「そんなこと……」

少し、考へることに脳が疲れたのか、頭がふらつとして言葉に詰ま

る。

「この子、タリアとこう「元気な妖精の子どもは、非常に素直で快活で、ゆかりは好意を抱き始めた。しかし、母がいなくなつたというのに、悲しいことも寂しいとも感じなかつたという。そもそも、そんな感情を持ち合わせていないのだ。

母がいなくなつたから、探しに行く。そんなことを、まるでテレビを見たいからリモコンを探す、ぐらぐらの感覚で行つてこる。

「寂しくも悲しくもないなら、どうしてお母さんを探してこるので？」

なんて馬鹿げた質問だらう、とゆかりは思つた。回答は、おおむね見当がついた。

「お母さんがないなくなつたからリア！ それに、お母さんに会えたら嬉しくからリア！」

嬉野ゆかりは、できるだけ、人に対するマイナスな印象を持たないよう努めてきた。例えそれが妖精であつたとしても、この考えは変わらない。綺麗事を言つなら、世界中の人類がみな平等で、争いのない平和な世界が実現できたら、それに越したことはないと思つている。

しかし、このタリアという妖精には、少し、ほんの少しだけ、氣味悪さを覚えた。

チャイムが鳴る。

休み時間の終了と、帰りのホームルーム開始の合図だ。

「あつ、いけない！」

すっかり時間の経過を忘れていたゆかりは、慌てて立ち上がり、飾り付けを終えたアーチを用具入れに戻す作業を始めた。

「いきなりどうしたリア？」

当然ながらチャイムの意味がわからぬタリアは、不思議そうに尋ねる。できれば片付けを手伝つてくれると助かるのだが、この小さな体ではそれも難しいだろう。

「「めんね。私、もう行かないといけないの」

すると、タリアは元気に返す。

「じゃあ、また今度リア！」

あまりにもあつさりとし過ぎていて、がつかりしてしまつ。もう少し別れを惜しんでくれると嬉しいのだが、悲しいといつ気持ちを知らなければ、別れの意味もあまり理解できていないかもしない。

「うん、また念えたらいちお詫しよつけ」

全てのアーチを用具入れにしまつと、ゆかりは妖精に別れを告げて体育館を飛び出した。彼女の背後に向かって、タリアは「ばいばい」と手を振り続けている。

教室に戻つたら、新しい担任の先生とちなみに大目玉を食らう」とだろう。そのうえ、初めて知り合つクラスメイトに笑われてしまつかもしだれない。

急がなければ、と走つて教室のある棟に入ろうとしたそのとき、一人の女の子が目に入った。この中学の制服を着ているが、迷子のようになんこちう顔をして辺りをきょろきょろと見渡している。

「こんこちう」ゆかりはその子に声をかけた。「もしかして、あなた、新入生？」

すると、その子の表情は一瞬ぱあつと明るくなつたが、すぐに下を向いてしまい、小さな声で呟つ。

「はい、少し来るのが早かつたみたいで、誰もいなくて……」

入学式は、在校生が下校した後で行われる。つまり、現在ゆかりを除いて行われているホームルームが終わり、生徒会ら有志が体育館に集まつて準備をしなければ始まらない。この子は、一時間ほど早く到着してしまつたことになる。

「それだつたら、保健室とかで待たせてもられないか聞いてみよつか」「はい、すみません……」

消え入りそうな声だつたが、また表情に少しだけ明るさが戻つたような気がする。

保健室に移動しながら、ゆかりは疑問に思う。無神経な気もしたが、先ほどの妖精の一件もある。ずばり、聞いてみることにした。

「そういえば、お家の人は？」

まさか、またお母さんがいなくなつたなんて言つまい。

「両親は、少し遅れて来ます……。母が入学式のプリントを持つていたから、私は何時に来たらいいか分からなくて」

困ったような笑みを浮かべる。そして、そのことに照れたのか、またうつむいてしまった。

「そりなんだ。あ、ここが保健室だよ」

一人は保健室に入り、先生に事情を説明して、入学式が始まるまでここで待機することを了承してもらつた。それと引き換えに、保健医からは、ホームルームが始まつて既に五分も経過していると知らされた。

「やばっ！　じゃあ、私も行へから！」

ゆかりが保健室の扉を開けて廊下に出ようとすると、新入生の子は一瞬ためらい、一呼吸おいて顔を上げた。

「あ、ありがとうございました！」

ゆかりは扉の取つ手を掴み、走り出したエネルギーをぐるっと一回転することで消費すると、彼女の正面に立つた。

「どういたしまして」

不安がらせないよう丁寧な笑顔を見せると、さりげなくではあるが、彼女もはにかんでくれた。

「入学おめでとう！」

最後にそう言つと、ゆかりは今度こそ自分の教室を目指して走り出した。そこで、彼女は今朝の占いコーナーを見損ねたことに気付く。きっと最下位だったに違いない。

そんなことを考えていながら階段までたどり着くと、体育館の方から大きな音が聞こえた。

「今度は何〜！？」

もう、早退してしまおうか。

1 3・誕生！ 売びのプリキュア

再び体育館に戻ると、そこにタリアの姿はなかつた。

そのかわり、体格のがつしりとした長身の男が、こちらに背を向けて立つていた。ゆかりは妖精の生態について詳しくはなかつたが、タリアが変化した形態だつたりしないことは何となく分かる。

「あのー……」

恐る恐る声をかけると、「ああ!?」といつ乱暴な返事がきた。どうやら、新しく赴任してきた先生でもないようだ。

男はこちらを振り返ると、ゆかりに向かつてゆっくりと歩み寄ってきた。思わず、後ずさる。

「わっしき大きな音が聞こえたんですけど、何してたんですか……？」

声が震えているのが、自分でも分かつた。悲しむことを知らない妖精の次は、キレ氣味の大男ときた。この体育館の治安は、春休みの間にどうなつてしまつたのか。

「うるせえ！」

それだけ言つと、踵を返し窓の方に近寄つてカーテンを勢いよく開ける。換気や日光を浴びることが目的ではないようで、彼は舌打ちをして地団太を踏んだ。

自転車通勤でもしているのか、ものすごい力だつた。男が床を強く踏む度に、体育館全体が揺れるほどの振動と、轟音が響く。さきほど音の正体はこれだつたのか。

「タリアー！　どーに隠れやがつたー！」

天井に向かつて叫ぶ。すさまじい声量だ。その迫力にたじろぎ、一度は係わるまいとその場を離れようとしたゆかりだったが、男がタリアの名前を呼び、その口調から察するに一人の仲は険悪らしいと想像して、足を止める。

「タリアー！」

すると、それを聞いた男はゆかりを田の端で捉え、にやりとした。「お前、あいつを知つてゐるのか。それならちよつといい

ゆかりは、本能的にまずいと思つた。これまでに彼女の人生では、幸運にも身の危険を感じる出来事に遭遇することはなかつた。しかし、今田の運勢は最悪に違ひない。

やはりと言つべきか、彼女は人質にされた。逃げようとしたところ、首根っこを掴まれ、そのまま腕を前にまわされ身動きがとれなくなつてしまつ。

「タリア！ 出でこな」と、じこつがどつたつて知らねえぞ！」
お願い、出でこないで、なんてドリマのヒロインの思考を真似してみる暇もなく、タリアは用具入れから飛び出してきた。

「卑怯リア！ イカリング、その子を放すリア！」

こんなベタな手に引っかかるなんて、もし漁業の妖精として生まれば、例え世界中の魚は釣り上げられているかもしない。そう、例えばイカとか……。

「イカリング……？」

どうしてタリアは、突然イカリングなどと言い出したのだろう。よほどお腹が空いていると、妖精は好きな食べ物が口癖になつてしまつのか。

「ふん、やこにいたか」

役目を終えたゆかりを突き放すと、男は用具入れに歩み寄る。

「さあ、イカリング！ 正々堂々とかくれんぼの続きをするリア！」

「かくれんぼじゃねえ！」

どうやら狙われているタリア自身には、まったくその直覚がないようだつた。

「あの、イカリングって……？」

一人で悩んでいても正解は導き出せやうになないので、ゆかりは思い切つて尋ねてみることにした。虹のビオレッタじゃあるまいし、どんな意図があつてイカリングなどと言つ出したのだろう。すると、男はにやつと笑い、拳で自分の胸をとん、と叩いた。

「俺のことだ」

「え、あなたが、イカリング？」

まったく意味が分からぬ。完全に人の姿はしているものの、その

正体はタリアに食べられた恨みをもつイカの怨念ともいいうのだろうか。

「俺は心の国の『怒りの王』イカリング！ イカすだろ？ ワイルドに言つた。

「つまり、イカリングがあなたの名前ってこと？」

「鈍いやつだな、そう言つてんだろ！」

思わずゆかりは噴き出してしまつ。人の名前を笑うなんて最低かもしれないが、さきほどまでの恐怖が一気になくなつてしまつた。

「何がおかしい！」

「ごめんなさい……、つい」

ようやく笑いがおさまると、そこにはイカリングの強面があつた。自分の名前をバカにされたと、頭に血が上り、タコのように真つ赤になつてゐる。

「この俺を、怒らせたな」

はつ、と思つたときにはもう遅い。イカリングは拳を高く掲げ、勢いよく床に振り下ろした。すると、体育館全体が揺れるほどの衝撃が起こり、床は大きく凹んでしまつた。逃げ遅れたゆかりの体は吹き飛ばされ、扉に衝突し止まつた。

「いてて……」

頭を打つたのか、視界が少しばやける。扉に背をもたれ落ち着こうとしたが、反対側から誰かが開けたせいで、ゆかりの体は仰向けに倒れてしまつ。

「誰だ！ サつきから騒がしい…………！」

入ってきたのは教頭だつた。足元に転がっているゆかりに注意を引かれそうになつたが、すぐに凹んでいる床とそのそばに立つている不審な男に目移りした。

「お前、何をしている！」

教頭の髪がない頭がフル回転し、イカリングを様々な言葉で責めたてる。しかし、叱られている本人は悪びれた様子をまったく見せず、笑つてみせた。

「いい怒りだ」

イカリングは、掌を教頭の方に向ける。すると、教頭の体から赤い光のようなものが現れ、それはイカリングの手の中におさまった。その光が体から全て抜けると、教頭は氣を失いその場に倒れた。

「先生！」

慌てて、ゆかりは教頭の体を支える。毛髪という防御力を失った頭をぶつけたりしたら、大変だ。

「先生に何をしたの!?」

「お前もタリアもむかつくからな。ビビらせてやるよ」教頭から吸い上げた赤い光を放つ右の拳を天井に向け、唱えた。「出てこい、オコリンボー!!」

赤い光は彼の右手から離れ、大きな塊となつた。徐々に形が生成され、それは巨大な人の怪物となる。鬼のような恐ろしい顔をして、その体はゆかりの三倍はありそうだ。

「何、これ……？」

ゆかりは目の前に現れた巨人に圧倒され、しばらくはただ茫然としていたが、今度こそ無事では済まないと判断して、その場から逃げようとした。

「おう、逃げるなら逃げる! タリアは連れて行かせてもらつぜ!」

恐怖ですっかり忘れていた。あの男の目的はタリアを捕まえることで、小さく無力な妖精は、まだ用具入れに隠れたつもりでいるのだ。

「もう、何なの……」

どうして自分がこんな目に合わなければならぬのか、とゆかりは思った。たしかに今日はちなんとの約束を破つて寝坊をした。ホームルームもさぼってしまっている。だけど、いいことだつてしまはずだ。

妖精とのありえない出会いを経験し、到着が早すぎた新入生と知り合つことができた。今日は素晴らしい出会いだらけの、楽しい一日になるはずだった。

しかし、あのイカリングとかいう男のせいで、体育館の床は壊されてしまった。それに、巨大な怪物は、タリアを捕まえようと用具入れの中を荒らすだろう。

あそこには、みんなで協力して作った、花のアーチが。

「やめて！」

無我夢中だった。気が付いたとき、ゆかりは怪物と用具入れの間に立っていた。

「何だ、戻ってきたのかよ？」

彼女の背後で、自分の陥っている危機を未だに理解できていないタリアが、物陰から顔を出した。

「ケンカはダメリア！」

「だめ、あなたは下がって！」

「この子は何も分かつてない。ゆかりは、そう判断した。心が幼すぎるのか、よほど無垢なのかもしない。だからこそ、守らなければ。」「どうしてそいつをかばう？　何の事情も知らないくせによ！」

「知ってるよ」

心を落ち着かせるため、息を吐くように言った。

「タリアは、お母さんに会いたがってた。もし、あなたがタリアを連れて行つたら、タリアのお母さんに会わせてあげられるの？」

夢の中で、タリアは泣いていた。あれば、ただの夢だとは思えない。きっと、何か理由があるはずだ。あのときは届かなかつた手。しかし、今は現実に、手の届くところにいる。

「それなら、今度こそ、悲しみから救い出せるかもしない。

「あなたに邪魔はさせない！　タリアのお母さん捜しも、入学式も…」「ふざけんじゃねえ！」

イカリングは非難するように怒鳴り、オコリンボーをけしかけた。「タリアは連れて行く…ついでに、その入学式つてのもぶつ壊してやるよ！」

巨大な手が、迫る。しかし、ここに退くわけにはいかない。退いてしまえば、みんなの思いが台無しになつてしまつ。

入学式にかける、みんなの思い。

つい先日、小学校を卒業したばかりの幼さの残る新入生たちが、緊張した面持ちで扉の前に立つ。家族の者も、早く入つてこないかとそわそわしているだろう。そして、それらは入場開始と同時に起ころる大

きな拍手により、喜びに変わる。

そんな瞬間を、ゆかりは心待ちにしていた。だからこそ、花のアーチをぐぐるとこいつ演出を提案したのだ。

「お前には何もできやしねえ！」

体が震える。巨人の攻撃をくらえれば、自分は……どうなってしまうだろう。ゆかりはそんなことを思った。気持ちの強さだけではどうにもならない。たしかに、私は無力だ、と。

だけど、今日は新学期初日なんだ。桜は満開、新しいクラスには、笑顔が溢れていた。中には、友達と違うクラスになり残念がっている者もいたが、それを補うほど新たな出会いが待っている。

そんな、喜びに満ち溢れた日なのだから。入学式を無事に終えるといつ、当たり前の、小さな奇跡があつたとしてもいいじゃないか。

「私はただ……！」

巨人の拳は、田と鼻の先まで迫っていた。不意に、どうしてこんなことをしているのだろうと、おかしくなる。

みんなの入学式のため？ 違う、そうじやない。ただ、自分がそうしたいから。それだけなんだ。

「私は……みんなの喜ぶ顔が見たい!!」

ゆかりの体から、ピンク色の閃光がほとばしった。それはまるで、彼女の心を映し出したかのように、優しく、穏やかな光だった。

「これは……!?

あまりの眩しさに、イカリングは田を細める。

光はどんどんその強さを増し、見えないバリアとなつてオコリンボーの攻撃から彼女を守つた。

タリアは、ゆかりの纏つ光を見てつぶやく。

「この光……」

しばらく、何かを思い出すようじっと光を見つめていたタリアは、興奮して叫んだ。

「プリキュアに変身するリィアー!!」

ゆかりの頭の上で、光は天使の環のような形をとつた。自分に何が起こっているのか、さっぱり分からなかつたが、どうすればよいのか

は、直感で分かる。

「プリキュア！ フィーリング・コネクト!!」

そう唱えると、光の環は彼女の体がくぐれるほどに大きくなり、ゆっくりと頭からつま先へと下りていく。環が通過した部分は次々と変身していく、最後に靴を変化させると、光はゆかりの右手の薬指で集束し指輪となつて現れた。

「みんなでつなぐ、喜びの環わ！ キュアリンク！」

プリキュアに変身したゆかりは、体の内から満ち溢れるエネルギーと、たくさんの喜びを感じた。

「てめえ……」

イカリングは彼女の姿を見て、驚きを隠せない様子だった。その声色は、虚しさと、微かな怒りを帯びていた。

「お母さん……」

懐かしむように、タリアが小さな声で言つた。先ほどまでの能天気さはどこにもない。まっすぐにキュアリンクを見つめ、その存在をしっかりとらえようと、瞳をこじらす。

「これは、何？」

ゆかりは変身した自分の姿を見て、戸惑う。制服や髪形も、まったく違うものになつた。それに、この胸の高鳴り。今なら、どんなことだつてできる気がする。

「プリキュアだと……。冗談じゃねえ！ やつちまえ、オコリンボー!!」

イカリングは激昂して、オコリンボーをたきつける。従順な巨人は、再びゆかりに向かつてパンチを繰り出す。

ここでキュアリンクが攻撃を避けてしまえば、後ろにいるタリアに当たつてしまふ。ならば、するべきことは決まつてゐる。一か八か、当たつて砕けろだ。

リンクは巨人目がけて、思いきりジャンプした。すると、予想以上に勢いがついてしまい、コントロールを失う。

「ぶつかるーつ！」

彼女の体は、巨人の顔面に激突した。しかし、痛みは大したことな

かつた。むしろ、ダメージを受けているのは巨人の方で、のうしんとう脳震盪でも起こしたかのようによろめいている。

「オーリンボー！ 何やつてんだー！」

そんなイカリングたちをよそに、タリアはゲームでもやっているかのように、楽しそうにリンクを応援する。

「今リア！ 必殺技リア！」

「必殺技!? え、どうやるの？」

「喜びを感じるリア！」

そんなやりとりをしている間に、巨人は体勢を立て直し、再びリンクに襲い掛かってきた。

「キューリンクだと!? 我はイカリングだぞ！」

どうやら、迷っている暇はなさそうだ。変身したときのよひこ、直感に従うしかない。

喜びを感じる……。タリアの助言に従い、今日のことを思い出した。

私の思いつきに付き合ってくれた、みんな。約束を守って、朝早くから作業してくれたちなみちゃん。そして、あの新入生の子。あの子は、不安そうな顔をしていたけど、入学式では笑顔になってくれるかな。

そんなことを思った。すると、指輪が大きな光を放った。喜びの力、みんなの力を感じる。

リンクは、迫つてくる巨人に対し、右手を向けて構えた。

「プリキュー！ リンクボーション!!」

彼女の手から放たれたピンクの光の束は、巨人の全体を包みこむ。攻撃を受けたというのに、巨人は安らかな表情をしていた。徐々に体から赤い光が現れ、教頭の元へ帰つていいく。さらに、イカリングによって凹された床も、何も無かつたかのように綺麗になった。

巨人は光が消えた後、完全に消滅した。

「バカな……、お前……！」

つむたえるイカリングを前に、リンクは構えを解いた。

「こんなこと、もうやめて」

変身も解き、ゆかりは真っ直ぐに相手を見つめる。その視線に耐えられなくなつたのか、イカリングは「くわつ」と呟くと、瞬間移動のよつなものでその場からいなくなつた。

「キュアリング、かつこよかつたりア!!」

タリアが無邪気に、ゆかりに抱き着く。それと同時に、ゆかりは床にぺたんと座り込んだ。

「どうしたリア？」

「腰が抜けちゃつて……」

夢じや、ない。プリキュアに変身して、巨大な怪物と戦つたんだ。まだ信じられない気持ちだつた。

「全部ちゃんと説明してもらつからね」

両手でタリアの小さな体を抱き上げると、少しむくれた調子でゆかりは言った。

「プリキュアは」

タリアが口を開いた瞬間、言葉は怒声にかき消された。

「ど、どこの行つた!? あの男……！」

教頭だった。田を覚ました途端にこの様子では、よかつた、怪我はしていないようだ。幸運にも、扉の方からではゆかりの体に隠れてタリアは見えない。

「君は何をしていろんだ!? ホームルームはとっくに始まつていろぞ！」

「ああ～～!!」

腰が抜けていたことも忘れて、ゆかりは立ち上がつた。教頭に頭を下げる、教室に急ぐ。

タリアを抱えたままだとこいつとも忘れて。

「あんた、どこの行つてたの!!」

教室に入るやいなや、ちなみに怒鳴られる。既に、新しい担任の先生は職員室に戻り、生徒も何人かは帰つているところだつた。

「寝坊の後はサボりつて、何考えてるの… とりあえず保健室に行つ

てるつて言い訳しといたけど。それに、そのねこぐるみは何?!

「えつ!?」、「これは……」

空氣を読めない妖精タリアが喋らないよう、先んじて口を開じカバンに突っ込んだ。

「まあ、いいかじや。それで? 時間は大丈夫なわけ?」時刻は、十一時を少し回ったところだつた。

「あつ!」「めん、すぐ帰らないと」

ちなみはやれやれといった様子でため息をつくと、ゆかりの肩に手を置く。

「明日、謝つてもうつからー」そして、笑顔をみせる。「アーチはオッケー?」

「うん、大丈夫」

「じゃあ、後は私たちに任せて、早く帰りな」そう言って、ワインクをする。

「じめん、じゃあまた明日!」

それだけ言つと、ゆかりは急いで帰路についた。通行人が誰もいない道になると、タリアがカバンから顔を出す。

「何を慌ててるリア?」

走りながら、ゆかりは答える。

「今日は、おじいちゃんの一周年忌なの。だから……」

「いつしゅうきつて、何リア?」

「人が亡くなるって、ちょうど一年後にやる行事というか……」

「亡くなるつて、何リア?」

家についたため、その問いには答えられなかつた。すでに、家族は準備のほとんどを終わらせているところだつた。

「おかえりなさい、思つたより遅かったのね」

母が迎える。朝から家事に準備に追われ、少し疲れた顔をしてくる。

「うん、ただいま!」

玄関に入り、廊下を通ると、広げてある扉から和室が見えた。そこに、祖父の仏壇がある。

「人が」「くなるってこういうのはね、その人がずっと遠くに行っちゃって、もう一度と会えなくなることだよ」

さきほど質問に、ゆかりは答える。タリアを抱えたまま、仏壇の前に座った。

「遠くに行って、一度と、会えない……」

タリアは仏壇を前にして、そう繰り返した。

2 1・愛と怒りのキュアルビー！

「プリキュアは、お母さんのお話で出てきた伝説の戦士リア！」

妖精の朝は早い。

イカリングとの戦いから一夜明け、新学期一日目の朝。ゆかりはまた一つ、妖精の生態について新たな知識を得た。

「キュアリンクは、喜びのプリキュア、リア！ だから、お母さんと間違えちゃったリア」

こんなに能天氣で快活な“喋るぬいぐるみ”をどうやってかくまうかという、タベの心配は杞憂に終わった。

流れで家に連れ帰つてしまつた後、祖父の仏壇を見て大人しくなつたタリアは、日が暮れる前に眠つてしまつた。よつほど疲れがたまつていたのだろう。

もしも法要中に部屋から出たらどうしよう、とゆかりは気が気でなかつたのだが、その寝顔を見た途端、全てのことを水に流してもいいように思えた。

妖精の存在、床を殴つて凹ませるほど の怪力をもつ自称“怒りの王”イカリングに、彼が生み出した巨大な怪物オコリンボー。そしてプリキュア……。

水に流してなるものか。

めずらしく早起きに成功したゆかりは、すでにタリアが目を覚ましていることを確認すると、改めて夢でなかつたことに狼狽し、顔も洗わずタリアを質問攻めにした。

「そのことなんだけど、私とタリアのお母さんって、そんなに似てるの？」

「そつくりリア！ ボクのお母さんは心の国の“喜び”リア！」

「お母さんが国の“喜び”って、どういうこと？」

「どうこう」とって、どうこうとリア？」

どうやら、質問が少し難しかつたらしい。ゆかりは頭をひねり、質問を易しくする。

「じゃあ、心の国つてどんなところなの？　まさか、飛行機で行けたりしないよね」

「ひーーきっと何リア？」

余計なことを言つんじゃなかつた。反省して、先の質問を繰り返す。

「心の国には、あなたみたいな……妖精がたくさん住んでるの？」

「そりア。でも、お母さんやイカリングもいたリア」

蛙の子は蛙というが、おたじやまくしが成長して蛙になるように、この妖精の子どもは成長すると人になるのだろうか。ゆかりは、今年の夏休みの自由研究は歩りそうだと、かすかに思つた。もちろん、提出はできないが。

「そ、あのイカリングつて人！　あの人も心の国の王様とか言つてたでしょ。一体何なの？」

タリアを無理やりにでも連れて行こうとした、気性の荒い男。彼もまた、心の国から来たと言つていた。あのときはゆかりも冷静さを欠いていたが、タリアを知つているのなら、タリアのお母さんとも知り合いのはずだ。

なのに、その子どもにあんな乱暴なことをしようとするなんて。ゆかりはそれが気になつていた。

「イカリングは、怒りの王、リア。昨日そう言ってたリア。人の話はちゃんと聞かないとダメリア」

ちつとも恨んでいる様子を感じさせず、タリアは言った。

“喜びのブリキュア”とやらに変身したゆかりだが、タリアを襲い入学式まで台無しにしようとしたイカリングに向けた感情に、“怒り”は含まれていた。なのに、狙われたタリア自身は、そんな素振りはまったくない。

「あなたは、本当にいい子だね」

小学校のころを思い出す。まだ先のことを考えて行動することができない、幼く残酷な心のせいで、ほんの些細なことでも傷つけたり傷つけられたりしたものだ。ただの笑い話が誰かの悪口に発展したり、今になれば可愛く思えるちょっかいでも、泣いてしまつ子はいた。

ほとんどは幼き頃の過ちとして忘れ去られているが、いくつかは消えない心の傷として残り、未だに忘れられないといふ子もいるだろう。

「私だったら……」

不意に脳みそが「氣づけ」という命令を出し、顔を上げると時計が田に入る。せつかくの早起きが、水の泡だ。

「遅刻だ〜〜つ!!」

時は金なり。しかし、お金と違い、時間は蓄えることができない。

家を飛び出したゆかりの心には、昨日と違つて少しばかり余裕があつた。

なぜなら、今朝は部活の朝練習に遅れかけているだけであつて、始業時間には軽く間に合ひ。

「せつかく早起きしたのに〜〜」

走りながら自分に愚痴をいじぼすと、タリアがかばんからひょっこりと顔を出した。

「じつしてそんなに急ぐリア？」

「遅れてるからだよ……つて、いつからかいに!?」

ゆかりはずっと、タリアに対しても考えていないのだといふ印象を持つっていたが、それは自分も同じことだった。

動くぬいぐるみを部屋に残して、家族に見つからないともかぎらない。それに、この子は母親探しの真っ最中だ。じつとしているわけがなかつた。

「昨日はここれに入つて來たから、今日もここれに入つて出でいくリア！」

「これは楽チンリア」

「もう〜〜 今日はここれでじつとしててよ〜〜」

不思議なことに、タリアが入つていると解った途端、かばんが重く感じる。走ることにも疲れ、よたよたした足取りで曲がり角にさしかかり、誰かにぶつかつた。

「わ〜〜、こめんなさい！」

「ちよつと、気を付けて……つて、ゆかり!?」

「あ、ちなみちゃん。おはよー」

ぶつかった相手は、ハンサムな転校生でもなければ、食べかけの食パンも咥えていない。見知った顔の、愛花ちなみだった。

「おはよー……じゃない！ 朝からそんなフラフラして、大丈夫なの？」

「どうにかこうにか……」

苦笑いしながらタリアをかばんの奥へ押し込むと、ちなみにはみつたら朝一番で聞きたいことがあったのを思い出した。

「そうだ！ 入学式は？ 大丈夫だった？」

怒った顔から一転、ちなみにはみはにっこり笑うと拳を握つて親指を立てるた。

「ばっちり！ 最高の入学式だつたよ」

ゆかりは、ほっとした気分になつた。いきなり現れたイカリングのせいで、一時はどうなることかと思つたが、みんなの思いを無駄にしてないで済んだ。

「ゆかりにも見せたかつたよ、新一年生たちの顔。春休みの努力が、なんだか報われたって感じ」

再び学校に向けて歩き出しながら、ちなみは色々と想いを馳せているようだつた。それを聞いて、ゆかりの心も温かくなる。

「そう……、よかつた」

入学式で、新入生のみんながどんな顔をしていたか、何となく想像はついた。ゆかりだつて、つい昨年まったく同じ経験をしたのだから。喜び、不安、期待……。それらが入り混じつた表情。

そこには、きっと、哀しみなど存在しなかつただろう。

「それで？ ゆかりが朝練に出てくるなんて、どうこいつ風の吹き回し？」

感傷的になつているゆかりの心情を察して、ちなみはわざとらしく嫌味を言った。

「もう一度、みんなにお礼が言いたくて。アーチ作り手伝ってくれて、ありがとうって」

照れくさくなつて、笑つてごまかす。

「こんなの、ガラじやないけど」

「そうかもね。でも」

学校の門が見えると、ちなみは走り出した。ゆかりが慌てて追いかけようとしてくるのを確認して、くるりと振り返る。

「変わったよ、ゆかりは」

それだけ言つと、テニスコートを田指して笑いながら走り出す。ちなみに言葉を受けて、ゆかりは何となく「そばゆい気持ちになり、彼女の後を追いかけた。

テニスコートでは既に三年生の先輩が数人、朝練習を始めていた。

「先輩たち、やっぱり早いね」

感心してゆかりが言つと、普段から朝練習に参加しているちなみは呆れた素振りを見せた。

「だつてウチの学校の運動部、三年生はあと一か月で引退なんだよ？ 気合いも入るつてもんだよ」

「そつか……、そうだよね」

改めて、みんなへの感謝の思いが溢れてくる。先輩たちも、アーチ製作を手伝ってくれた。残り少ない部活の時間を割いてまで、ゆかりに付き合つてくれたのだ。

「じゃあ、先輩たちの後を継げるよつに頑張らなきやね！」

自分に喝を入れて、一人は着替えるために部室へ急いだ。ちょうどドアノブに手を伸ばしたとき、向こう側から誰かが開けたため、ゆかりの手は宙をつかんだ。

「お、ゆかりとちなみじやん。一人揃つて朝練なんて、珍しいね」

「キャプテン、おはよつじやこます

「おはよつじやこます。忍先輩は、今日遅いんですね。何かあつたんですか？」

出てきたのは、女子テニス部のキャプテンである忍先輩だった。二人は入部したての頃、まだコートに入らせられない分、朝練習に一番乗りしようとしたことがあった。しかし、一人でコートを整備している忍の姿を見て、自分たちは一番であると知ったのだった。

「もしかして寝坊ですか？ 私は今朝は早く起きたんですけど、つい
のんびりしちゃって」

ゆかりが語りつと、「あんたと一緒にするんじゃないの」とかなみに小
突かれた。

「いや、そうじゃないんだけどね」田の前のやりとりに微笑みながら、
忍は続ける。「なんか弟が、今日は俺が朝飯作る。って張り切つて
ね。任せてみたら、案の定だめだめで一度手間とらされたってわけ」
「先輩、弟さんがいたんですね。ていうか、いつもは忍先輩が朝ご飯を
？」

知り合つて一年も経つといつのに、先輩のプライベートについて何
も知らなかつたことに驚き、ゆかりは尋ねた。

「わたくしは両親が離婚しちゃつて、母親だけだからね。こう見えても家
事は得意なんだよ」

「あ、そつなんですか……。すみません、悪いこと聞いちやつて」
「いいよ、全然、気にしなくて」手を横にぶんぶん振り、忍は「むしろ
気にされる方が変な感じ」と言つた。

昨年、祖父を亡くしたばかりのゆかりにとっては、気にせずにはい
られなかつた。生まれたときから、誰よりも近くでずっと暮らしてき
た人がいなくなるというのは、世界が変わることに等しい。

そのとき、自分は誰かに寄りかかることができなかつたが、先輩
は弟の面倒も見ていくといつ。ならば、自身の哀しみはどうやって処
理したのだろうか。ゆかりはそんなことを考えた。

「いやー、ウチにも弟いるんですけどね、手がかかるだけで何もしない
んですよ。朝ご飯作つてくれようとするなんて、いい弟さんじゃない
ですか」

ちなみみがそう語つてしばらくなは、姉同士の弟トーケが繰り広げら
れ、ゆかりが入る余地はなかつた。一人つ子は羨ましいなどとよく言
われるが、彼女にとつては兄弟の話ができるほうがよっぽど羨ましい
と思つた。

「おつと、それじゃ、私はそろそろホールに行くか。一人も早くしない
と、朝練なんてすぐに終わっちゃうからね」

駆け足で「一トへ向かう忍を見送り、一人は部室に入った。

「まあ、家庭の事情なんて人それぞれだよね」

部室には個人のロッカーなどはなく、机や椅子や棚が幾つか並べてあるだけの内装になつていて。元々は教室の備品だったが、古くなつたり使わなくなつたものをテース部が譲り受けたのだった。ちなみに机の空いているスペースに荷物を置きながら、ゆかりに話しかける。

「最近じゃ離婚も珍しいことじやないし、忍先輩はタフだから大丈夫だよ」

「ありがとう。うん、そうだよね！ 先輩が元気なのに、私が勝手に落ち込んででもどうにもならないもんね」

ゆかりもかばんを置き、体操着を取り出そうとファスナーを開けた。すると、中で大人しくしていたタリアが顔を出す。

「もう出ていいリア？」

「わっ！」

慌ててファスナーを閉めるが、狭い部室の中だ。ちなみに聞き逃しだなら、運に感謝しつつ彼女に聽力検査を勧めなければならない。

「今の声、誰？」

「えっ!? 誰つて、何が？」

机に背を向け、後ろ手にかばんを隠す。その様子を不審に思つたちなみに近づいてくる。

「たしかに何か聞こえた」

「えっと、『きふりが見えて、ちよつと悲鳴をあげたかな』……」

距離を詰めてくるちなみに制しようと、ゆかりはストップの意味を込めて手のひらをちなみにの方に向け両手を差し出した。

「ゆかり、何その指環!!」

しまつた、と思い右手を引っ込めようとしたが、ちなみに手首を掴まれてしまつ。

「学校にこんなものしてきて！ しかも、指環はめたままテースするつもりだったの？ 怪我するよー！」

「いや、これは……」

言い訳する暇も「」えず、ちなみには指環を薬指から抜き取った。

「これは放課後まで没収」

すると、どうしても我慢できなかつたのか、ファスナーをじり開けてタリアがかばんから飛び出した。

「その指環を返すリア！」

時間が止まる。

ちなみには、親友のかばんから現れた奇妙な生物を見て、固まつていた。しかも、その生物は言葉を喋つている。

何がどうなつてゐるのか、さんざん思考をめぐらせてみひやく、かばんの持ち主に聞くべきだと判断した。

「何、これ……？」

タリアを指せしめて、尋ねる。ゆかりは、ただ頭を抱えることしかできなかつた。

2.2・愛と怒りのキュアルビー！

「つまり、あんたはよその世界から来た妖精で、お母さんを捜している。そして、なぜかそれを邪魔する男がいて、ゆかりはそいつからこの子を守つてゐるってワケ？」

妖精という非現実的な存在を目の当たりにして、ちなみが見せた反応は、昨日のゆかりと同じものだつた。

初めはどうやって誤魔化すかと頭をめぐらせていたゆかりだったが、タリアが勝手にぐらぐらと喋り始めたことで、眞実を言うしかないと悟つた。もつとも、タリアといつ生きた証拠がいるのだから、二人の話を信じるほかに合点はいくまい。

「なるほどじねー」

「うんうんと、ちなみは大きく頷く。

「信じてもらえた!?」

「ぜんつぜん…」

椅子にどつしりと腰をかけ、タリアを凝視する。よくできたぬいぐるみ……ではなさそうだ。自由に動いて、会話もできる。二十一世紀もまだ序盤だといふのに、そんな技術がおもちゃ会社にあるわけがない。なら、本当に、生きた妖精なのか。

自問自答を何度もくり返しても、他に納得のいく答えは出なかつた。「じゃあ、昨日のホームルーム中に聞こえた音つて、まさか……？」

「うん、私がオーリンボーッていう巨人と戦つてたの」

「戦つてた……って、あんたねえ」呆れたようにため息を吐く。「何で戦う必要があるの？」

質問の意味が、ゆかりにはよく分からなかつた。異世界から現れた、常識外れの力をもつ怪物に襲われたのだ。戦わなければ、無事では済まなかつただろう。

「何でつて、タリアを無理やり連れて行こうとしたんだよ？」

「いいじゃない、連れてつてもらえば」

簡単に言つ。かつて、ちなみはイカリングの凶暴さを知らないか

ら、そんなことが言えるのだ。

「話を聞いてりやこの子、ただお母さんを捜すつてだけで他のことは何も考えてないみたいだし。もしかしたら、誰にも言わずに出てきたのかもしない。もし私の弟が勝手になくなつたら、応援を呼んで一緒に探してもらうし、その……なんだつけ、イカリング？ つて人もそんなんじやないの？」

「違うよ… だつて、イカリングはタリアを力ずくで……」

ゆかりにどつても、タリアの話に出てきた登場人物の関係性はよく分からぬままだ。少しあなみと同じ考えが頭をよぎつたこともあれば、自分はタリアをどうしたいのかはつきりとしないままになっている。

しかし、理屈は抜きにして思うこと。それは、プリキュアに変身したときの気持ちと変わらない。昨日の夢のように、タリアに悲しんでほしくない。それだけだ。

「こんな小さな子が、別の世界に一人で来てるんだよ？ 帰りたくないって言つても、力ずくで連れ帰るでしょうが」

ちなみに主張は変わらない。現実的ともとれる意見だが、ゆかりには、ただ面倒事を背負い込みたくないだけのように思えた。彼女が知つてゐる愛花ちなみは、そんな排他的な人間ではないのに。やはり、落ち着いてこようつて見えて、内心かなり動搖しているのかもしねえ。

「ボクはお母さんを見つけるまで帰らないリア！」

いきなり口をはさんできたタリアに顔を近づけ、ちなみはやんぢやな子を諭すような口調になる。

「家でこに子にしてたら、お母さん歸つてくるかもしねえよ？」

「嫌リア！ ボクは早くお母さんに会いたいリア！」

「話の分かんない子だねえ。あんたの我が儘で、色んな人が迷惑するかもしれないんだよ。ゆかりも、イカリングつて人も。それに、あなたのお母さんも」

「私は別に迷惑だなんて思つてないよ？」

嘘つき、と自分を責める。もちろん、タリアの存在が迷惑だという

わけではない。ゆかりには、たったの一晩しか身の回りで起こった現象について考える時間は与えられなかつたが、自分はいい事をしていると確信していた。しかし、ちなみがすぐに的確な疑問を投げかけたことで、その気持ちが揺らぐ。

タリアの母親捜しは、どのくらい順調に進んでいるのか。何の見当もついていないのではないか。いつでもゆかりが変身して戦い、タリアを守るなんてことは不可能だ。また、守りきれる保証もない。それなら、イカリングを信じて心の国に連れ帰つてもらひのが、みんなにとつて最善の選択なのだろうか。

「だけど、お父さんとか、他のお家の人が心配すると思うよ。一旦お家に帰つてみるとどう?」

胸に、ちくくりと毒針が刺さつたような気分がした。その毒は彼女の心を漫食していき、自己嫌悪させる。迷惑じゃないと言つた次の言葉が、これだ。遠回しに帰つてくれとの意味が含まれていることは、誰が聞いても明らかだ。

「ボクはお母さんを捜すリア!」

変わらない頑固な姿勢に、ゆかりはほつとした。もし、先ほどの言葉で本当にタリアが帰つたら、どんなに自分が責めても足りなかつただろう。

「とにかく!」大きな声でちなんが言つ。「埒が明きたくにならないから、その続きを放課後にでも。ゆかり、早く着替えよ! 朝練終わっちゃうよ?」

今朝はどうにも時間の経過を忘れてしまう。またしても早起きが無駄になるところだ。一人はさつやと着替えて、ラケットをケースから取り出す。

「じゃあ、私たち行くから。そこで大人しくしてることだよ?」

部屋を出ようととして、ゆかりは荷物の方を振り返つた。タリアはかばんから顔だけ出した状態で、ぼやつとした表情をしている。考え方でもしてこいるのか、彼女の言葉は耳に入らないようだ。

ゆかりたちが部室を離れた後、残されたタリアは自身の体三つ分はある机の高さから飛び降りた。どうにか扉を開け、外に出る。

「お母さん……」

「ホールの方から、ゆかりたちの元気な声が聞こえてくる。しかし、タリアはどちらに用もくれず歩き出した。どうに向かうのか、そんなことは考えていない。」

数十分後、朝練習を終えいち早く部屋に戻ってきたゆかりは、タリアの姿を見つけられなかつた。

もしかして、先せどいのやり取りで居心地が悪くなつてしまつたのだろうか。やう思ひどり、ゆかりは何かもやもやしたものが心につかえていねむつた気持ちになる。

その日の授業はあるで手につかなかつた。

タリアは今どじどどうしてこるのだらう。そんなことをずっと考えていくうちに、気がつけば帰りのホームルームが終わり、みんなは帰る支度を始めていたのでした。

「ゆかり、部活行くよ」

かばんとリケッシュトを肩にかけ、ちなみにはじつもと変わつた様子はない。今朝の話を、もう忘れてしまつたのだらうかと思つてしまひ、タリアがいなくなつたことにも無関心だ。ゆかりの額に拳をこすり、
「ほーつとしどぎ」と顔を覗いてくる。

「うん、ちょっと待つて」

机上に出たままになつてゐる筆記用具やノートをかばんにつけ込む。タリアが入っていたスペースが空いたため、かばんはすかすかだ。持ち上げると、軽くなつたことを考えていなかつたため、つい勢いがつせすぎてしまつ。

「あの子の」と、

部室に移動する途中、ちなみに尋ねてきた。

「うん。何も言わずにこなくなつちゃうなんて」

「思つたんだけじや、あの子つてひょつとすると迷子なんじやない?」

靴を履き替えて校舎を出たとき、ちなみはある仮説を展開した。

「お母さんを捜してゐなさいと言つてたけど、本音はこなくなつたのはあの子の方で、お母さんがあの子を捜してゐるんだよ、きっと」

「どうしてそう思うの？」

「だって、心の国つて場所が本當にあるとして、あんな小さい子がどうやつて来たの。それに、搜してお母さんだつて心の國の人なんですよ。だったら、どうしてこっちの世界にまで来るのよ」

ゆかりは、昨日の出来事を現実だと受け止めたはずなのに、本當はひたすら現実逃避していたのだと知った。ちなみの言つていることは、あまりにも正しく、返す言葉が見つからない。

「きっと、何かの間違いでこっちの世界に迷い込んで、色んな人がある子を捜してゐるんだよ。で、今朝誰かが見つけて連れ帰つたつてトコじゃない？」

「でも、もし昨日みたいに襲われてたら……」

「別にさ、怪力で巨人を生み出す能力があつたとしても、心の国ではそれで悪人つてことにはならないんじやない？ 逆に向こうの人からしたら、道路を歩いて自動車に出てくわしただけで襲われたつて思うかもよ」

「そうかな……」

「ほら、映画なんかでもよくあるでしょ。主人公が突如現れた謎の人物に関わったせいで、『こたごた』に巻き込まれていく話。ゆかりはその立場にあつたんだつて」

アクション映画が好きなちなんとは違い、恋愛ものやヒューマンドラマ系の映画しか見ないゆかりは、その“『こたごた』”が悪いものだとは思えなかつた。スパイ映画などでは、何も知らずに美人の女スパイを助けた主人公が、組織に謎の危険人物との判断をされ、散々な目に遭う。しかし、恋愛映画でもスパイ映画でも、最初の好ましくない出会いは、素敵な関係へと発展していくのだ。

「でも、せつかく会えたのに、もうお別れだなんてちょっと寂しいよ」
基本的には、ストーリーの中盤で女スパイは組織に捕まり、危険人物と誤解されていた主人公は、彼女を忘れるように指示される。王道はそんなところだ。そして、主人公は機転を利かし、単身で彼女を奪い返すために立ち上がるのだ。

ちなみに先を歩き、部室の扉を開けたとき、ゆかりは心を決めた。

無駄骨でもいい。ただ、このままでは自分の気が済まない。

「私、タリアを捜してくる…」

その辺の机に荷物を放ると、ゆかりは振り返って扉を開けた。ちなみは驚いて咄嗟に声が出ず、ゆかりの腕を掴んだ。

「ゆかり… アテもなくお母さんを捜してる子を、アテもなく捜すつての？ そんなの無理だつて」

「とりあえず近くを一周まわつてくるだけ！ すぐに帰つてくるから、キャプテンには走り込みに言つたつて伝えておいて！」

ちなみの手を振りほどいていたが、その力は強く、なかなか放してくれない。

「だめ、行かせない！ あんた、昨日もあの子の為に危険な目に遭つたんでしょ？ そんなのダメだよ！」

「ちなみちゃん…」

「ようやく分かつた。どうしてちなみが、タリアに対してもうことなく素つ氣なかつたのか。そして、ゆかりは少し嬉しくなる。

「ありがとう、心配してくれて」

「昨日はホームルームいなかつたし、今日は部活を抜けようつての!? そりゃあの子のことも心配だけじ、このままじゃあんたが駄目になつちやうよ！ それに、ゆかりは入学式の準備だけですごく頑張つた！ なのに、どうしてまた人の為に頑張らなことこけないの…」

昔のことを、すこしだけ思い出した。人の為に頑張る。それを教えてくれた人が、誰だったか。

「だけど、ちなみちゃんも頑張つてくれてる」

腕を掴んでいるちなみの手に、自身の手を重ねる。

「ちなみちゃんは今、私のために怒つてくれてる。それと同じだよ

一つずつ、ちなみの指を腕からはずす。今度は力が入つておらず、あっさりと手を放してもらつことができた。

「今朝、私に言つてくれたでしょ？ “変わった”つて

ちなみは、何か言つたそうな顔をしていた。しかし、言つべき言葉が見つからぬようで、口をぱくぱくさせてくる。そんな彼女を見て、ゆかりは微笑む。自分がタリアのことを心配している以上に、ち

なみは自分のことを見配してくれているのだ。

「ちなみにちやんが、変えてくれたんだよ。だから、大丈夫」
部屋を出るとき、ゆかりは振り返らなかつた。そのことにちなみ
は、何となく寂しい気がしたが、友人として誇らしくも感じた。
「あまり遅くならないでよね」

ようやく言葉が出たときには、ゆかりの姿はもう見えなくなつてい
た。先輩への言い訳を考えながら、ちなみは体操着に着替える。

「ビーに行つたんだろう。近くにいるといいけど」

ゆかりが学校を離れて数十分、タリアはまだ見つからない。

そもそも、今までの彼女の常識では、いるはずのなかつた妖精を捜
しているのだ。四月にサンタクロースを叩撃するよりも、はるかに難
しい。

心当たりなどもあるわけがなく、ひたすらに町内を走り、公園の茂
みの中を覗いたりもした。

そのうち、ちなみの言つように、心の国から保護者が迎えにきたの
かも知れないと考えるようになる。

しかし、そうでなかつたとしたら?

一人で迷子になつてゐるかも知れない。どんなに明るい性格でも、
母親とはぐれ自分がどこにいるか分からなくなれば、不安になるもの
だ。または、イカリングに襲われてゐるかも知れない。まだ諦めて帰
るには早いと、ゆかりは思つた。

すると、彼女の根気が運に勝り、大きな手がかりを得ることができ
た。その手がかりは、人けのない路地で空から降つて現れた。

「よう。タリアはビーだ？」

まだ、タリアはこちらの世界にいる。そして、イカリングにも見つ
かっていない。かなりの収穫を得たが、大きな損失も出た。ゆかりの
身の安全だ。

しかし、プリキュアに変身すればとんでもない力が発揮される。彼
女はそれをアテにして、いつ攻撃されてもいいように身構えた。
「ビーだつて聞いてんだろ？が！」

イカリングは地面を蹴って、ゆかり曰がけて突進した。

変身だ！

右手を前に突き出し、昨日のことが一度限りの力でないことを願つて、ゆかりは唱える。

「プリキュア！ フィーリング・「ネクト」…」
しかし、何も起こらない。

彼女の右手の薬指に、指環は無かつたのだ。

基礎練習が終わり、休憩に入ったちなみは、冷水器で水を飲んだ。休憩時間は短い。急いでいたために、口元が少し濡れてしまい、ハンカチを取りに部屋に戻った。

「あー、ゆかりなび！」リア？

当たり前のよう、タリアがゆかりのかばんに納まっていた。これが漫画であれば、ちなみは飲んだばかりの水を噴き出していたかもしれない。そのくらい驚いたが、水は既に飲み込んでいた。

「あんた、何で一人で戻ってきてるの!?」

落ち着く前に、まずは最初の目的を果たすと、ちなみは制服のポケットをまさぐる。ハンカチの感触が指に伝わり、それを引っ張り出すと、ハンカチと一緒に何か固いものが床に落ちた。

「あ、これ……」

それは、ゆかりから没収した指環だった。拾おうとするとい、タリアがかばんから飛び出して、先に奪取した。

「これは、キュアリンクの指環リア！ 早くゆかりに返すリア！」

「キュアリンクって、あんたたちの話に出てきたプリキュアのこと？」「そうリア。この指環に込められた喜びの力が、ゆかりをキュアリンクに変身させるの！」

「変身できないと、どうなるの？」

「戦えないリア」

嫌な予感がした。そして、いつこうとやのちなみの予感は、必ず当たる。こと、ゆかりのトラブルに関しては。

イカリングとかいうふざけた名前の男が、まだこの辺りをうろついて

ているとしたら……。同じものを搜しているのだから、ゆかりと鉢合わせないと限らない。

「もしかして、やっぱーんじゃない？」

ちなみは指環を持って部屋を飛び出した。しかし、すぐに戻つてくるとタリアをかばんにつめ込み、それを持ち出す。万が一のとき、役に立つかもしれない。もっとも、ゆかりが指環もタリアもちなみも必要としていない状況が、理想ではある。

2 3・愛と怒りのキュアルビー！

ゆかりが走り込みに行つたきり戻つてこないので様子を見てくる、と忍先輩に言い訳をして、ちなみには町内を捜しまわった。

「確認だけど、あなたの話、全部本当のことなんでしょうね!?」

「嘘じゃないリア！」

タリアの入つたかばんを抱えた状態で、ちなみには走り続ける。妖精というのは、もう少し華奢なものだと思い込んでいたが、それなりに重く、彼女の体力を削つていいく。りんご三つ分より、はるかに重い。「イカリングつてのがゆかりと会つたら、やばいかな」

今朝の話を全て信じるとしたら、イカリングという男はとてつもない怪力の持ち主だ。タリアのことを諦めるように、ゆかりには悪人ではないかもしれないという仮説を唱えたが、危険であること間に違はない。

それに、タリアと同じく心の国の住人だ。こんな能天気な妖精がいるくらいだから可能性は低いとは思われるが、暴力の道徳的觀念がこちらの世界と異なるとしたら、もっと性質が悪い。

「イカリングは、怒りの王、リア。きっと昨日の戦いに負けて、すぐ怒つてるリア！」

「王なら自制心くらい強く持ちなさいよ!!」

プリキュアに変身してオコリンボーという巨人と戦つたなんて現実離れた話を、ちなみにはまだ信じられないでいた。心の国と妖精の存在に関しては、タリアとこうして言葉を交わしている以上、認めざるをえない。

しかし、あのゆかりが、変身して戦うなんて想像もつかなかつた。ちなみに知る嬉野ゆかりという人物は、『戦い』とはまるつきり縁がない。事が大きすぎで今回の場合、ほとんどの人間はそうであるといえるが、ゆかりはどんな些細な争いからも逃げてきた。

小学生のとき、クラスでいじめのよつなことがあった。

休み時間に数人の男子グループが、タベのテレビ番組について話し

ている。「あの芸人おもしろかったよな」という「*ノマニ*」へ自然な会話が、いつの間にか、汚れた芸を披露した芸人の顔がクラスの地味な男の子に似ているという一人の発言により、いじめに発展した。

標的にされた男子が、そこで「似てねーよ」とはつきり言ってしまった。「冗談で済んだかもしれない。しかし、その子は言ひ返せなかつた。

調子に乗ったグループの男子が、「ちよつとモーマネやつてみるよ」と言つと、取り巻きが囁き立てる。男の子はつづむいてじつと堪えていた。そして、教室にいたクラスのみんなは、誰も助け舟を出さなかつたのだ。

もちろん、ゆかりもそこにいて、何もしなかつた。何もできなかつた。

そんな彼女が、初めて会つたばかりのタリアを助けるために立ち向かつた。事情も知らず、ただタリアを守りたい一心で、彼女は戦うことを選んだのだ。

ちなみに彼女がどんなに現実的な意見をぶつけてみても、ゆかりはその意思を変えなかつた。何が彼女をそうさせるのかは分からぬ。きっと、本人も深くは考えていないだらう。

タリアの言つていることが全て虚言で、イカリングが本当にタリアを迎えるにきただけの保護者であったとしても、ゆかりが勘違ひしていだと謝ればそれでいい。間違うこと、自分が恥をかくことを厭わず、彼女はその道を進むことに決めたのだ。

それなら、とちなみは思つ。

ゆかりと同じ道を進み、一緒に間違い、一緒に恥をかこう。

間違つていたら、一緒に謝る。イカリングが本当に敵なら、一緒に戦う。自分に何ができるかは分からなかつたが、何もできなくてても、ゆかりを支えようと心に決めた。

だから、ちなみは走り続ける。ゆかりが無事なら、それでいい。捜してゐる間に、学校に戻つてゐるかもしれない。だけど、そうじやなかつたとしたら……。

重いかばんを抱え、汗まみれになつて闇雲に走る。ばかみたいだ、

と自分でも思つた。

「だから何……」

私は何を考えているんだと、ふつと笑う。ばかは散々やつてきた
じゃないか。そんなことは、どうでもいいんだ。

ただ、ドジはしたくない。ゆかりのピンチに、私が駆けつけられな
いようなドジは……。

「何で変身できないの～!?」

とんでもないドジを踏んだゆかりは、ひたすらイカリングから逃げ
続けていた。

変身のときに現れた光の環。それが指環になつた。つまり、プリ
キュアの力はある指環がないと發揮されないとことなのだろう
か。そんなこと、タリアは一言も言つていなかつたのに。

心の中でタリアを責めつつ、人通りの多い通りに出る。こんなところでは、イカリングも襲つてこないだろうと考へたのだが、それは甘かつた。一般的な理論など、心の国では通用しないのかもしけない。
「どうしてプリキュアに変身しない!? 僕をなめてんのか！」
「変身できなーんだよ～!!」

通行人を巻き込むわけにはいかない。ゆかりは誰もいない公園に入る。昨日、オコリンボーは教頭の怒りによって生み出された。怒っている人がその場にいなければ、あの巨人は出現できないのではないかと予想したのだ。

見当違ひではなかつたようで、イカリングはまだオコリンボーを生み出そとはしない。もちろん、プリキュアに変身できないゆかりには、単身でも十分といふことかもしだれないが。

「変身できないだと？」はつ、やつぱりてめえなんかに、喜びのプリキュアになる資格なんてなかつたつてわけだ」

「ねえ、教えて！ どうしてあなたはタリアを狙つの？」

戦えないとなれば、話し合いで解決するしかない。とにかく無邪気なタリアに話が通じなかつたように、この怒つてばかりの男と落ち着いて話し合える確率は低いだろうが、時間は稼げる。その間に、なに

か策を講じなければ。

「言つただろ、俺はタリアにムカツいてんだよ！」

「どうして、あんな小さいう子に！」

「小さからうが大きからうが関係ねえ！　ムカツくもんはムカツくんだ！」

「じゃあ、何で心の國に無理やり連れて帰らうとするの!?」

「「「けやじけやひむせえんだよ！　お前が俺に負けたら教えてやる！」」

イカリングはすべり台の階段の部分を持つと、全体を地面から引き抜いて持ち上げた。床を凹ませるパンチと比べて、どちらの方が筋肉を酷使するゆかりには分からなかつたが、そんなことなどいでもいい。

すべり台は滑つて遊ぶもので、投げるものではないのに。宙を舞うすべり台を、偶然と見つめるしかなかつたゆかりは、しばらくしてそれが自分に直撃する軌道を描いていることに気付いた。

しかし、避けるには遅すぎた。奇跡的に痛くありませんようにと願い、腕で頭を守る。

「ゆかりっ！」

一瞬がスローモーション映像のように流れた後、ゆかりは地面に倒れ、すべり台は彼女の体から数メートル離れた場所に、大きな音を立てて落ちた。

ゆかりは体を擦つたが、すべり台に降つてこられるのと比べたら大した怪我ではない。訳が分からずとりあえず立ち上がりうとしたとき、体の上にちなみが覆いかぶさつていふことに気付く。ちなみが、間一髪のところで硬直していたゆかりにタックルしたおかげで、直撃から免れたのだ。

「あんた、何ぼーつとしてんのー！」

立ち上がったちなみの表情からは、血の気が引いているのが見てとれた。

「ちなみちゃん、どうしてここに？」

「そんなことばっかりでもいいから！ 戦うとか、何かよくイメージ湧かなかつたけど、今の何!? 怪我じゃ済まなかつたよ!!」

ゆかりの肩に置かれた手は、震えていた。彼女を見つめるのがと一秒でも遅かつたら、どうなつていたか。考えるだけで恐ろしい。「やつぱりだめ！ 関わつたらいけない世界だつたんだよ。逃げて、警察に行こ？」

関わつたらいけない、なんてちなみの口から聞きたくなかった。

「警察……」

こつでも、ちなみは正しことを囁つ。ゆかりはそう思つていた。しかし、今回のことに関しては、首を縦に振ることはできなかつた。警察が妖精や心の国といつた話を信じてくれるとは思えない。もし助けてくれたとしても、イカリングとどうやって戦う？ 最悪の場合、発砲もやむなしと判断するだつ。いぐら氣性が荒く、目的が知れない恐ろしい相手だとしても、死んでいい理由にはならない。

「私がやらなきゃ……」

「あんたに何ができるのー… やつきて危なごとひだつたじやないー… 何もできなかつたからでしょ!!」

無理にでも連れて逃げようとするゆかりの手をつかんだとき、指環の存在を思い出した。指環がなければ、ゆかりはプリキュアに変身できない。戦えない。そのことを訴えれば、きっと諒めもらつてゐる。

ところが、彼女のかばんからタリアが顔を出し、ゆかりに指環を吐き出した。

「ゆかりの指環、持つてきたリアー… これでプリキュアに変身して戦うリアー！」

頭に血が上り、ちなみは理性を失こうになつた。この妖精、何を無邪気に言つてゐる？ これはゲームじゃない。試合でもない。戦つて、負けたら、死ぬかもしれないのに。

「いい加減にして!!」

ちなみは、タリアの手から指環をはたき落とした。もう、自分がどうなつたつていい。理性や外面なんて捨ててしまえ。めちゃくちやに怒つて、一人が泣いて自分のことを嫌いになつても、それでこの場

が収まるなら、優しさなんていらない。

「あんたのせいなんだよ！ あんたのせいで、ゆかりは傷ついてるんだ！」なのに、どうしてそんな平気な顔でいられるの？」

最低だと、自分を責める。こんな小さい子を怒鳴りつけるなんて。でも、これが本心なんだ。今の言葉に偽りはない。ゆかりを傷つけたイカリングは許せない。そして、その原因だというのに、その自覚がないタリアのことも同じくらい許せなかつた。

「プリキュアは伝説の戦士だから大丈夫リア！」

「違う… ゆかりはただ…」

「ちなみちゃん!!」

ゆかりの声が、悲鳴のように聞こえた。意識が遠くなる。怒りすぎて、頭の血管が切れたのだろうか。やばいな、と思つても、抵抗する氣は起きなかつた。この、おかしくなつてしまいそうな怒りから解放されるなら、他のことなんて知つたことが。

意識を失い傾いた彼女の体を、ゆかりが支える。イカリングがこちらの方に掌を向けているのが分かつた。赤く鈍い光が、彼の掌から広がつていいく。

「俺を無視してんじゃねえよ」

ちなみの体から現れ、抜き取られた光。昨日の教頭と同じ現象だ。それは、巨大な人の形になり、ゆかりを見下ろす。

「こっちの世界じゃ、みんなヒトの喧嘩の邪魔して説教始めるのか？」

ま、俺には好都合だけどな。いけ、オーリンボー！」

すかさず地面に落ちた指環を拾い、右手の薬指にはめる。今度こそ、力がみなぎつてくるのが分かる。

「プリキュア… フィーリング・コネクト…」

指環が眩い光を放ち、それは大きな環となつてゆかりの体を包む。

そして、全身が光の環をぐぐつたとき、彼女はプリキュアに変身していた。

「みんなでつなぐ、喜びの環！ キュアリンク！」

ちなみを抱き、タリアをかばん」と背負つてオーリンボーから距離をとる。ベンチに一人を下ろして敵を振り返ると、やはりこちらに向

かつてきていた。どうにかして、自分の方に意識を向けさせなくては。

体が大きい分、動きは緩慢なはずだ。顔の正面に晒くよう、高く跳躍する。

オコリンボーの目がリンクを捉えた。作戦成功だ。後は……どうする。このまま、顔面に攻撃を入れておいたほうがいいのか。

「え？」

そんなことを考えている間に、オコリンボーの頭突きによつて彼女の体は吹き飛び、木の幹に激突した。生身では体中の骨が折れて気を失っていたかもしれないが、プリキュアに変身したことにより、彼女は無事だった。それでも、かなりの激痛が彼女を襲つ。気絶した方が、もっと楽だつたかもしれない。

「タリアを渡せ。さつきの奴も言ってただろ、俺たちに関わらなければ痛い目に見ずには済むんだぜ？」ホント、薄情ないい友達だよな

「それは違う！」

悲鳴をあげる体に鞭を打つて、リンクは立ち上がった。ちなみを何も知らないくせに、勝手なことを言つてほしくない。

「ちなみにちゃんは、私を助けにきてくれた！ 本気で心配してくれた！ 薄情なんかじゃない！」

「それはお前が友達だからだろう？ だが、タリアはどうだ。あいつはタリアにムカついてたぜ？」

「ちなみにちゃんは、ムカついたから怒つてたんじゃないよ」

氣を失っているはずなのに、ちなみにゆかりの声がはつきりと聞こえた。まるで水中を漂つてているように漠然とした意識の中で、親友の声だけが道しるべとなり、彼女を深淵から救い出そうとしているようだつた。

「何言つてる？ 人はムカつくから怒るんだ」

心の国の“怒りの王”。そのことを思い出して、リンクはふつと笑つた。

「昔、クラスで悲しんでる子がいたの。男子のグループにからかわれて、すごく嫌そだつたのに、私やクラスの皆は何もしないでそれを

見てるだけだった。でも、ちなみちゃんは違ったんだよ

ベンチの方に目をやる。ちなみの顔は、一瞬で随分と大人っぽくなつた。夢の中でもゆかりを叱つて居るのか、眠つても眉間に皺が寄つており穏やかな寝顔とは言い難い。もう無邪気なだけの少女ではなく、様々な苦労が顔に刻まれているのだ。

アーチの造花製作に一生懸命になつてくれた。ゆかりのピンチには、いつだって駆けつけてくれた。それが、彼女の知る愛花ちなみだ。「ちなみちゃんは、躊躇わざ男子のグループに怒りに行つた。その後、からかわれた男子にも、『何で言い返さないの。男らしくない』って怒つてた。ちなみちゃんは、そんな人なの」

「何が言いたい？」

「あなたは、自分のことだけ。でも、ちなみちゃんは他人のため。私のために怒つてくれる」

視線をタリアに移す。この状況にちつとも危機を感じておらず、リンクと目が合いきょとんとした顔になつた。本当に、どこまで能天気なのだろう。

「さつき怒鳴つたのも、タリアのことが嫌いだからじゃない。タリアに、私のことを知つてほしかつたんだよ。伝説の戦士ブリキュアじやなくて、ただの中学生だつて」

違う。

起きているのか眠つているのかも分からぬ夢の世界で、ちなみは否定し続けた。

ゆかりは、私のことを買い被つてる。さつきタリアにぶつけた言葉は、私の汚れた心の現れだ。いつまでも小学生の私じゃない。私は、それなりに世間を知り、世間一般の人々に溶け込んだ。面倒事には関わらない、卑怯な人間になつてしまつたんだ。

だから、タリアを守つてゆかりが危険な目に遭わないといけないのなら、戦う理由を無くしてしまえば解決すると思った。タリアのことは、誰か他の人に任せたらいい。どうして、ゆかりなんだ。

そして、はつとする。あのとき、私が何もしなければ、別の誰かが助けに入つただろうか。

それはあり得なかつただろう。ゆかりはさつき、“躊躇わづ”と言つたが、そんなことはなかつた。ちなみは周りを気にした。そして、誰一人として知らん顔をしているクラスメイトに腹を立て、その怒りが原動力となつて男子グループに向かつて行けたのだ。

いるはずのない“誰か”を頼るなんて、ばかだ。誰も面倒なことには関わりたがらない。……私だつてそうだ。

ゆかりは変わつた。

今朝、ちなみはそう言つた。

自分はどうだ？ もし今のクラスで小学生のときのよつな「」があれば、あのときと同じ行動がとれるだらうか。きっと、何もしない。下手をすれば自分が目の敵にされてしまつ。昔は、あんなに簡単なことだつたのに。

ちなみは、大人数で一人をいじめているグループが嫌だつた。自分が情けない状況にあると分かつてゐるのに、ただ堪えているだけの男の子も嫌だつた。そして、何もしないクラスメイトも。

だから、自分の気持ちをすつきりさせるために、間に割つて入つたのだ。決して善いことをしようとした訳ではない。

それなら、どうしてさつきは、逃げようとしたのだらう。

ゆかりが傷つくのが嫌なら、イカリングに文句の一つでも言つてやればよかつたじやないか。

決心したばかりなのに。ゆかりと一緒に戦おうと。しかし、ゆかりの意思を無視して、タリアにひどいことを言つた。理想と現実の自分は、違うといふことだ。

結局は自分が可愛いんだ。そう思つと、眠つてゐるはずなのに笑えてきた。自分の思うようにならないから、氣に入らないから怒るんだ。

ゆかりとタリアには、後悔してしまつほど怒りをぶつけてしまつた。それでも気が済まない。

……なぜ？

そんなこと、分かりきつてゐるじやないか。

「くたばれ、キュアリンク!!」

オコリンボーの攻撃が、リンクを襲う。逃げるには、時間も体力も足りない。なんだ、指環があつてもなくとも変わらなかつたじゃない、と彼女は思った。昨日のはまぐれだつたんだ。ちなみの言うように逃げた方がよかつたのかも知れない。

だつて、私一人では、勝てない。

そのとき、リンクをかばうようにちなみに割り込んだ。時間がゆっくりと流れるように感じたが、思考だけはいつもより早く働いた。

どうして、何をしているの？ 早く逃げて！

そんなリンクの思いもお構いなしに、ちなみにその場を動かない。それどころか、オコリンボーの向こうにいるイカリングを睨みつけ、今にも食つてかかりそうな勢いだつた。

「私の親友を、傷つけるな！」

ちなみに体が、赤く光つた。イカリングの掌に吸収されたときの光より遙かに鮮やかな色で、熱く真つ直ぐな意思と力強さを感じさせる。

「これは……」

昨日のゆかりに起きたのと同じ現象だ。オコリンボーの攻撃を弾き返し、ちなみに戸惑つた様子で、自身を包む光を見つめている。

「ブリキュアの光リアー！」

嬉しそうにタリアが言った。

もう、迷う要素は一つとしてなかつた。あるのは、イカリングと自分自身への怒りのみで、躊躇いや恐怖は感じない。

これはチャンスなのだと、ちなみに思つた。ゆかりは他人の為に戦えるようになつた。なのに、ちなみにただ自分の世界を守ることだけに必死だつた。ゆかりと一緒にいる生活にビビを入れるくらいなら、心の国の事情なんて知つたことかと考えていた。いつから、私はそつとなつてしまつたんだ。

間違いを目の当たりにして、見て見ぬフリをする。それを嫌う自分がどこにいった。これは、昔の自分を取り戻すチャンスだ。

「ブリキュアー フィーリング・コネクトー！」

赤い光は輪となつて、ちなみの体を通過していく変身させる。煌めくような赤い「スチュームに身を包んだ彼女の右手首に、光は真っ赤なブレスレットとなつて現れた。

「信じて振るう怒りの拳！ キュアルビー！」

自らが変身した現実に驚く隙をとらず、体勢を整えたオ「コリンボー」がパンチを繰り出す。避けるといふ考えは彼女の頭にはまったく浮かばず、敵の巨大な拳に自身の拳をぶつけた。

すると、ちなみの拳は赤く輝き、すさまじいパワーが溢れてきた。オ「コリンボー」は彼女に力負けして、その巨体は数メートル宙を舞う。「何、この力……？」

赤いブレスレットを見つめて呟いた。さきほどまでの葛藤や怒り、もやもやした気持ちが全てブレスレットに込められていくように感じる。そして、それは力となつてちなみの体に溢れ出す。

「ちなみちゃん……？」

百聞は一見にしかず、とは言つが、ゆかりには自分がプリキューになつたという自覚はあまりなかつた。しかし、目の前で親友が変身して巨人の力を圧倒しているところを見て、プリキューの凄さを改めて感じた。

「すごいリア！ キュアルビーは、怒りのプリキュー『リア！』

興奮したタリアは、ベンチから飛び降りて叫んだ。それを聞いて穏やかではいられないのがイカリングだ。

“怒りのプリキュー”だと？ “怒り”はこの俺だ!!

イカリングとオ「コリンボー」が、ルビーを襲う。男の子との喧嘩は幾度も経験してきた彼女だったが、今回は規格外だ。どうすればよいか分からず、防御が遅れた。

「プリキュー！ リンクポーション!!」

後ろからリンクが放つた光が、イカリングに直撃する。期待したほどのダメージは与えられずとも、勢いを削ぐことに成功した。二人はオ「コリンボー」の攻撃をジャンプして避け、空中で体勢を立て直す。

「このオ「コリンボー」は、てめえの怒りから生まれたんだ！ 倒せるもんか！」

イカリングに吸い取られた、ちなみの怒り。ゆかりを傷つけたくないが為に、タリアを犠牲にしようとした自分勝手な怒り。結果として、それがゆかりを傷つけた。

「だからこそ、私が決着をつける！ それが、自分の気持ちと向き合ってことなんだ!!」

ブレスレットが大きな光りを放ち、彼女の右肘から拳までガルビーのように真っ赤になる。煮えたぎるような、熱い怒り。これは、自分の戒めだ。

「プリキュア！ ルビー・ショット！」

ルビーの拳を象った光が弾丸のような速さで、オコリンボーを貫いた。鈍く赤いオコリンボーの体が鮮やかな赤に変わり、次第に光の中に姿を消した。ちなみは、自身の怒りに打ち勝つたのだ。

「畜生。『怒りのプリキュア』なんて、俺は認めねえぞ」

イカリングも退散した後で、一人は変身を解いた。気がつくと彼が投げたすべり台は元の位置でちゃんと地面とつながっている。肉体的にも精神的にも疲労困憊のちなみは、そこから動く氣力が出ず、大の字になつて仰向けに倒れた。

「……今の今まで寝てたってことはないかな？」

「夢じゃないよ。ちなみちゃんはプリキュアになつて、巨人をやつつけました」

「だから、プリキュアって何よ……」

首だけ起こそうとしたが、やはり力が入らずこくんと頭をつぶ。青い空が目に入った。何となく、懐かしい景色のようを感じる。

「もう、ちなみにちんがそんなんじゃ私がだらけられないでしょ」
さし出された手を、ちなみは掴んだ。思えば手をつなぐなんて、いつ以来のことだらう。

「『怒りのプリキュア』かあ。どうせなら、『優しさのプリキュア』とか、慈しみのプリキュア』とかが良かつたなー」

「でも、キュアルビーすゞくカツコよかつたよ！」

「カツコよくな」

学校へ戻る道すがら、『怒り』と『フレーズが悪役みたいで気に入らないといつちなみをどうにかフォローするゆかりに、不条理な拳骨が降りそぞぐ。

「もう。すぐ怒るんだから。さすが『怒りのプリキュア』」

「あんたがそうやって怒らせるような」と言ひからでしょ！」

一人のやりとりを見て、タリアはにこにこしていた。特等席となつたゆかりのかばんの中で、嬉しそうに言ひ。

「プリキュアが一人になつたリアー！　すいにリアー！」

そんなタリアを見て、ちなみは心が痛くなつた。あんなにひどく当たつたのに、ちつとも気にしていないようだ。しかし、だからといって謝らなくていい理由にはならない。

「タリア……だよね？　その、やつめばめめん、キツことと言ひて」「何の」とリア？

とぼけた表情をするタリアの頭に、ちなみは手を置く。

「何でも。とにかく、『めんね』

その様子を見て、ゆかりは微笑んだ。怒られて謝るといつのはよくあることだが、怒った者が一方的に謝るとこつのは、奇妙なものだ。「私も手伝う。あんたのお母さん探し」

手に持つていたかばんを肩にかけ、ちなみはブレスレットを見つめた。そこには、彼女の決意が込められてくる。

「基本的に面倒事は背負いたくないんだけどね、背負つちゃつたもんには責任を持つよ、私は」

小学生のときは随分と事情が変わつた。ゆかりはもつ見ているだけではなく、戦う勇気を持つてこる。

そして、ちなみは戦えない人の気持ちを知つた。いじめを傍観していたクラスメイトは、決して薄情だつたり臆病だつたわけではない。きっと、何もできなかつた自分を責めていたのだろう。

そう考へると、ちなみはおかしくなる。きっと、成長したと思つてゐる今の自分も、数年後にはばかなことをしてゐた時期もあつたと顧みるのだろう。しかし、それでいいのだ。

後悔しない生き方なんてない。完璧なんてつまらない。だから、大

人の真似事なんてやめて今を楽しもう。どうせ大人だって、間違つてばかりなんだ。

「あっ！」

脳が危険信号を受信し、ちなみは叫んだ。

「どうしたの？」

「早く戻らないと、キャプテンに怒られる!!」

そして、二人は走り出す。今朝と同じように、ちなみが体二つ分ほどリードして、ゆかりがその後を追いかける。だが、ゆかりに追いかけられているから、ちなみは走ることができるので。この関係だけは、変わらないでいたいと思う。

3 1・新たな敵と新たな仲間！

放課後の学校では、あちこちから元気なかけ声が聞こえる。

グラウンドでは野球部が辛い基礎練習に大粒の汗を流し、体育館からは剣道部の勇ましい轟が響き渡る。

女子ソフトテニス部も同様で、まるで声を出すのが部活だと言わんばかりだ。部員の数に対しても「コートが少なすぎるため、自分の順番が来るまでは列に並んで、「コートに入っている者を応援する。基本的にかけ声は「ファイト」で統一したはずなのだが、「……イトー!!」や「アシトー!!」などアレンジしてあるものの方が圧倒的に多く聞こえる。

「ファイ……ットーッ!!」

愛花ちなみは言葉の間に溜めをつくる。入部したばかりで球拾いしかさせてもらえないときから、ちなみは同級生の誰よりも大きな声を出し、チームを鼓舞した。そうしたことから彼女は次期キャプテン候補と噂されていたが、彼女が声出しに精を出す本当の理由は、口パクで誤魔化している部員への当てつけであった。

真面目な部員はちなみに感化され、負けじと声を張る。とりあえず練習に来ているだけの者も、その空気に引き込まれさやかではあるが声を出すようになつた。

「ファーアイト————!!」

スタッフカートの効いているちなみとは対照に、ゆかりは滑らかに発音する。すると、コートの向こうから再びちなみが声を出す。

「ファイ……ットオーッ!!」

チームメイトの間でも一人のかけ声は特に分かりやすいとよく言われる。そのことを思い出したゆかりは、にやつとして大きく息を吸う。

「ファーアア……イトオ——!!」

顧問の先生は職員会議のため、今日はまだ来ていない。来たとして、テニスの経験もなければ興味もないような人だ。居ても居なくて

も構わないが、どちらかといつと居ないほうがあやつやすい。ついでに
氣も抜けた数人が、一人のかけ合いでくすぐすと笑った。

「じゅー 变な声出さないの!!」

キャプテンに注意されたのは誰かな、と周囲を窺っていたゆかり
は、忍が「こちらに向かつて来て」とに気付か、免罪だと目で訴え
た。

「みんなの気が散るでしょ」

「私、変な声なんて出してないですよー」

「じの□が言つ」

忍は人差し指をゆかりの顔の前で立てた。おでこを突つつくと、周
りから笑いが起こる。突かれた場所を擦つて文句を言いたそうな顔
をしているゆかりの気持ちを汲んで、忍はぱつと後ろを振り返る。す
ると、ちなみに顔が引きつった。

「ゆかりには、私からもよく言つておきますので……」

わざとらしくペロペロと頭を下げるちなみに見て、忍は腕を組みた
め息を吐く。

「いい? 一人とも一年生になつて後輩ができるんだからね。新入部
員が入つてきたら、もう立派な先輩なんだよ」

後輩、新入部員……。その言葉に、ゆかりは嬉しくなつた。入学式
から数日経ち、やるやく一年生が部活を見学にくる時期だ。今年は何
人ぐらい入つてくれるだろ?、先輩と呼ばれるのかな、そんなことを考
えて彼女の胸は高揚した。

「ゆかり、聞いてる?」

はつとして我に返ると、忍のじとつとした目が向けられていた。す
かさず謝るとまた笑いが起き、ホール内は楽しい雰囲気に包まれた。

その様子を、ホールの外から窺う一人の女子生徒。キャプテンと思
しき人が叱つているのは……間違いない。彼女は確信した。
「ゆかりさんってこうんだ……」

その場でしばらくテニス部の練習を覗いていたが、誰かが歩いてく
る気配を感じて隠れられそうな場所を探す。隠れる理由もなければ
彼女を見つけようとする人もいないのだが、そんなことは忘れて適當

に開いていた部室に入った。

テニスコートの近くにある部室。もちろん、それは複数あるテニス部のいずれかのもので、よりによつて女子ソフトテニス部の部室だった。

休憩時間になると、ゆかりとちなみは冷水器の列にも並ばず一皿散に部室を目指した。一年生に進級して、ますます楽しくなった彼女たちの学校生活に影響を及ぼす一つの懸案事項。それが、部室にあるのだ。

これまでのところ、意外なことにタリアはかばんの中で大人しくするという約束を守ってきた。だからといって、ゆかりにとっても未だにいまいち掴みどころのない性格であることに変わりはない、いつも学内をうろつき出すかわからない。

彼女たちの先を行くものはいなかつたから、今の部室には誰もいなはずだ。何らかの理由で遅れてきた部員が着替えているかもしないが、ただ着替えているだけなら問題ない。ゆかりのかばんと話したりしていなければ。

こうした不安を抱えて、ゆかりは部室の扉を開けた。

「す、すごい！　じゃあ、あなたは本当に妖精さんなのね」

「そう、ボクは妖精リア！」

目に飛び込んできた光景に、一人は唖然としてお互いの頬をつねり合つた。残念なことに、痛みを感じる。つまり、テニス部員ではないはずの女子生徒とタリアが楽しそうに言葉を交わしているこの光景は、現実といふことだ。

「タリア、何してるの!!」

ちなみの大聲に驚き、見知らぬ女子生徒は飛び上がって反射的に頭を下げた。

「すみません、勝手に部室に入つたりして……」

「そんなことより、こや、もう……聞きたいことだらけなんだけどさ」混乱した考えをまとめようと、ちなみは額を拳でこしつこしつと叩く。その隣でゆかりも同じ動作をしてみせ、女子生徒の顔に見覚えがある

ことを気にしていた。頭を下げたままの姿勢でいるため分かりづらいが、先ほど一瞬だけ見えた顔は間違いなく記憶にあった。

「どうあべず……、あなたの方の部員じゃないよね。どうしてここにいるわけ？」

「「」みんなせい、つい……」

「まあ、いいけど。それで、無いとは思つけど何も盗つたりしてないよね？」

ちなみに追及に怯えた表情になつた女子生徒を、タリアが助けた。

「ゆいはずつとボクとお喋りしてただけリア！」

「ゆい？」

女子生徒は気をつけをして、再び頭を深く下げる。

「はい。私、一年生の恵原結依えは らゆいといいます。その、どうして部室にいたかは説明しづらいんですけど、本当に何もしてなくて……」

「「」もりながら説明をする彼女に、ゆかりは既視感を覚えた。つい最近にも、同じような表情を田にしたことがある。もやもやした記憶は、次第に鮮明になり、脳内にブルーレイ画質で蘇る。

「あなた、もしかして入学式のときの……？」

曇つていたゆいの表情が、ぱあっと明るくなつた。あのときと同じだ。

「はい、そうです！ たぶん、きっと……」

晴れ晴れとした笑顔は、また徐々に雲に覆われていく。ゆかりの言う人物と自分が同一であることに、自信が持てなかつたのかもしない。

しかし、ゆかりには確信があつた。あの日のことは忘れようがない。異世界から現れた妖精や、怪物を生み出す大男の前には震んでしまうが、彼女が一生懸命に用意した入学式。それを控えた新入生とのふれ合いも、大切な思い出だつた。

「その後、大丈夫だった？」

「はい、体育館の方から大きな音がして、それが気になりましたけど」

「あ、あれね。何だつたんだろうね~」

「引きつった笑いで誤魔化したつもりではいるが、この子は先ほど当

たり前のようにタリアと話していたことを思い出し、本当のことを言つてしまつてもいいような気がした。

「何? 一人はどういう関係?」

「ビーウー関係リア!」

事情はどうあれ、よその部室に勝手に入り妖精を見て平然としていた子だ。ちなみにどつて、彼女がゆかりと知り合いであるということは意外であり、同時になぜか納得してしまえるような不思議な感じだった。

「」の子とは、入学式の……例のどたばたの前にたまたま会つたんだよ

「はい、私が来るのが早すぎて困っていたら、ゆかりさんが助けてくれて……」

「あれ、私あなたに名前教えたつけ?」

すると、ゆいは俯いてしまい、まるで自分の罪を打ち明けるかのじとく申し訳なわざうに話した。

「実はさつき、部活を見てたんです。それで……」

思い切つてゆかりの方を見ると、期待に胸をときめかせ、目をきらめら光らせている顔がそこにあつた。

「もしかして、あなた、入部希望者!?」

「いえ、あの……」

話が変な方向へ進みそうになつたので、ゆいはビリに軌道修正をしようと試みたが、ちなみに腕を組みうんうんと頷いたため、それはほぼ絶望的となつた。

「なるほどねえ。でも、部活を見学したいならちゃんと誰かに話を通さないと。それに、部室だって勝手に入っちゃダメだよ」

「そつりア。勝手に入つたらダメリア」

輝くゆかりの笑顔と、沂い顔でうなずくちなみと、困った状況になつて今にも泣きそうな顔のゆいが、一齊にタリアを見た。

「ボクもびっくりしたリア。でも、ゆことのお喋り楽しかったリア」
ゆかりとちなみの顔が強張り、同時にゆいに詰め寄る。

「何を聞いた? ビリまで聞いたの!」

「喋る珍種の動物って言つたら信じる?」

といふが、ゆいはぽかんとした表情になつた。

「え? 妖精つて動物のうちに入るんですか?」

例えば、遠い星からやつてきた宇宙人が目の前に現れたとして、私は何とか星人ですと名乗るのは当然のマナーかもしない。それと同じで、人間と妖精という異なる種族が出会つたのだから、自分は妖精だと自己紹介しただけのタリアを誰が責められる。

この場合、無理にでも誰かを悪者にするとしたら、それはゆいだ。宇宙人でも妖精でも、SFやファンタジーの創造物を現実として認めただとき、人間は驚いてみせなければならない。そうでないと、はるばるやつて来た“彼ら”も腑に落ちないはずだ。

しばらくの沈黙に気まずくなつたゆいは壁を背に扉の方へと移動して、後ろ手に取つ手を探つた。

「あの、それじゃあ私、そろそろ失礼します……」

そうは言つたものの、なかなか取つ手が見つからず焦つていると、扉の方が自然に開いた。振り返ると、そこには忍が立つていた。

「二人とも、もう休憩終わりだよ。……つて、あなたは?」

「入部希望者ですよ!」

あまり長いこと部室で話していると、いつタリアが口をはさむか分からぬ。ブリキュアになつた時点での面倒事を背負い込む覚悟を決めた二人だったが、これ以上この場が面倒になることだけは避けたかった。

「え、もう入部希望者?」

ゆかりとちなみに追い出されるような形で部室から出た忍は、少しの間どう対応すべきか考えた結果、去るもの追つても来るもの拒まずと判断した。他のみんなも外に出てきたのを確認すると、ゆいの正面に立つ。

「たしか一年生が入部できるのはまだ少し先だったと思つけど、どうする? 今日ちょっとでも見学していい?」

「その、私は……」

この段階で一年生に知り合いができるといつとは、女子ソフトテ

二ス部にとつて大きなメリットとなる。小学生のときから熱心に続けている習い事でもなければ、ほとんどの生徒は友達に影響されて部活を選ぶ。口コミの効果を考えると、ゆいがこの部活に興味を持つてくれる時期は早い方がいい。

「ぜひ見てこつてよ。もちろん、他に予定がなければ、だけど」

ゆかりはただ新入部員を逃がしたくない気持ちより、タリアのことを探してしまった彼女を、このまま帰すわけにはいかないという意図があつた。もし、明日にでも友達に話されては堪らない。

「あ……。じゃあ、そうします……」

「よかつた！ 忍先輩、この子のことは私たちに任せてもらつていいいですか？」

ゆいの両肩に手をまわして、ちなみは強くかけ合つた。時間さえあれば、どうにかしてタリアの存在を誤魔化せるだろう。これからは学校生活を円滑に進めるためにも、彼女たちがプリキュアだということは、誰にも知られない方がいい。

映画や小説は好きな方だが、ちなみはそれらフィクションの世界と現実を同一視するほど無垢ではない。自分がプリキュアに変身したことすら、今では夢だったのではないかと疑つて居るくらいだ。特撮に影響を受けた“痛い子”だなんて思われたくない。

「まあ、一人ともその子と知り合つみたいだし、わかつた。あんた達に任せせるわ」

キヤブテンの承認を得て、一人は胸をなで下ろす。見ているだけでは退屈するだらうから、予備のラケットを貸すと言い訳をして、コートに戻る忍を見送つた。姿が見えなくなるのを確認すると、すかさず部室に戻る。

「タリアとは何を話してたの？」

数分の間にくたびれたちなみは、適当な椅子に腰を下ろした。ゆかりのかばんを軽く叩いて合図し、タリアが顔を出す。

「ほとんじ何も……。自己紹介しただけです。それで、その子は心の国の妖精でお母さんを捜してるので」

「本当にそれだけ？」タリアに顔を近づけたちなみは、小声で尋ねる。

「プリキュアのことは言つてないでしょうね？」

心の国から来た妖精のくせに配慮といつものを分かつていなか
が、タリアは大声で元気に応えた。

「まだプリキュアの話はしてなかつたリア！」

「プリキュア……？」

聞きなれない単語に、ゆいは首を傾げる。ちなみには大きくため息を
吐いて、タリアの頭を小突いた。遅いと怪しまれないので「コード」に
戻るのは、もう不可能かもしない。

「何のことだらうね？」ゆかりはぎこちなく笑つた。「きっと、妖精の
世界にいる伝説の戦士とかじゃないかな~」

「セリフア！ ゆかりとみなみは、伝説の戦士、プリキュアリア!!」
すべて子どもの空想とこいつにしてみづ。ちなみにはそう決心して、
ゆつくりとタリアをかばんの中に押し込んでファスナーを閉めた。
「なんかこの子、私たちをそのプリキュアってのと勘違いしてるやつ
くたが、困つてんのよ」

「はあ、そなんですか……」

弁解のチャンスはまだ次の休憩時間に残されている。ちなみには予
備のラケットをゆいに手渡し、部屋を出ようとした。

「また後で落ち着いて話セリフ。とりあえずは戻るつか」

胸に落ちない様子でいるゆいの手を、ゆかりが引っ張つた。

「改めて自己紹介するね。私の名前は嬉野ゆかり。じつちが幼馴染の
愛花みなみちゃん」

つないでいる手の感触が、ゆいには懐かしく感じた。自分の存在を
包み込んでくれるような、温かい安らぎ。こんな感覚を前に味わつた
のはいつだつたか、はるか昔のことのよつて思える。

ゆいは手を握り返し、ゆかりの顔を見た。

「ゆかりさんって呼んでもいいですか？」

それを聞いて、ゆかりは笑顔になる。嬉野先輩といつ響きにも憧れ
は抱いていたのだが、じつちの方がずっといい。

「もしかして…じゃあ、行くつー！」

「コードまで駆け足で戻る間、ゆいはまづつと下を向いていたためゆい

りにはよく見えなかつたが、その表情はほんとうにうろこでいた。

3.2・新たな敵と新たな仲間！

季節によって數十分の違いはあるものの、彼女たちが通う中学校ではどの部活も決められた下校時間に従わなければならず、部活も残り一時間となつた。

キャプテンである忍のかけ声に従い、部員は反射的に所定の場所に集まる。そこはいつもなら顧問が座っているはずなのだが、今日はゆいがそこに座つて練習を見学しており、気まずそうに姿勢を正した。これまでのところ、ゆかり達は彼女に口止めをする機会を得られないといた。正式にはまだ体験入部も認められていない時期に、制服のまま運動させて怪我をされてしまうのだ。顧問もまだ来ていないため、責任の所在は部長兼キャプテンの忍にある。これにはゆかりもだだをこねるわけにもいかず、ゆいは貸してもらったラケットを持って余していた。

休憩時間や練習の合間に、何人かの部員がゆいに興味を示して話しかけることはあつたが、すぐにまた練習に戻らなくてはいかなかつたため、彼女は三十分以上ずっと座つた状態になつた。

ゆかりとちなみも自分の練習に手いっぱいだつたが、待ち時間の多い試合練習に入ったことで、よひやくゆいの近くに腰を落ち着かせることができた。

「いつものように第一コートは三年生、第二コートは一年生で使って。もちろん、三年生と一年生で試合してもいいけど、どっちかのコートに人数が集中しないようにね」

「はーーー」

忍の指示を受けて解散した部員たちは、それぞれペアを組んで対戦相手を探す。コートには早いもの勝ちで入つていき、ゆかり達はそれを遠慮することにした。

「ゆかり、次で入るつよ」

「うん、いいよ」

普段からペアを組んでいる一人は、それが当たり前であるかのよう

に相方探しをする必要もなく、最初の試合を傍観する。

「ごめんね、少しは打たせてあげられるかと思つたんだけど」

ちなみには地べたに座り、高い位置にあるゆいの顔を見上げて言った。後輩の自分だけが椅子に座っていることを申し訳なく感じたゆいは、慌てて立ち上がり讓ろうとしたが、ゆかりもいふことを思い出して、どうすればよいか分からなくなつた。

そんな彼女の気持ちを察して、ちなみには椅子の座面を軽く叩いて示した。

「お客様なんだから、気遣わなくていいよ
すみません……」

おずおずと椅子に腰を下ろし、両手を握つて膝の上に置く。タリアとは楽しそうに話していたことを思い出したゆかりは、まるで借りてきた猫のようだと感じた。

「やつぱり、一人だと緊張するよね。私のときはちなみちゃんと一緒だったから大丈夫だつたけど」

目の前のコートで、いちじら側の後衛が相手のスマッシュシュをロブで返したのを見て、ゆかりは心の中でナイスと叫んだ。

「そうだつけね。たしか、私がゆかりを誘つたんだよね？」

懐かしむように、ちなみが言う。座つていることに飽きたのか、

シャフトの間に人差し指を入れ、くるくると回しながら始めた。

「その……、どうしてお一人はこの部活に入つたんですか……？」

尋ねたあとで、気になつたことをあつさり質問できた自分に驚くゆいをよそに、一人はお互いの顔を見て微笑み合つた。そのままの表情でゆいに視線を移し、ゆかりが説明する。

「去年はちょっと色々あつてね、一人で同じ部活に入らうつて決めたの。どうしてもやりたいっていう部活はどつちもなかつたから。それで、せっかく同じ部活に入るなら個人競技は嫌だねつて話になつて、ダブルスがメインのソフトテニス部にしたんだ」

「え、でもバスケットみたいな団体競技とか、他にも文化部があるじゃないですか」

「まあ、それは何となくだね。フイーリングってやついうのかな？」

とにかく、心にびびったんだ

「フイーリング……ですか」

それは、ゆいにも分かる気がした。自分の心を引きつけるものに出会ったとき、理由など存在しない。気がついたときには、パズルの最後のピースがぴったりはあるような感覚があるだけだ。

「ほんと、ゆかりは自分の心に正直なんだよね

横からわざといふく嫌味を言ひちなみに、ゆかりは頬を膨らませて反撃する。

「ちなみにやんだって、人のこと言えるのー？」

第一「パー」トの試合が終わり、選手たちが「パー」トを離れた。ゆかり達はラケットを手にすると立ち上がり、ゆいを振り返った。

「じゃあ、私たちの活躍つぶつ見ててよ

「活躍できたら、ね」

ちなみにからのツツ「//」を受けたゆかりは、困ったような笑いをみて、身を翻し「パー」トに入つていいく。そんな彼女の後ろ姿を見て、ゆいは立ち上がった。試合が終わればまたゆかりは自分のところに戻つてくるかもしれないが、後回しにはしたくなかった。

「ゆかりさん……あの……、入学式のときはありがとうございました！」

ゆかりは足を止め、回れ右をしてゆいを見た。変わらず不安そうな表情ではあるが、先ほどまでとはちょっと違う。ただ、”ありがとう”と言つだけなのに、勇気を振りしぼつていつぱいいつぱいになつている。

そのことが、ゆかりには嬉しかつた。

「うん…、もうこたしまして」

数日前にも似たようなやりとりをした。しかし、今とはやや状況が異なる。入学式のときは違つて、ゆかりはゆいを知つてゐるし、ゆいもゆかりを知つてゐる。そして、今や同じ学校の仲間であり、部活動の先輩後輩の関係にならうとしてゐる。

たつた数時間で、見ず知らずの他人からこれまで距離を縮められる。ゆかりの心は喜びで満たされ、試合どころではなくつた。

辺りがすっかり夕闇に包まれると、下校を促す音楽が流れる。

顧問は最後まで現れず、片付けの後の集合では忍が今日の練習の反省点を挙げた。「集中力が欠けている」という言葉には、ゆかりも閉口するしかなかつた。

解散してからほとんどの部員は部室に戻つたが、着替えるのも面倒臭いと体操服姿のまま帰路についた者もいた。せまい部室であるため、三年生が先に中で着替え、何人か出てきたのを確認して一年生も代わる代わる部室に入る。

三年生は自分の着替えが済むとそのまま帰るか、まだ部室に残っている友達を待つのだが、忍は部長として部室の鍵を職員室に返さなければならず、他の部員を見送つていた。

「忍先輩、私たちが最後です」

「よし！ 忘れ物ない？ 閉めるよ」

念のため部室の中を覗いて、ゆかりたちは頷いた。南京錠をしつかりと閉め、忍は立ち去ろうとしてゆいを気にした。

「途中で帰つてもよかつたんだけどね、ごめんね。私がそう言えればよかつた。時間、遅くなつたけど大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です……」

「そつか、ならよかつたよ。また入部の時期になつたらさ、今度は友達も連れて見学に来てよ」

ゆいは返事に困つて俯いたのだが、それを肯定の意味で頷いたのだと勘違いした忍は、彼女の頭をぽんぽんと叩いた。

「じゃ、お疲れ！」

「お疲れ様でした！」

職員室に向かう忍の後ろ姿を見送つて、ゆいも同じ方向だと分かり三人で一緒に帰ることにした。^{ひとけ}人気のない路地を選んで通り、タリアをかばんから出してやる。

「もうお家に帰るリア？」

「うん、そうだよ。もう少しで着くからね」

出合つてほんの数日の間に、ゆかりはタリアの扱いに慣れてしまつ

ていた。ときどき考えなしで行動することが悩みどころではあるが、基本的には人間の子どもと変わらない。彼女にとつては弟か妹ができたような気分だった。

「ゆい、明日も会えるリア？」

すると、ゆいはぎこちない笑顔をつくり、ゆかりたちの顔色を窺つて控え目な声量で言った。

「それはどうかな。分かんない」

「ま、次来るなら、忍先輩が言つたように入部が許可された頃にさ、友達と一緒に来たらいいよ。ただし、タリアを紹介するのはダメだけだね」

ラケットケースのひもを左肩から襷がけにして、右肩にバッグをかけたちなみは、両手を頭の後ろで組みゆいの方を見た。そのおかげで、彼女の肘にぶつからないようゆいは自身の体ができるだけ縮めて、肩身が狭くなつた。

「はい、その……分かつてます。この子のことは内緒、ですよね？」

「言っても信じてくれる人はいないと思うけど、あんただつて、友達から変人だなんて思われたくないでしょ？」

「そう、ですね……」

人見知りなのか極度の恥ずかしがり屋なのか、なかなか心を開いてくれないゆいの態度に、ゆかりは違和感を覚えた。小学生では学年の差など関係なく友達のように接していたから、初めて後輩と呼べる存在ができたわけだが、後輩というのはこんなにもよそよそしいものだつただろうか。

ゆかりたちは違つたはずだ。先輩にも恵まれたおかげで、すんなりと部に打ち解けることができた。もちろん性格が人それぞれなのは分かつてているが、ゆいは初めて会つたばかりの——しかも妖精という奇天烈な生き物である タリアと、楽しそうに話していた。

わざわざ自分に一回田のお礼を言いにきたぐらいだから、人付き合いが嫌いというわけでもなさそうなのに。

「ねえ、ゆい？」

「はい？」

ゆいは小首を傾げる。ほんの一つしか変わらないのに、ゆかりはそのあじけない動作をみて、なんだか子どものようだと思つた。

「余計なお世話かもしけないけど、何か困ったことがあつたら私たちを訪ねて来てよ。タリアもゆいのこと気に入ったみたいだし、先輩としてアドバイスできることがあるかもしないから」

これ以上、不安がこもることのないようにゆかりはできるだけ優しく笑つたつもりだが、ゆいがほんの一瞬だけ浮かべた失望の表情を、彼女は見逃さなかつた。

「はい、ありがとうございます……」

ゆいの返した笑顔は偽物であると、ゆかりは直感した。かばんから頭だけ出していたタリアは、ゆかりの腕をよじ登り、ゆいの肩に飛び移つた。

「ゆいはボクの友達リア！」

その言葉を受けて、ゆいは微笑んだ。それを見て、ゆかりは確信する。自分たちに向けられたものと、タリアに向けられた笑顔は、明らかに違うものだ。

「あ、私の辺なので……。失礼します」

住宅街にさしかかる十字路で、ゆいは慎重にタリアを返してお辞儀をした。すると、彼女の胸ポケットから何かが落ち、アスファルトに当たつて心地よい金属音を奏でた。小銭かと思ったが、それはシンプルな橢円形をした銀の口ケツトだつた。

「口ケツト？ 珍しいね」

拾つてみると、紐などを通す輪つかがくてんと倒れた。

「普通はペンダントの先にくつつけたりするんじゃない？」 そのままだと、また今みたいに落ちるよ？」

ちなみに口ケツトに触ろうとしたとき、ゆいはまるで奪つかのようにゆかりの手からそれを取つた。

「あの……それじゃあ

口ケツトを握りしめると、彼女は走つて去つてしまつた。

「大人しいのかよく分からぬ子だね」

触れるもののなくなつた手を持てあましたちなみには、誤魔化すよう

に手を放つた。

「だつて、まだ知り合つたばかりだもん。これから、分かるようになるよ」

そう、分からなくて当然なのだ、とゆかりは思った。そのままテニス部に入ってくれて同じ時間を共有するよになれば、自然と心を通じ合つことができるはずだ。そのじろには、ビリしてロケットを大事にしているのかという質問も許してくれるだらうし、もっと気持ちちはほぐれているだらう。

その後の帰り道では、ずっと自分たちが先輩になる妄想について語り合つた。しかし、どちらも相手の話を聞いては心中でひどい妄想だと突っ込むのだった。

ほじなくして、一年生は午後の授業をつぶして体育館に集められた。各部活動の代表によつて行われる部活紹介があり、それが終われば今日の放課後より部活に入部することが認められる。

どの部も紹介に特徴的な演出を加え、それぞれの良さをアピールした。ゆいはそのどれも楽しそうに思つたが、いまいち自分がそれをやつている姿が想像できずにいた。

そして、十番目あたりで女子ソフトテニス部の紹介となつた。全員が三年生のメンバーで構成されてゐる。ゆいはその中に見知った顔を搜し、忍と田が遭つた。周りの者に悟られないくらいこわやかなウインクをされたが、つい田を逸らしてしまつ。

一組のペアはそれぞれ体育館の端に寄り、模擬試合が始まつた。室内なので球の勢いは弱弱しいが、それでも凛々しい選手たちの姿に一年生の列からは小さな歓声が上がる。

紹介が終わり、拍手が送られるといはまるで自分のことのように誇らしく感じた。しかし、また忍がこちらを気にかけていることに気付き、自己嫌悪に陥る。

どうしてこんな気持ちになるのか。……分かつていぬくせに。

もやもやした感情をどいに吐き出せばいいのか模索しているうちには、部活紹介は終わってしまった。最後に各部の顧問が紹介され、入

部希望の者は自分のところに来るよつと呼びかける。

ぱつとしない五十過ぎの眼鏡をかけた男性教員が、女子ソフトテニス部の顧問だった。この後、彼のところに行つて入部したい旨を伝えれば、それでゆいは部の一員となれる。

どの部活に入るかはもう決まつていた。わざわざ職員室を訪ねなくて、練習を見学に行けば顧問や部長が気をきかせてくれて、いつの間にか部員扱いされるだるう。だから、今日の放課後、また女子ソフトテニス部の見学に行けばいいだけなんだ、とゆいは何度も自分に言い聞かせた。

教室でのホームルームが終わり、これまでならすぐ解散していたクラスのみんなは、友達どどの部活に入るか、見学に行つてみるかといつ相談を始めた。

ゆいの席の近くでも、五人くらいの女子グループが固まつて楽しそうに話している。それぞれ興味をもつた部活は違うようだが、結局みんな同じ部に入るのだらうとゆいは推察した。

「私、ソフトテニス部にしようかなー」

一人がそう言つた。入学してからの一週間、ゆいが見たところその子はグループの中心のようだつた。すると、取り巻きも彼女に便乗する。

「じゃあ、私もそつよつかな

「悦ちゃん、このあと見学に行く?」

これは好機だと、ゆいは判断した。この流れなら自然に彼女たちを誘つことができるだらう。そりばなく、思い出したよつて言えばいいんだ。

私もテニス部を見に行きたいんだけど、一緒に行かない?

たつたこれだけのセリフだ。躊躇う必要がどこにある。クラスメイトとしての、じく普通の会話なんだから、何もおかしいことはない。彼女は心の中で復唱し、結果、それを飲み込んだ。

もうちょっと機会を伺おう。今よりもっとこなタイミングがあとずれるはずだ。最悪の場合、明日でもいい。明後日でも……別に急ぐよなことじやない。

「『めん、今日は犬の世話をしないといけなくてや。また今度でもいい
?』

悦ちゃんと呼ばれた子がそういつつ、周りは残念そうな反応をみせたが、ゆいだけはほつとした。“また今度”でいいんだ……。

そして、彼女たちが解散したとき、教室にはゆい一人だけが残されていた。みんな、友達と部活見学に行ってしまった。悦ちゃんのように帰った者もいる。だから、焦る必要はない。今日すぐに行かないといけない決まりなど、ないのだから。

ゆいはかばんを担ぐと、昇降口に向かった。あちこちから微かに運動部のかけ声が聞こえてきたが、彼女はそれらを無視することにした。

3 3・新たな敵と新たな仲間！

学校を出る最短のルートは、テニスコートの横を通らなければならなかつた。

ゆいは悩んで挙句、まだ通つたことがない反対側の門から帰ることにした。少し遠回りになるが、仕方がない。ゆかりたちに見つかって、また一人で来たのかとがっかりされるくらいなら、どちらの道を選ぶべきかは明らかだ。

ただいつもと違う道から帰るだけのことなのに、それが彼女にはひどく罪悪なことに思えた。しかし、悪いのは自分ではなく、タイミングだと心の中で言い訳をする。

友達をつくるうと頑張った。他愛のない会話でいいから、そのきっかけを作ろうとこつも周囲を窺っていた。しかし、彼女が口を開こうとする直前に誰かがそれを邪魔するのだ。

この前の部活見学だつて、ゆいはもう一度ゆかりに会いたかっただけなのだ。この学校で、最初に話しかけてくれた人。自分を気にかけてくれて、中学校でもやつていけると思わせてくれた。ほんの少しお葉を交わせば、それで満足できたのに。

周囲が悪かった。自分の非も認めつつ、彼女はそんな結論に至つた。

もう少し、私のことを考えて貰ってもいいじゃないか。

田に見えるところにいるのと、どうしてクラスメイトは私ではなく友達に話しかける？ 部活を見にきたなんて一言も言つていないので、どうして決めつけた？

反対したのに、どうして引っ越しなんて。

胸ポケットから口ケットを取り出し、それを握りしめた。すると、彼女に影がさした。太陽に雲がかかったのかと思い顔を上げると、そこには長身の女性がゆいを見下ろすように立つて、不気味な笑みを浮かべていた。

「あなた、学校は楽しい？」

「え……

ゆいよりも頭一つ分ほど背の高いその女性は、じつと彼女の目をみつめ視線を逸らすことを許さない。その瞳には、苦惱や疲れを吸収してくれるそうな魅力があり、このままこの見知らぬ女性に悩みを打ち明けてしまえば、どんなに楽だろうと思えた。

「いつも辛い思いをしながら生きているなんて可哀そう。よかつたら、私があなたを樂にしてあげましょつか」

ゆいの中で、泡のようなものが弾けて消えた。すぐに、その泡は新しい学校への期待だったのだと分かる。

みんな同じ気持ちだから、友達なんてすぐにできるわよ。
引っ越しすとき母はそう言って、ゆいも頷いた。しかし、入学式の日に、それは間違いだつたと知る。

彼女以外のみんなは、すでに友達だつたのだ。公立の中学生のだから、考えてみれば当たり前のことだ。小学校の六年間で、"みんな"は友達や知り合いとよべる仲を確立していた。"みんな"は、新しい友達など必要としていなかつた。

だから、テニス部の面々に迎えられたときは嬉しかつた。本当はテニスに興味なんてなかつたけど、初めてこの学校で居場所を見つけることができた。

それは自惚れに過ぎなかつた。彼女たちが迎えてくれたのは恵原ゆい個人ではなく、あくまで"入部希望者"であり、そんな簡単な条件さえ満たしていれば誰でもいい。

どうして自分だけ頑張らないといけないんだ、とゆいは思った。一人で悩んで、たくさん考えているのに、誰もこの気持ちに気づいてくれない。中学校の付き合いなんて、ビリせ三年限りじゃないか。友達くらい、高校になつてつくればいい……。

「それでいいのよ」

これまでのゆいは、辛いことや悩みを飲み込んでしまう傾向にあつた。それらは彼女の中に蓄積され、重荷になるばかりだつた。果たせなかつた責任や義務、周りからの期待。いざれどうにかなるだろうと問題から逃げ続け、逃げられるものではないと分かつたときには、以

前と比べものにならないほど面倒なことになっている。

「もうこやだ……」

「気が付くと、女性は田の前から姿を消していた。どこに行つたのだろ？　学校を振り返つたゆいは、違和感を覚えた。

さきほどまであちこちから聞こえていたかけ声が、ばつたりと止んだのだ。グラウンドで練習していたはずの野球部は、片付けも着替えもせずスポーツバッグを肩に担ぐと、ユーフォームのまま散り散りになつた。こちらへ向かつてくる集団もある。

今日はもう練習が終わつたのかとゆいには思つたが、体育館から出てきた剣道部も道着の格好のまま帰りつとしている。教員たちは次々と車に乗り込むと、迷つことなくアクセルを踏んで門から出て行つてしまつた。

中学校教員の就労規則など、ゆいには知る由もなかつたが、まだ勤務時間内であることは間違ひなかつた。そして、彼らが等しく浮かべていた空虚な表情が、安定を求めた拳句に、決して高いとはいえない賃金と多大なストレスを『えられる仕事によるものでないことは明らかだつた。

「どうなつてゐるの？」

小さいときに見たアニメを思い出す。主人公の女の子が母親と喧嘩して、お母さんなんていなくなつちゃえばいいのに、と呟くと本当にその通りになるのだ。いなくなつて初めて分かる大切さを伝える教訓話だつたが、それは多くの子どものトラウマとなつていた。

今の自分の状況をテレビで放送したら、視聴者のトラウマになるだろうか、とゆいは思つた。

テニスコートの方向から、見覚えのある面々が現れる。忍たち、女子ソフトテニス部の先輩たちだつた。やはり練習着のまま、カバンとラケットケースをだらしなく担ぎ、夢遊病のようにふらふらした足取りでこちらへ向かつてくる。

「あの……、先輩！　何が……えりしたんですか？」

勇気を振り絞つて、忍に聞いてみた。彼女はあからさまに興味のなさそうな目でゆいを見ると、まるでそこに厄介事が立つて言葉を発し

ているのかと疑つてゐるような顔になつた。

「帰るの

別人のように低い声だった。口を動かすのも、喉の筋肉を使うのも面倒くさいといった様子だ。ゆいはそんな彼女を、テニス部のキャプテンである忍だと認めたくなかつた。

「部活は、どうしたんですか？」

「疲れる」

それだけ言つと、ゆいから視線を逸らして、再び門を手指してだらしなく歩きだした。

「どうなつてゐる……」

校内に残つてゐる全員が、部活も仕事もほつたらかしにして帰ろうとしている。いくら不審者が多い時代とはいへ、一斉下校にもほどがある。

中学生にもなれば、ファイクショーンと現実の区別はつくと自覚していつもりだが、どんなに考えを巡らしたところで、思いつく原因はファンタジーやSFの要素を多分に含むものばかりだった。

自分以外のみんなが魔法にかかつた？ 宇宙人に洗脳された？

……ありえない。

そこでタリアの存在を思い出した。心の国から来た妖精。きっと、あの子が関係してゐるに違いない。そう確信した彼女は、女子ソフトテニス部の部室に急いだ。

本館の角を曲がり、中庭を横切る。部活紹介が終わつても普段の活動内容が不明なままだつたボランティア部や、中庭の池で飼つている鯉にだけ菩薩のような笑みを浮かべる教頭の姿も、今はない。

昼間だといふのに驚くほど校内は閑散としており、そのくせ塙の向こうにある国道からは、いつも通り車の騒音が聞こえる。この奇妙な現象は、学校だけのことなのか。とにかく、誰でもいい、まともな人に会いたい。

部室に到着したとき、大した距離でもないのに彼女の呼吸は大きく乱れていた。そして、部室に入つていく一人の背中を見つけ、涙が出そうになる。

「ゆかりさん!」

嬉野ゆかりと愛花ちなみは、この前と変わらないままの表情で振り向いてくれた。ゆいを見て驚きはしたもの、決して呼び止められることに嫌悪せず、喜んでくれているのが分かる。

「ゆい… ゆいは普通なんだね!」

「はい、お一人も……その、いつものお一人ですよね?」

少し首を傾げて、困ったようにちなみは笑った。

「それはどうかな。いきなりみんな帰るって言い出したかと思えば、他の部活の人や先生たちまでいなくなるでしょ。ワケわかんないし、いつも通りではないかもね」

「とにかく、タリアに聞いてみよう。何か分かるかも」

ゆかりを先頭にして、部室の扉を開いた。ゆいを除いた一人には、タリアの他にこの現象を知るものに心当たりがあつたため、細心の注意を払つた。

ところが、部室の中では、いつも通りであり、かつ今の彼女たちがおかれている状況では不謹慎ともいえるやり取りが行われていた。タリアと中型犬が、戯れていたのである。

「あれ? みんな、どうしたタリア?」

「どうしたじゃない!」

とぼけた質問に、ちなみに怒鳴る。三人が部室に入ると、最後尾のゆいは扉を閉めた。誰も入ってくるものはいないのだからその必要はないのかもしぬないが、不気味な外界と平和な部室とを遮断できるような気がしたのだ。

「その犬は?」

ゆかりは犬を注意深く観察した。毛並みは整つており首輪もしていることから、飼い犬であると予想する。

「友達になつたリア!」

体格差からして気性の荒い動物ならタリアは食べられていたかもしれない、とゆかりは思つたが、本人が気にしていないのであれば何も言つまいと決めた。彼女はここ数日で、タリアと上手く付き合つためには、細かい事情を無視する度量が必要だと悟つていた。

「今、外で不思議なことが起こってるの。突然みんなやる気がなくなって帰ちゃって……、タリア、何か知らない？」

「何かつて何リア？」

「こうして途方にくれるしかなくなつた三人は、悩みとは縁のない二匹の生物を観察しながら、それぞれ思考を働かせた。しかし、彼女たちがどんなに考えたところで、解ける問題ではないのだ。常識の範疇を超えていいる。

結局のところ、タリアが分からぬのであれば、待つしかない。ゆかりとちなみはそれを知つていたが、ゆいだけはその結論に達することができないでいた。その前に、最初に抱くべき疑問があつたのだ。

「あの、どうして私たちだけ何ともないんでしょう？」

心当たりのある一人は、しばらく返答に詰まつた。恐らくはプリキュアであることに関係しているというのが一人の見解だったが、その通りに答えるわけにはいかず、ゆかりはとぼけることにした。

「どうしてだろうね？ 私たちにも分からぬよ」

そして、ゆかりたちも同様の疑問について一考しなければならなくなつた。自分たちがプリキュアだから、この現象の影響を受けていいことは間違いないだろう。しかし、どうしてゆいも変わりないのだろうか。

実は、彼女たちが知らないだけでプリキュアは世界中で平和のために密かに活動しており、ゆいもその一人なのか。そんなことを思い、すぐにはかけた考えだと打ち消すこととした。

犬の背中にタリアが跨り、どうしたらよいかお手上げとなつたちなみにが適当な椅子に腰を下ろしたとき、部室の扉が開かれた。

ようやく現れたかとちなみはすかさず立ち上がり、いつでも逃げられる準備をしたのだが、扉の向こうに立っていたのは、彼女が思う人物ではなかつた。

「タリア、やつと見つけた」

「あなたは……」

ゆいが先ほど校門の所で出会つた女性だつた。思い返せば、学校に異変が起きたのはこの女性が現れてからのことだ。

「ゆいの知り合い？」

ゆかりは一瞬のうちに、様々なパターンの考察をした。現実的なのは、ゆいが知り合いでタリアの秘密を洩らしてしまい、妖精という珍種の生物を捕まえにきたというシナリオだ。またはイカリングの仲間か。そして、最も可能性が低いのは女性がタリアの母親であるという考えだが、これはタリアの反応によってやはり間違いであったと分かった。

「ラクイーン、久しぶりリア！」

「相変わらずね……」

ラクイーンと呼ばれた女性は、タリアの他に三人と一緒に存在を認めるべく、大げさにお辞儀をしてみせた。

「タリアが世話になつたようで、ありがとうね。でも、私が責任をもつて心の国に連れて帰るから」

「じゃあタリアのお母さんは、見つかったんですか!?」

そんな素朴な質問をぶつけてみただけなのに、ゆかりは鋭い目つきで睨まれることとなつた。

「あなた、何を言つてこらの？」

「だつてタリアのお母さんはいなくなつたんですね？　連れて帰るつてことは、見つかつたのかなつて思つたんですけど……」

こちらの世界での保護者として、タリアを渡すには相手が善良な人物であると知る必要があった。ただでさえ得体の知れない相手だ。はつきりさせるためには、こちらも強く出るしかないどちらみは判断した。

「あなたは、どっちなんですか？」

「どっち、とこつと？」

「イカリングの側か、タリアのお母さんの側かつてことです」

女性は僅かに不思議そうな表情を浮かべた後、小さく鼻で笑つた。

「イカリング？　あいつもこちに来てたの」

ほとんど何の事情も知らずに一度も戦つてきたゆかりは、彼女の曖昧な態度に我慢できず、つい声を荒げる。

「あなたは、タリアを無理やり連れて帰りたいんですか？　それとも、

お母さんに会わせてあげられるの？」

ゆかりたちの質問の意図を理解した女性は、軽蔑するような目で二人を見ると大きなため息をついた。

「私は心の国の『樂のカリスマ』、ラクイーン。そうね、タリアを無理やりにでも連れ帰りにきたのよ」

心の国がどんなところなのか、ゆかりは知らない。しかし、それにしても、あんまりじゃないか。どうしてお母さんに会いたい一心で健気に頑張っている幼いタリアを、いつも邪魔するのだ。

「あの、話がよく見えないんですけど……」

「タリアがお母さんを捜しに、いつの世界に来たってのは聞いたんですね？　どうしてかは知らないけど、前にも別の人気がタリアを無理やり連れて行こうとしたんだ」

おじおじするしかなかつたゆいに、ちなみが早口で説明した。そのやうとりを見て、ラクイーンは呆れたように言った。

「いいこと？　私たちには私たちの事情があるの。何も知らないのなら、首を突っ込まないでちょうどいい」

「そうはいかない！」ゆかりは犬に跨つたままのタリアを抱きかえる。「私は、タリアにお母さんを捜す手伝いをするつて約束したのだから……」

ラクイーンが唇を噛むのを見て、ゆかりは言葉につかえた。彼女は、ゆかりたちが知らない事情があると言つた。もしかすると伝説の戦士ブリキュアになり、イカリングと戦つたことによつて誤つた先入観を持つているのかもしれない。ゆかりが話し合いでの解決を試みようとしたとき、タリアが言つた。

「ボクはお母さんを見つけるまで、心の国には帰らないリア！」

すると、ラクイーンはタリアの頬に右手を置き、優しい声になつた。

「タリア、あんたは本当に哀れな子だね。今、樂にしてあげる」

右手が、ほんのりと白く光る。恐らくは、イカリングがオコリンボーを生み出すときに現れる赤い光と同種のものだらう。ゆかりは体をひねつて、タリアをラクイーンの手から遠ざけた。

「何するの!?」

白い光を持て余したラクイーンは、右手の上でそれをボールのよう
に弄び、風船のようにふわふわと浮かせた。

「雪つたでしょ？ 私は心の国の『樂のカリスマ』だつて。私は、辛いことや苦しいことからみんなの心を解放してあげられる力があるの」

「それじゃあ、みんなが急に帰つてしまつたのは、あなたのせいなの？」

異世界のことも、それぞれの思惑も理解できないままでゆいだつたが、ラクイーンが現れてみんながおかしくなつた。そのことを決定づけるには、今の説明だけで十分だつた。

「あら、そういうえばあなたよね？ 樂の力の源さん」「じつこうこと？」

ゆかりが聞き返すと、ラクイーンはにやりと笑つた。

「私だつて、何もないといふから人々の心は操れない。この世界の人間つたら、馬鹿みたいに真面目で、ちつとも隙をみせないんだから。都合のいいことに、その子の心は樂の感情で満ち満ちていた」

ゆいに向けられた指の先に、白い光が移動した。彼女の瞳にそれが映ると、さきほど自分が抱いた気持ちが頭の中に呼び起された。

「その子はね、学校にいるのが嫌だつたの。楽しくなかつたのよ」「そんな……。でも、ゆいはこの前、部活に来てくれたとき楽しそうだつた！」

「私はその子の心を見た。あなたなんかより、しつかりとね。本当にこの子は、楽しんでいたかしら？」

ゆかりは思い出した。見学に来たとき、ゆいが何度も表情を曇らせたことを。タリアと一緒にいるときと比べて、明らかにぎこちない態度。何かきっかけがあつたはずだ。

「それは……、やっぱり一人だけで知らない人の中に混ざるのは面心地が悪かつたかもしだれいけど……」

どうして、ゆいは一人で來ていたのか。ゆかりに改めてお礼を言うためだ。しかし、普通そこまでするだろ？ 彼女を保健室に連れていったときに、感謝の言葉は確かに受け取つた。それなのに、お礼

を口実にしてゆかりに会いにきた。よつぽど、自分のことを気に入つてくれたのだろうか。

そんな自惚れた考えは捨てて、むつともやらしい理由をさがす。しかし、まだよく知り合つてもいないので、分かるわけがない。「ゆい、どうしてこれから来てくれなかつたリア？ ボクはゆいのことを待つてたりア」

そんなことを言ひ出すタリアに、ちなみが注意する。

「そりゃタリアばかり気にしてられないでしょ。クラスにも友達がいるんだから」

ゆいの表情が、たしかに曇つた。どうして ゆかりは思い出す。次に来るときは友達を誘つてと言われたとき、ゆいはそうなつた。タリアが友達だと言えば、ゆいは微笑んだ。友達……、これがキーワードなのだろうか。

「やつと分かつたよつね」

ラクイーンの指先で、光はどんどんその輝きを増した。それは眩しいといつよつ、ただ目を背けたくなるよつな、鈍い光だ。

「あの……」 私、実は……

「いいのよ、無理しないで」ゆいの肩に手を置いて、ラクイーンは言葉を遮つた。「これ以上、苦しむ必要はないの。さあ、楽におなり」白い光を近づけられ、ゆいの顔が薄暗い部室の中で浮かび上がる。恐怖と安堵の入り混じつた表情を見たゆかりは、ポケットから指環を取り出して右手の薬指にはめた。

「ゆいから離れて！」

「あら、何をするつもり？」

「私たちには何の力もないと思つたら、大間違いだから」

ちなみに右の手首に真紅のブレスレットを装着した。しかし、武器を向けられたならともかく、ただ目の前で一人の女子中学生が装飾品を身に着けただけでは、ラクイーンは動じなかつた。

「じゃあ、どんな力があるつてこいつのが、見せてもらいましょうか」

首輪を乱暴につかむと、犬を連れてラクイーンは部室の外に出た。手をかざすと、犬は鈍い白の光に包まれる。

「私のために働け、ナマケモーノ!!」

見る見るうちに巨大化し、おつとりとしていた犬は、凶暴そうな獣の怪物となつた。

ゆかりとちなみは、お互に田で合図して頷いた。ゆいに知られてしまつと少しばかり厄介だが、妖精や怪物を目の当たりにしているのだから、全てをさらけ出した方が手っ取り早い。

「プリキュア！ フィーリング・コネクト！」

指環とブレスレットは、かけ声をきつかけにそれぞれ大きな光の環となつて、彼女たちの体をくぐらせる。

「みんなでつなぐ、喜びの環！ キュアリンク！」

「信じて振るう怒りの拳！ キュアルビー！」

プリキュアに変身した二人は、果敢に怪物に立ち向かつていった。素早い動きをするナマケモノに翻弄されながらも、一対一という状況を活かして上手く戦つている。ゆいにとつてそれは、あまりにも現実離れした光景だった。

「変身した……？」

彼女は初めて会つたタリアの存在を、すんなり受け容れることができた。理屈では説明できないが、クラスメイトがいつの間にか友達になつてゐるような、自然な流れだつた。

しかし、学校中の人間が一斉にいなくなり、異世界からやって来た女性が犬を怪物に変え、二人の先輩は変身して戦つている。とても人間業ではない動きだ。これらのことばは、決して彼女が許容できるものではなかつた。

「『伝説の戦士』プリキュア……。なぜ、お前たちが……！」

「ゆかりは喜び、ちなみは怒りの力でプリキュアになつたリア」

まるでラクイーンが連續ドラマを一話見逃してしまつたかのような軽い口調で、タリアが説明した。

「喜び、怒り……」

先ほどまでの余裕が消え、ラクイーンの表情には憎しみが現れた。そのままの表情で笑い出したものだから、男が百人に一人くらいなら振り返つてもよさそうな顔立ちが、ひどくけばけばしくなつた。

「だけど、私は“楽しみ”を司る者！ そんな力で私に勝てると思つ！」

「思つコアー！」タリアは物怖じする」となく叫んだ。「ゆいからも、強い“楽しみ”の心を感じるリア！」

ゆいの心に、何か重たいものがすとんと落ちた。

どうしてそんなことを言つのか。どうしてみんな、自分を追いつめることがかり言つのか。

私は自分の悪いところをちゃんと理解したうえで、私なりに頑張ろうとしている。それなのに、みんなは私の気持ちなんて無視して、自分たちだけで盛り上がっている。タリアだけは分かつてくれていると思っていた。それなのにどうして……。

そんな彼女の気持ちを読み取ったラクイーンは、ひどく愚かで矮小なものを見るような目でゆいを見た。

「たしかに、その子の楽をしたいって気持ちは大したものだつたわね。あんなに多くの人間を怠惰にさせ、強力なナマケモノを生み出せた。でもね、タリア」怪物と戦つてゐる一人の戦士を後目に、ラクイーンは言葉を続けた。「“楽しみ”の心といつのは、強いものじゃない。むしろ弱い人間が持つてゐるもの。仕事や勉強や人間関係、そんな面倒くさいものをやめて、ただ楽しいことだけをしたい欲求。それが“樂”であり“楽しみ”なの」

これまでゲームの中でしか戦つた経験のない新米のプリキュアは、これまでとは違う怪物を相手に疲弊しきつてゐる。人型のオコリンボーであれば攻撃の軌道は予想できるが、ナマケモノーは動物的な勘と動きで彼女たちをすっかり手玉に取つてゐる。

「そのお嬢ちゃんは強い“樂”の心を持つてゐるけれど、強い力にはなり得ない！」

その通りだと、ゆいは思った。自分は普通の人間。ほかの人よりもちょっと勇気がなくて、少しばかり言い訳が上手いだけ。だから必然的に、こんな性格になつた。でも誰かに迷惑をかけたりはしていない。自分が惨めになるだけ。

「そんなことない！」

怪物の顎に蹴りを食らわせたリンクは、部活で鍛えた喉を働かせ大声で叫んだ。急所に強烈な一撃を受けたナマケモノは、仰向けに倒れる。

「誰だつて、逃げ出したい、樂をしたいって気持ちはあるかもしない。でも、ゆいは私に会いに来ててくれて、一緒に部活をして、一緒に帰った。私はあの日、ゆいと過ごした時間がすごく嬉しかったし、すごく楽しかった!!」

呻き声を上げながら起き上ったナマケモノは興奮した様子で、背後からリンクに飛びかかった。

「危ない！」

ゆいが悲鳴を上げて間もなく、その巨体の推進方向はルビーのパンチによって見当違いの方向へ変えられた。

「本当は今日来てくれるって楽しみにしてたんだけど……、明日でも明後日でも、来週でもいい。無理に急いで決める必要はないからさ。軽い気持ちでね、また見学に来てよ」

ルビーが拳を握つて親指を立てると、手首のブレスレットが小さく揺れた。真紅に輝くそれは、ゆいにとってあまりにも眩しかった。

「何を言つてこるの。友達のこなこの子を苦しめたのは、あなた達なのよ？」

彼女の心に落ちたもの。それは、胸ポケットにしまってある口ケットかもしれない、とゆいは思つた。ひもがあつたなら、首からぶらさがつたままずっと身につけていられる。しかし、ひもが切れてしまつた今、ちょっとでも気を抜いて手を放してしまえば、いともたやすく落ちてしまう。そんな簡単に落ちてしまつものなら、もつ拾わなくてもいいじゃないか。

「友達なら、ボクがいるリア！」

心の中で口ケットは微かに光り、自身の存在を主張した。こじりこじりながら、手を伸ばしてくれと言つているかのようだったが、ゆいは素直にそれに従うことはできなかつた。

「私たちもだよ!」攻撃を避けながらリンクが言つた。「私たち、あつといい友達になれる!」

躊躇つていた手を、伸ばしてもいい気がした。

「友達なんて、難しく考えるもんじゃない！ 誰だって初めは他人なんだからー！」

ルビーの力強い拳が、ナマケモーノの巨体を弾き飛ばす。

「ゆいの本当の気持ちを、教えてよ!!」 リンクが大声で言った。

「私は……」

結局、ゆいは口ケットを拾わなかつた。ゆかりが拾つたのを手渡されただけ。それを受け取つたとき、一人の手はつながつた。気がつくと、ちなみにタリアもそこにいた。忍たちもいたかもしれない。どうしてこんなことを思うのか、答えは明らかだつた。ゆいはみんなと一緒にいたかった。手が差しのばされるのを待つてゐるだけではダメだと、ようやく分かつた。勇氣を出してゆかりとつないでいるのと反対の手を伸ばすと、タリアがつかんでくれた。ちなみに、それぞれ手をつなぐ。そこには、一つの環ができた。

楽しみを共有できる、小さな環だつた。

「私は……楽しかつた！」

その瞬間、ゆいの頭上に白い光の環が現れた。これまで自分の中に封印してきた感情が具現化したかのように、清々しい気分だつた。

「プリキュアー・フィーリング・マネクター！」

自分が何をしているのか、言つてこる」との意味さえも解らなかつたが、それでいいこと思えた。これまでのゆいは、友達の家のインターフォンを押すだけでも、相手の親が出てきたときの対応を何度も反復していた。

だけど、楽しいといつ気持ち、素直な感情が現れるそのときには、余計なことを考へる余裕などないのだ。自分がどうしたいか、重要なのはそれだけだ。

光の環は、ゆいを純白のコスチュームを身に纏つた戦士に変身させる。首の周りで小さくなると、それはボールチェーンのペンダントとなつて胸ポケットにある口ケットとつながつた。もう一度と、落とさないで済むように。

「今を楽しむ、恵みの心！ キュアプレジャー！」

二人の先輩プリキュアは、その様子を見て今さら驚きはしなかつた。それは落ち着いたころに、遅れてやつてくるのだらう。

それでいい、とリンクは思った。人生を楽しむ秘訣は、ノリだと誰かが言っていた。その誰かだって、辛いことや苦しいことを経験してきたに違いない。だけど、いつも辛いわけじゃない。楽しいことだけで、たくさんある。

その気持ちが、リンクに力を与えた。

「プリキュア！ リンクポーション!!」

彼女の掌から発射された光の束は、ナマケモーノの腹部を正確に捉え、動きを鈍くした。

「今だ、いけッ！」

ルビーの指示に従い、プレジャーは身につけたばかりのペンドントに、力を込める。すると、ボールチェーンの部分は複数のボールの形をした光となつて浮かび上がった。

「どうして戦うの!? あなたはそんな人間じゃない。色んなことから、友達を作ることからさえ逃げて、楽ばかりしてきた。それがあなたの本性でしょウ!？」

「たしかに私は、いつも逃げてた。でも、そんなのぜんぜん楽しくないよー！」

ラクイーンの言葉を受けて、はつきりと感じた。たしかに、辛い思いはできるだけしたくない。楽に生きられるなら、それが一番だ。だとしても、頑張るというのは決して悪いことではない。

「私はゆかりさんとちなみさんと、タリアと、これから友達になつていく人たちと、楽しみを分かち合いたい！」

人の性格なんて、簡単には変わらない。だから、この気持ちを抱くことができた心こそが、自分の本性なのだろう。ゆいは、もう迷わなかつた。

「プリキュア！ プレジャー・ブレス!!」

光の散弾が、ナマケモーノに降り注ぐ。悲鳴は次第に穏やかな鳴き声となり、獣の怪物から白い光が離れたとき、その中からじく普通の愛らしい犬が姿をあらわした。

「キュアプレジャー……『楽しみ』のプリキュア、私は認めない……！」

やはり瞬間移動のようなもので姿を消したラクイーンを見送り、三人は変身を解いた。ゆいにとつて、今の出来事が現実だつたか判断するのは容易だつた。ラクイーンがいたはずの場所にはばいばいと手を振つているタリアはそこにいて、自身の首にはネックレスがあつたのだから。

ならば、自分の気持ちと正直に向き合つ必要がある。それがどれほど情けなく、目を逸らしてしまったことになることでも。彼女は一人の正面に立つて、ゆっくりと口を開いた。

「私、この春休みに……弘つ越してきて、それで、この学校にはまだ友達がないんです……」

これだけのことを言つたために、ゆいは罪深い過去を告白する思いだつた。きっとラクイーンのせいでばれていたに違いない。しかし、楽になるというのは、辛い感情を飲み込むのではなく、吐き出してしまえばいいと知つた。

そして、先輩としてまだ一年生のゆかりは、ゆいが解放したその気持ちを処理することこれが、自分の役割だと思つた。

「私たちがいるよ。」「みるよ。」

こんなとき、どんな顔をしたらいいか分からなかつたゆいは、とりあえず笑うこととした。それはゆかりたちに伝染して、彼女たちのほかに誰もいない学校の一角は笑顔に溢れた。

忘れられていた一匹の犬は、ナマケモーノとなつてプリキュアに倒された恨みなど光と共に消え去つてしまつたのか、元気な調子で吠えている。一体どうしたのだろうと辺りを見渡すと、一人の女子生徒がこちらに向かつて走つてくるのが見えた。

「もう、やつと見つけた」

制服のタイだけ外したラフな格好の女の子は、ゆいと同じクラスの、友達から悦ちゃんなどと呼ばれていた子だつた。彼女は、ゆいたちを見ると、深々とお辞儀をした。

「すみません。いつのココアが、ご迷惑をかけませんでした？」

走ってきたのか、息も絶え絶えで、頭を下げる拍子に一滴の汗が地面に落ちた。口口口とこつ名前らしき犬は、飼い主に会えて嬉しい様子で尻尾を振つている。

「そんな、迷惑だなんて……」

素早くタリアを背中に隠して、できるだけ怪しまれないうにゆかりは気をつけた。まさか、おたくの犬が化け物にされて襲つてきましたが、私たちがやつづけて元に戻しましたなどと言えるわけがない。顔を上げた悦ちゃんは、観察するようにゆいを見ると、いつもクラスで友達と接するのと変わらない態度で彼女に話しかけた。

「恵原さん、だよね？　ソフトテニス部にしたんだ」

「えっ？　あの……」

一瞬のうちに、何パターンもの回答が浮かんでは消えた。どんなことを言えば、話が盛り上がるだろ？「うん、なんて返事だけは絶対にだめだ。何か上手いことは言えないか。そんなことを考えて、結局は一番田にまいらなそうなものに決めた。

「うん、前にも見学させてもらつて、ソフトテニス部に入らうかな……つて」

「そりゃなんだー、私も興味あるナビ、迷つてるんだよね」

同じ人間とは思えないほど素早く返してきた彼女に困惑するゆいは、自分が九十年代初期のコンピュータみたいだと感じた。これまで悩んでいたのは何だつたんだ。こんなことなら、もつと早くに自分から話しかけたらよかつたじやないか。

悶々として自分が何も言葉を発してないことに気がついたときには、またも悦ちゃんに先を越されていた。

「この部活、樂しい~」

ゆいの頬がゆるんだ。そんなの、答えは決まつている。

「うん、樂しそよ~」

直に悦ちゃんは、じうじて学校がこんなに静かなのか疑問に思つだるつ。

ラクイーンが退散して、みんなは、樂の支配から解放されたことだ。それからどんな行動をとるかで、その人の本性がわかる。

きっと誰にだつて、楽をしたいという気持ちはある。楽しいことだけをしたいという気持ちも、同じくらいあるはずだ。それらは人として当たり前の感情だから、ほとんどの者はそのまま帰ってしまうかもしれない。

学校に戻つてくるのは、ほんの一握り。それはきっと、くそ真面目か、学校でみんなと一緒に過ごす時間を楽しいと感じている人だ。だから、しばらくしてゆいは、女子ソフトテニス部のメンバーとして歓迎されるはずだろう。

そんなみんなを、自分にとってどんな存在と認識するかは、彼女次第だ。

4 1・後の席のイヤなやつ!?

恩田優輝おんだゆうきは、教室内のあらゆる物音を雑音と捉えることしかできなかつた。

昼休みの一一年一組の教室。いくつかのグループがあわいに集まり、他愛のないお喋りをしている。

夕べのテレビ番組の感想、悪気のない陰口、校則への不満。ばかみたいだ、と彼は思う。

四月も下旬にさしかかり、教室からクラス替えの新鮮さはすっかり失われた。初めの頃は級友と親交を深めようとする生徒も多く見られたが、結局はいつものメンバーに落ち着いたといった様子だ。彼もまた同様だった。

どのお喋りにも交わることなく廊下側の前から二番目の席についた彼は、枕代わりにした腕に顔を埋めて眠りうつと努めていた。これが、彼の思う昼休みの有効な使い方だった。

どうしても聞こえてくる会話に嫌気がさして、心の中で彼らを批判する。あまりにも幼稚でくだらない話題のために、せっかくの休み時間を使っている。なんて非効率な連中だ、と。

そんなもどかしい思いがひしめき合って、今日も眠る」とは許されない。

「聞いてよ、ゆかり。うちの弟が……」

彼の二つ前の席から、愛花ちなみの声が聞こえた。彼女は背もたれを壁に向けるかたちで椅子を九十度回転させると、後ろの席のゆかりに弟の不満を訴える。

「一田中ずっと遊びまわっててね、晩飯できたって呼びに行つても帰つてこないの。で、やつと帰つてきたときには、服を泥だらけにしてるんだよ。信じられる?」

「でも、男の子だし、しちうがないよ」

ゆかりは廊下側の列であることを活用して、壁にテニスラケットを立てかけ、やや左寄りに椅子を置いた窮屈そうな姿勢で座っていた。

通路側の床には通学かばんがあり、机のフックには手提げ袋がぶら下がっている。

よほど変わった授業でもない限り、学校に持ってくる荷物など通学かばん一つに納まるはずなのに、どうして手提げ袋までいるのか優輝には不思議だつたが、わざわざ質問するほどでもないといつ結論に至つた。

手提げ袋などどうでもいい。問題は通学かばんの方だ。

優輝はここにとどり、ゆかりのかばんが微かに動くよつて感じていた。それは気のせいではないよつて、その度に彼女たちはかばんを持つてこそそと教室を出ていくのだ。

一体、あのかばんには何が入つてているのか。好奇心が睡眠欲に勝り、彼は一人の会話に聞き耳を立てることとした。

「父ちゃんもそう言つてたけど、母ちゃんはかんかんだよ。食器は片付けられないし、洗濯物も大変だし。なんで男子つてああんだろうね」

「悠くん、もう九時だっけ？」

どうにか話を穏やかな方向にもつていつとしていくのが、優輝にも分かつた。しかし、ちなみはそんな友人の努力などお構いなしで愚痴を続ける。

「いや、まだハオ。もう、ゆかりがもらつてくれない？ 私は疲れたよ」

「いいなあ。私は一人っ子だから、兄弟喧嘩とか憧れる」

「何言つてんの。弟なんてね、いてもホント邪魔なだけだつて」

それからしばらくの間は、ちなみの弟に対する不満をひたすら聞かなければならなかつた。正式な聞き手であるゆかりも同じように感じているかもしれないが、優輝にとつてそれはおもしろくない話題であり、裁判であれば暴言を理由に異議ありと唱えたいくらいだ。

「……つむかーよ、

ほとんじ無意識に、または、あまりに意識しそぎた為かもしけない。しまつた、と思つたときには、言葉はひとりでに彼の口からこぼれていた。

しかし、顔を伏せていたのだから、声はくぐもつて聞き取りにくかつたはずだ。何か寝言でも言ったのかと納得するだらう。そんな期待をこめて、彼はこいつそりと前の席を覗いた。

「「めんね、恩田くん。声大きかった？」

申し訳なさそうな顔で、ゆかりがこちらを見ていた。観念して彼は顔を上げる。額には腕の赤い跡がつき、中途半端な睡眠のせいで目つきも悪い。おそらく、今までまともに話したことのないクラスメイトと向き合ひには、ふさわしくない容貌になっているかもしだれない。何を言えばよいか分からず、返事の代わりに鼻から大きく息を吐いて、逃げるよう机に突っ伏した。

「でも、言い方つてもんがあるでしょ」

ゆかりの机に身を乗り出して、ちなみにが非難する。優輝はそれが気に入らず、反撃のつもりでいびきのよつに喉を鳴らさせてみせた。

ダイエットも気にする思春期の女子としては残念なことに、ちなみに体重をかけたせいで机は大きく傾き、押さえようと慌てて立ち上がったゆかりの椅子は優輝の机に強くぶつかった。

ゆかりの机は落ち着かることができたが、壁に立てかけていたラケットが彼女と椅子の間に倒れてかばんに当たる。

「いつて……」

「痛いリア……」

かばんから微かに聞こえたその声に、優輝は顔をしかめる。「こじ」とく睡眠を妨げるゆかりたちへの文句など忘れて、彼女のかばんに意識を向ける。

「今、何か……？」

「えっ!? んづかした?」

ゆかりのかばんをじっと見つめると、たしかに中で何かが動いた。教科書が倒れるような動きとは明らかに違い、それは生き物のようにこじそじそとしている。

「寝ぼけてたんでしょ。恩田って、休み時間はいつも寝てるもんね」

ちなみにの言葉に込められた嫌味を察すると、優輝は席を立った。睡眠欲や好奇心より、嫌悪感が最も強く残った。

彼にとつて女子とはやたらと秘密を共有したがる性質をもつ厄介な人種であり、それは彼が何よりもくだらないと思うものだつた。どうせ、ハムスターあたりの小動物をこつそり持ってきて、ばかみたいにはしゃいでいるんだる。彼はそう推察した。周囲が騒音のような声で話している中、耳栓でもしているのではないかと確かめたくなるほど涼しげな表情で本を読んでいる友人の席に向かい、その前の席を指さす。

「徳井、ここの席のやつは？」

指をしおりの代わりにして本をたたむと、眼鏡をかけた大人しそうな男子生徒は顔を上げて優輝の不機嫌そうな顔を認め、それからゆかりたちの方を見た。気まずそうに笑いかけてきたゆかりに同じような仕草をしてみせ、優輝に言った。

「昼休みになつてずっとといながら、座つていいくと思つよ」

それだけ確認すると、優輝は後ろ向きに椅子に腰をかけ、背もたれと徳井の机を端だけ借りて腕を枕に顔を埋めた。

「何なの、あいつ」

呆れたよつて言つちなみをよそに、優輝は寝ねじただけに意識を集中させた。

「やなヤツやなヤツやなヤツ……」

まるで紙パックの牛乳をがぶ飲みしそうなちなみの怒りは、放課後になつても治まる気配はない。きっと飛行船や電車を乗りこなす不可思議な猫を見かけても、彼女の気が晴れることはないだつ。

ゆかりにとつてはタリアが見つかりそうになつた」との方が問題なのだが、どつやうらちなみの中ではストレスにかき消されてしまったようだ。

「どつしたの。今日はやけに荒れてるね」

ボールの入つたかごを乗せた買い物カートを押して、忍がコートに入ってきた。テニス部を作つた先輩たちが近くのスーパーから譲り受けたもので、ところどころに目立つ錆がある。

ゆかりは氣の利く後輩のフリをしてカートを引き受け、愚痴の聞き

手を忍に押し付けることに成功した。

「聞いてくれます？ 私たちは休み時間に話してただけなのに、ゆかりの後ろの席の男子がうるさいとか言つてきたんですね…」

新しい話し相手を歓迎してちなみは嬉しそうに憤慨してみせた。

そのエネルギーを練習まで蓄えることはできないものかとゆかりが辺りを見渡すと、「コートに入っているのは自分たちだけだと気づいた。

練習が始まる時間まで少し余裕があるため、準備を終えた部員たちはコートの外に散らばって涼しい屋根の下で談笑をしている。今週の初めに入つたばかりの一年生は何をすればよいか分からず、とりあえず全員で固まっていた。

忍はそんな部員たちとテニスコートの数を見比べて、困ったような表情を浮かべた。どうやら、ちなみの愚痴にちゃんと付き合いつもりはなさそうだとゆかりは見てとった。

「これだから男子は……」

後輩の加入によつて得た効率と引き換えに仕事を失つたちなみは、ボールの空気圧を確かめるという地味な作業を始めた。握られたボールは健気にも彼女の怒りを一身に受け止め、レモン形に変形する。

「まあ、ちなみに声が大きいからねえ」

「そういうことじやありません！」

ゆかりは時計を手にして校舎の方を見た。じきに練習の始まる時間だが、やはり顧問は現れない。その場合はキャプテンである忍が練習開始の判断をしなければならないが、ちなみはそのことに気付いていないようだ。

どうにかして忍にみんなを集合させるよう促そととしたとき、副キャプテンの志穂がコートに入ってきた。かごからボールを一つ取り出すと、ちなみの顔に押し付ける。

「やつしから、男子がどうとか聞こえてたよ。後輩のくせに青春してんじやないの」

「違います！ 後ろの席の男子がむかつくつて話ですよ」

ちなみにはボールを顔から遠ざけると、志穂のためにまた初めから説明をした。まるで沸騰したお湯のようだと、ゆかりは思つた。このまま怒り続ければ彼女は氣化してしまひのではなにだらうか。

「ちなみに弟じるんじやなかつたつけ？」 やのくひこ簡単にあしづいなぞこよ」

「弟だけでもイライラせられてるんだから、無理ですよ。それに、小学校のとき回じクラスになつたことがありますけど、あの恩田つてやつは……」

「え？」

もはや愚痴の相手は志穂に任せて練習前の確認をしていた忍が、素つ頓狂な声を出した。ちなみは彼女の方を振り返り、思い出したよしばらく妙な間が空いて忍が口を開くまで、ゆかりは何かが胸につかえているような気分だった。

「まあ、隣の芝は青く見えるつてやつだよ」
言葉が遅れたのを誤魔化すうとして、忍はぎこちないう調になつた。志穂はそんな忍の肩に腕を回すと、悪戯っぽく笑つた。
「忍の弟つて、あんただちと回じ中一なんだよ？ やのクラスの男子と何も変わらないつて」

忍は体を回転させてクールに志穂の腕を振り払つと、校舎の壁にかかっている時計を見た。

「ああ、もう練習始めるよ。志穂、みんなを集めてしまつて」
「了解、おねーちゃん」

からかうよつて言つて、彼女は「トー」の外に出ると談笑している部員たちに声をかけた。話が遮られたことに一瞬もすつとした表情になる者もいたが、渋々といった感じで「トー」に入り、忍の前に整列する。

「よし。じゃあ春の大会も近いことだし、集中していくよ。練習メーテーは昨日と同じ。悪いけど、一年生は今日もランニングと素振り

をやつてて

最後列の一年生から、はつきり落胆していると分かるため息が漏れた。

つい数週間前まで小学生だった彼女たちのほとんどは、これまでにちゃんととしたスポーツの経験がなかった。そのひ弱な体で学校の外回り十周というメニューがどれほど過酷なものかはゆかりたちも身を以て体験済みだが、それは結果として必要な訓練だったと今になつて思う。

指示を受けて解散すると、一年生は筋肉痛と倦怠感でとぼとぼした足取りになりながら、走り込みに行くため校門の方に向かつた。これは体力づくりの他に、篠の役目も果たす。毎年、新入部員の一割はこの段階で文化部への移籍を決意し、残る部員に対しても最低限のやる気を測ることができる。

「早く終わった人は全員が帰つてくるまで休憩してもいいですか？それとも、すぐに素振りを始めます？」

初めの基礎練習は、前衛と後衛に別れて順番に行われる。前衛であるちなみにがコートの向こう側に移動して、後衛の忍とゆかりがそのままの位置でボールの準備をしていると、悦ちゃんが話しかけてきた。一年生は全員ランニングに行つてしまつたと思っていたゆかりは、彼女たちが出ていった方を見た。すると、コートの出入口にゆいが立つていた。控え目にこちらの様子を窺つている。

「そうだね、素振りは全員そろつてから始めようか。他の子にも伝えておいてくれる？」

「はいー」

元気に返事をしてまだ何か言いたそうな悦ちゃんに、ゆかりは目で合図した。

「早く行かないとい、一人とも遅れるよ？」

きょとんとした顔で振り返りゆいの姿を見つけると、悦ちゃんは軽くお辞儀をして彼女に駆け寄つていった。

「恵原さん、待つてくれたんだ」

「あ……うん」

伏し目がちに応えるゆいを気にして、悦ちゃんは言った。

「じゃあ、行こっか」

手を引かれて、ゆいの顔がほころんだ。みんなの後を追つて校門へと走つていく一人の後ろ姿を見送りながら微笑むゆかりの隣で、忍が大きなため息をつく。

「どうしたんですか？」

「いや、なんていうかさ……」忍は力なく笑つて、気持ちを整理するためか大きく息を吸い込んだ。「ちょっと、指示が大ざつぱだつたかなって」

「そんなことないですよ。ただの確認じゃないですか」

「最近、なんか調子でないんだ、私」

カートに手をついて頃垂れる忍を見て、ゆかりは季節外れの風邪を心配した。ゆかりの知るかぎり、忍が練習中にこのよつなだらしない格好をして、気の緩みを露呈させたことはなかつた。

それどころか、キャプテンになつてからの彼女は後輩への優しさを失わないままに、使命感と闘志をたぎらせて自らを律するような傾向もみられた。とりわけ、今は進級して初めての大会を控えている。ウイルスの入り込む余地などないはずだ。

「先輩、具合でも悪いんですねか？」

前衛のはずなのにまだこちらに残つていた志穂が大げさに笑つてゆかりの心配をはねのけると、忍の背中を強く叩いた。

「年下の面倒を見るのも、大変つてことなんだろうねえ」

「ちよつと、志穂」

背中を叩かれた反撃のつもりか、彼女は志穂の横腹を肘で突いた。その声色に氣だるさのようなものは感じられず、ゆかりはほつとした。そして、自分たちが彼女の負担になつてしているのかもしけないという不安を抱いた。

「すみません。私たちが入部したときは一年生の先輩たちに見てもらつたのに、今の私たちは何もできなくて……」

早口に謝ると、志穂はとも面白そうな表情を浮かべてゆかりと忍を交互に見た。

「そういうのじゃないんだよ、ね？」

「いいから早くあっちに行きなさい。練習始めるよ」

素っ気なく返す忍と、何かを楽しんでいた志穂から何も答えを導き出すことはできず、ゆかりはただ妙な先輩のいる部活に入ったものだと改めて感じていた。

ちなみが家に帰つて牛乳をがぶ飲みしたかどうかなど、翌朝になるとゆかりにとつてはすっかりどうでもいい問題になつていたのだが、優輝が教室に入つてくるなり突つかかつた彼女を見るに、カルシウムは不足しているようだと分析した。

「あれ？ 遅刻ぎりぎりなんじゃない、恩田？ 寝坊しちゃつた？」
勝ち誇るように嫌味を言つちなみを見て、プリキュアとして初めての変身がこの瞬間だつたとしたら、彼女は憎しみのプリキュアにでもなつていたのかもしれないとゆかりは思つた。

相手にするのも面倒くさいといった様子で、優輝は何も言わずに席につくと腕を枕にしてその中に顔をうずめた。

「呆れた。まだ寝るんだ」

拍子抜けしたように言つちなみをなだめながら、ゆかりは後ろの席を気にした。言葉を交わしたのは昨日が初めてなのに、彼からほどことなくノスタルジックな雰囲気が感じられる。

「おはよー」

ゆかりの顔の高さにある窓が廊下側から開き、志穂が顔を出した。彼女はゆかりが知るかぎり、友好的だが自分の身が危うくなつたときには後輩や友人を先生の生贊に捧げる覚悟を伴つた生き方をしており、わざわざ挨拶をするためだけに後輩の教室を訪れることはこれまでなかつた。

「おはよーい、じぞこます。どうしたんですか、もうすぐチャイム鳴りますよ？」

すりガラスで姿が見えなかつたため存在に気付けなかつたが、忍も外にいるようで焦つたように言つた。

「志穂、いい加減にしないと私も怒るよ？」

「いいじゃん。ちょっと確認するだけだつて」

志穂は窓から上半身を乗り出して、ゆかりの後ろの席で伏せている優輝の頭頂部を観察すると、出し抜けに彼のつむじを指でつついた。

「何してるんですか、先輩！」

せっかく話すきっかけができたのだから、前後の席のよしみで仲良くしていきたいと思つていたゆかりは、優輝との始まつてもいない関係に波風を立てないでほしかつた。

彼は不機嫌な顔を上げると、まず田の前にいるゆかりを睨み、すぐに彼女が潔白だと見抜くと犯行を隠すつもりもない様子の志穂を睨んだ。

「やつぱり」

志穂がそう言つと、忍は大きなため息を吐いて窓をさりげに開け顔を見せた。

「ごめん。何でもないから」

田を細めたまま、つまらなそうに優輝はまた顔を伏せた。忍は力づくで志穂を三年生の教室に帰らせようと腕を引っ張つていたが、ゆかりたちにとつては説明のないまま彼女たちを帰らせるわけにはいかない。何がなんだかわつぱりだった。

「お一人は、恩田くんと知り合いなんですか？」

この質問を待つてましたと言わんばかりに、志穂は満面の笑みを見せた。

「あんただつて、ひどい後輩だね。我らがキャプテンの名前を忘れるなんてさ」

「忍先輩の……？」

大会で観客席から見ていた忍の後ろ姿を、ゆかりは忘れることができなかつた。いつも優しい彼女の、真剣な姿。自分もああなりたいと思つたものだ。

見惚れていたからこそ見落としていた、といつ言い訳は通用しないだろうか。

試合中、彼女の着るゴーフォームの背中には、恩田と書かれたゼッケンが確かにあつた。

「でも、珍しくもない苗字だし？」

自分の非を少しでも低減しようと引きつった口調で、いつちなみの肩に、ゆかりは手を置いた。もはや逃れないと今まできない。

窓の外では、恩田忍が難しい表情を浮かべながら志穂を引きずっている。その表情にどのような思いが込められているのかは読み取れなかつたが、少なからず苗字を忘れていた自分たちへの非難も含まれているだろうとゆかりは悟つた。

結果を認めて、素直に謝る。

ちなみには観念したように肩をすくめると、改めてゆかりの後ろの席を見た。

彼女にとってイヤなやつであり、尊敬する恩田忍の弟である恩田優輝は、間違いなく寝たふりをしていた。

4 2・後ろの席のイヤなやつ!?

所どころ外壁の塗装が剥げてしまっているアパートが見えてきたところで、まだ肌寒さを感じる気候にも関わらず忍は額の汗を拭つた。

部活の片付けが終わる頃にはすっかり日も暮れてしまい、すぐにも着替えを済ませて帰つてしまいたかったのだが、解散した後で悦ちゃんに居残りでならボールを打つてもいいかと懇願されたのだった。

どうやらそれは、彼女個人ではなく一年生全體から出た意見のようだ、忍はできるだけ丁寧な口調で入部したばかりではコートに入れてあげられない理由を説明した。

基本的なフォームができないうちにボールを打つと、変な癖がついてしまう。さらに、一人でも怪我をしたり、誤って校舎のガラスを割つてしまつたときなどの責任問題が発生するからだ、と。

渋々ながら納得した様子で帰つていく一年生たちを見送つた後、部室にはゆかりとちなみ、志穂の三人しか残つていなかつた。

せつかく待つてくれていた彼女たちには申し訳ないが、着替える時間も惜しいくらいで、制服をかばんにつめ込むと忍は練習着のまま急いで帰路についたのだった。

ちかちかと明滅する不安定な電球の灯りを頼りに階段を上ると、練習の疲れのためか足の筋肉が強張つているように感じた。練習着は汗で背中に張り付いている。すぐにでも部屋に帰つてシャワーを浴び布団に飛び込んでしまいたい衝動を抑えて、一段ずつ慎重に上がつていった。

玄関の前に差しかかると、扉の向こうから包丁とまな板のぶつかるぎこちないリズムが聞こえてきた。

時刻を確認するため左腕を見たが、腕時計は制服と一緒にかばんの中にあると思い出して、大きなため息を吐く。また、やつてしまつた。

「ただいま」

扉を開けると、やはり玄関の右手にある台所では、優輝がこちらに背中を向けて立っていた。一生懸命に何を切つていいのかは分からぬが、右肩は上がり肘は横に突き出た不格好な後ろ姿から、食材がどんな仕打ちを受けているのか想像する」とは容易い。

「「めん、すべ手伝つから」

慌てて靴を脱ぐ忍を田の端で捉えると、優輝はあまり口を動かさずに「いい」と言った。

「でも、今日は私が……」

「服

ぼそっと単語だけ言われたところで長年連れ添った熟年夫婦ではないのだから、彼女はその言葉の意図を理解することはできなかつた。たしかに着替えたいとは思つていたが、優輝が料理をしているのだから、それどころではない。

かばんを置いて、まずは手を洗おうと袖を捲ると、優輝は先ほどよりはつきりした口調で言葉を足した。

「「うちほ、やるから。……もう終わるし」包丁を置いて、忍の練習着を田で示した。「それ

「え？」

「明日もこるんじやないの」「

ゆつやく何が言つたいか汲み取ることができた忍は、弟の気遣いを素直に受けたことにした。乾燥機のない恩田家では、部活で汚れた彼女の洗濯物は夕食が終わると台所に並ぶ。あまり遅い時間に干すと、朝になつても湿つていることもあるのだった。

仕事で遅くなる母に代わつて夕飯の準備をするはずだった自分に文句の一つも言わず、黙々とじやがいもを切る優輝を見ていると、彼の料理の才能を哀れに思わずにはいられなかつた。

それさえ克服できれば、家事も渉るのだが……。

そんなことを思い、忍は洗面所に入った。もうしづばらくの辛抱だ。部活を引退すれば、毎日早く帰ることができて、確實に家族の負担は減る。

母は急いで仕事を片付けることもなく、優輝が不器用なりに家事を頑張る必要もなくなる。練習の疲れによつて家事がいい加減になることもないだろ？。

あと二か月。たつたそれだけの期間だ。気合を入れて乗り切ろう。シャツを脱ぎ捨て、ゆつくり息を吐く。台所からは味噌の濃い匂いが漂ってきたが、きっと味のない味噌汁よりはマシなはずだとポジティブに考えることに決めた。

次に母の帰りが遅くなるときは、絶対に早く帰ろう。鏡に映る疲れた顔を軽く叩き、忍は決意を固めた。

ようやく恩田家の食卓に三人が揃つたのは、二十時を過ぎてのことだった。

彼らの母は帰つてくるなりスースー姿のまま椅子に座ると、出された料理に顔をしかめて娘と息子を交互に見た。

「今日は思つたより帰るのが遅くなつちやつて、優輝が作ってくれたんだよ」

味噌汁の中から輪切りにされた太いじやがいもを見つけると、母はひきつった笑みを浮かべて優輝に「ごめんね」と言つた。

いつもそうだった。優輝が家事をすると、母は「ありがと」「ではなぐ」「ごめんね」と言つのだ。そして、忍にも同じ言葉を投げかける。「ごめんね。やっぱこの時期は部活も忙しいよね。私もできるだけ早く帰るよつにしたいんだけど、明日もちよつと遅くなりそう」

「今日はたまたま遅くなつただけだつて。大丈夫だから、家事は私に任せて、お母さんは仕事の方に集中して」

厄介なものから先に片付けようとじやがいもを口に含むと、妙な触感があつた。皮ならまだしも、芽は取つてくれてますよつこと祈りながらそれを飲み込む。

決して味覚音痴ではない優輝は、苦い顔をしながら自分のつくった料理を噛み締めることに一生懸命なようで、食事中には一言も話すことなかつた。

まるで額の皮が剥離してむき出しになつた脳みそにそよ風が吹き込んでいるような感覚を味わいながら、優輝は教室に入り自分の席についた。

睡眠不足による軽い頭痛。視界の上あたりは白くぼんやりとしている。彼は今日の日課にやつと田を通して、眠れそうな授業に見当をつけた。一時限目は体育だ。寝られないどころか、体力をじつそり奪われてしまう。

今のうちに少しでも寝てしまおうと、かばんから枕代わりに用意したハンドタオルを取り出したとき、前の席の一人がこちらを見ていることに気がついた。

「おはよう、恩田くん」

さりげない微笑を伴つて、ゆかりは言った。その向こうでは、ちなみに嫌らしい表情を浮かべている。

「……おは

ぐる」と回り始めた。

間もなくホームルーム開始のチャイムが鳴る時間だが、そんなことは彼にとって問題ではなかつた。あまりにも強い睡眠への欲求は、彼を怠惰な世界へと誘い入れる。今すぐ瞬間移動で自宅に戻り、布団で横になることができたらどんなに幸せだろう。そんな気分だつた。

まだ起きているのか、もう眠つてしまつたのかさえ分からぬ暗闇の中で、彼はゆるやかな波に身を任せて漂つていた。現実には数秒のことが、彼には何時間にも感じられる。どうやら、上手い具合に眠りにつけそうだ。

ところが、愛花ちなみの嫌らしい声が、彼の意識を瞬く間に教室へと呼び戻した。

「どんだけ寝るのよ。部活もやつてないのに、そんなに疲れるかねえ」「無視しよう」と彼は努めた。彼女の存在など、彼にとって取るに足らないものだ。貴重な睡眠時間を、愛花なんかのために消費するのはもつたまない。

反応を見せない優輝に、ちなみは寝たふりをしていると決めつけた
ようで、わざとらしく嫌味をぶつける。

「これじゃあ、忍先輩も苦労するわけだわ。まだウチの弟の方がマシ
だつたよ。元気に外走り回って、いかにも男子って感じ」

「ちよっと、ちなみちゃん……」

口を開けてしまえばきっと後悔するような汚い言葉が飛び出して
しまうと考へて、彼は何も言わず、ちなみをただ睨むことにした。
「……何？」

苛立ちを隠すつもりもなさそつな、鋭い口調でちなみは言つ。

それに対しても、優輝も目で彼女を非難する。何が俺の癪に障つた
か、分かつてているはずだ、と。

あまりにも突然に起こった彼らの険悪な睨み合いに挟まれたゆかりは、居心地が悪いどころではなく、どちらをなだめた方が利口か考えた。初めはただからかっていただけにしても、ちなみはこうなってしまうと頑固で譲らない性格だ。それに、優輝の方が精神面では大人に思える。

都合のいいことに、彼を説得するネタは昨日手に入れたばかりだ。
「その、何かそんなに疲れるくらい大変なことがあるんだつたら、忍先輩に相談とかしてみたらどうかな？」

彼の鋭い視線の先がゆかりに切り替わると、その瞳に微かな失望の色が表れた。静かに席を立ち、彼女たちを見下してからゆっくりと後ろのドアに歩み寄つていく。

「恩田くん？ もうすぐ先生来るよ？」

ゆかりの心配する声も無視して、彼は教室を出て行つた。数人のクラスマイトがそれを気にするよつた素振りを見せたが、すぐに何も見なかつたようにいつものお喋りに戻つていつた。

ホームルームが終わる時間を見計らつて、優輝は教室に戻ることにした。

漫画やドラマに憧れて保健室でサボろうかとも思ったのだが、現実の保健医というのは病人以外には冷酷なもので、彼が健康体であると

知るやいなや、すぐに保健室から追い出したのだった。

そのまま戻つてしまふのも、面白くない。一限目に間に合えば、愛花は何とも思わないだろう。しかし、自分が授業に遅れてしまえば少しは罪悪感も芽生えるのではないかと彼は考えて、トイレなどで時間を稼ぐことにした。

一限目開始のチャイムが鳴り五分ほど経過したところで、彼は教室に戻つた。扉を開けようとするが、鍵がかかっている。

「そつか、体育……」

今からグラウンドに行つて学級委員に鍵を借りてくるのも面倒くさい。それに、サボ^{さぶ}として教室から閉め出されたなんて格好悪いと考えた彼は、施錠を忘れている窓がないか一つずつ調べてみて、グラスマイトの防犯意識の高さに感心させられることになった。

途方に暮れて、また保健室に戻ろうかとう考へが頭をよぎつたとき、すりガラスの向こうで何かが動くのを見つけた。

それは子ども向けアニメのようにデフォルメされた犬や猫のぬいぐるみといった感じのシルエットで、ゆかりの椅子から机によじ登つてこらとこらだつた。一本足で立ち、背伸びまでしている。

「何だこれ」

自分が現実に目にしているものを頭の中で合理的に処理できず、つい独り言がこぼれると、向こうも彼の存在に気付いたのか窓の方にやって来てガラスをノックした。

しばらぐして、それは窓を開けたがつていてるのだと分かり、彼は鍵を指で示す。利口なその生き物は彼の指の先を追つて鍵にたどり着くと、なんと前足のような手を精一杯伸ばして施錠を解いてしまつた。

「みんな、どこ行つちゃつたりア？」

窓を開くと、明らかに子ども受けを意識して誕生したのではないかと疑いたくなるような一頭身のぬいぐるみもどきが、あらうことか人間の言葉を喋つた。

これは彼にとつて驚くべきことであり、自身の耳と頭の異常を疑わざにはいられなかつた。

「何だこれ……」

先ほどと同じ台詞を口にした後、人目についてはまざいと判断して窓から教室の中に入った彼は、すぐに開けてもらつたばかりの窓の鍵を閉めた。自分の頭がおかしくなつたのでなければ、ぬいぐるみとお喋りをしている男子中学生といつ構図はまずい。

嬉野ゆかりの席に座り、机の上で不思議そうな顔をしているぬいぐるみを観察する。どう見てもこれは人工的な産物ではなく、自然体の生き物であった。

「ゆかりもちなみも、どこに行つたか知らないリア？」

怯える様子もなく、それは優輝に話しかけてきた。未確認ぬいぐるみ体の口にした名前を聞いて、彼は納得する。

嬉野がかばんに隠していたのは、これだったのか。

「……で待つてれば、そのうち帰つてくるだろ」意外にも自分に奇妙な出来事への順応性があつたのかと驚きながら、優輝は言った。「それより、何なんだよ、お前？」

ぬいぐるみは愛嬌のある笑顔をみせて、嬉しそうに答えた。

「ボクは、心の国の妖精タリアリア。いなくなつたお母さんを捜して、ゆかりたちと友達になつたリア」

「いなくなつた？ 何で？」

「分からないリア」

他人事のように軽い口調に、彼は困惑した。妖精というのは、頭が弱い生き物なのかもしれない。そうだとしたら、一つずつ質問していくよりも、既に答えを知っているゆかりたちから聞き出した方が早いはずだと彼は考えた。

「それで……、タリアリア？」

「タリアリア！ ゆかりと同じ間違いをしないでほしいリア」

むくられたように言うタリアを見て、妖精全体の精神年齢が低いのか、単にタリアが幼いだけなのかなんて知らないが、人間の子どもと何ら違いはないと思えた。そして、そんなタリアを一人でこんな所に寄こしている両親を、優輝は許せなかつた。

「悪かつたよ。それで、じゃあ父親は？」

「お父さんのことは何も覚えてないリアー！」

「またしても、何でもない」とのようになじみの言葉。

「父親もいなくなつたのか？」

「いなくなつたのはお母さんリア。お父さんは初めからいなかつたり

アー！」

「死んだのか？」

「知らないリアー」

しばらく氣まずい間があり、その沈黙を破つたのはタリアだつた。

「教えてほしいリアー！　お父さんってどんな感じリアー？」

このとき、優輝は自分が小学校の先生に向いていない」とをひしひしが感じた。特に希望している職業でもないのだが、子どもに教育上よろしくない答えを持つ質問をされたら、上手くまかすことはできそうにない。

妖精の世界に離婚があつたとしても、あまり詳しいことを言つ必要はない。あれこれと思考を巡らせたが、結局できのいい返事は浮かばなかつた。

「俺も、知らない」

さきほどまで、自分がどんなに辛い質問をタリアにぶつけていたか、ようやく氣付く。両親がいなくて心細い思いをしている子に、とんでもなく残酷なことをしていた。しかし、タリア本人にそれを悲觀する様子はまったく見られない。

「キミもお父さんを知らないリアー？」

仲間を見つけたように目を輝かせるタリアだつたが、優輝は何とかその呼び方が気に入らなかつた。

「……何だよ、キミ、つて」

「だつてまだ名前を聞いてないリアー！」

名乗る必要性を考え、彼は犬や猫に自己紹介をする人間がいたらどう見えるか想像した。しかし、今は誰にも見られてはいないのでから、難しく考えるのがばかみたいに思える。

「恩田」

「オンダー？」

「呼び捨てにするなよ」

「でも、ゆかりもちなみもゆこも、ボクはそのままで呼んでるコア」「ナビもじに無理やり敬称をつけて呼べといつ中学生も客観的にじぶんかと思い、彼は妖精のネーミングセンスに任せてもいい」とした。

「下の名前は優輝。オンドラ以外なら何で呼んでもいい」

「じゃあ、ゴーキ!」「ビリヤー語感を気にに入ったりじへ、タリアは何度か復唱した。「ゴーキ、ゴーキもお父さんがいないリア? お母さんは?」

「……いないのは父親だけ」

「じゃあ、よかつたりア!」

タリアは万歳をして、とも嬉しそうと言つた。

「よかつた? ディジが?」

「だつて、ゴーキにはお母さんがいるリア」

「それがよかつたになるのか?」

「ボクはお母さんがいてくれたら嬉しいリア。お父さんもいたら、もっと嬉しいリア」

優輝は漠然と、父親のいる我が家についての想像をしてみた。

父親が働いて、母は一日中ずっと家について家事をしていだらどうなつていただろう。彼が学校から帰ってきたときには洗濯物は全て取り込んであり、夕飯の準備も終わって、お風呂のお湯も沸いてあつたとしたら……。

「嬉しくねえよ」

無邪気な妖精の子どもは、彼の低い声を聞いて小首を傾げた。タリアがどんな家庭で育つてきたかなんて優輝には想像もつかなかつたが、少なくとも悩みなどとは無縁の環境だつたということだけは分かること。

それとも、よほどいい母親で、幼い我が子に辛い一面を見せないようにしていただけかもしない。

「ゴーキはお父さんにいてほしくないリア?」

「ああ」

彼は壁の時計を見て、妖精とのとてもメルヘンとは言い難い内容の

会話をそろそろ切り上げる時間だと判断した。授業時間の半分さえ出でていれば欠席扱いにはならない。彼は愛花ちなみや初対面の妖精の為に皆勧奨を逃すつもりはなかつた。

「ゆかりはお父さんやお母さんといふとき嬉しそうコア。ユーキは違うリア？」

かばんから体操着を取り出して、優輝は確認するよつにゆっくつと言つた。

「お前は母親だけじゃ嫌か？」

タリアは頭を何度も横に振つて、一生懸命に優輝の質問を否定した。一頭身のくせに首は大丈夫なのかと彼は思つ。

「そんなことないリア。お母さんだけでも嬉しいリア」

カツターシャツのボタンを外しながら、ふと気がついた。当然ながら今、彼が着ている制服は母と一緒に買いに行つたものだ。それなりに高い買い物だつたと記憶している。きっと、学校と服屋の共同事業にまんまとはめられているのだと思つたものだつた。

そして、体操着や通学かばんが目に入る。彼の所有物のほとんどは、彼の母が買つてくれたものだつた。どんなもんだ、といつ気持ちで彼はタリアを見た。

「……俺もだ」

父親がいなくても、何も問題はない。彼は確信を得た。

これまで耐えきれない空腹を味わつたこともなければ、寒さに凍えそうになつたこともない。人並みの暮らしをして、当たり前のように生活している。

そして、彼にとつては、母と姉との三人での生活こそが当たり前だつた。

そういうえば今日も遅くなるつて言つてたつけな……。

体操着の上を着ると、恩田と書かれたみずぼらしいゼッケンからほつれた糸が垂れていた。これは彼が自分で縫つたものだが、小学校のときに母がやってくれたように上手にはできなかつた。

不思議そうな顔でこちらを見ているタリアに気付く、彼は得意げに付け加えた。

「それに、もう一人いるし」

母が働いて、優輝と忍が家事をする。それが自分にとつての家族だと、彼は思った。

「え、タリアがいなくなつたんですか!?」

放課後のテニス部の部室では、練習前の僅かな時間を利用してゆかりたち三人による集会が開かれていた。

珍しく大声を出したゆいを落ち着かせて、ゆかりは扉を少しだけ開けて近くに誰もいないか確認する。準備を終えた部員たちは昨日と同じように適当な建物の陰に散らばって談笑をしており、こちらを気にかける者はいなかつた。

「休み時間の度に探したんだけどね、どこにもいなかつたから。もしかするとあんたのところに行つてるんじゃないかと思ったんだけどさ」「一時間田の体育から戻つてきたら、いなくなつっていたの。まだ学校内にいたらしいんだけど」

タリアを匿うからにはトラブルをも享受できなければ務まらないと理解はしていたが、彼女たちは実際に何かが起つたときの対策などは一切話しあつたことはなかつた。

母親を捜しにわざわざ人間界にやつてきたくらいだから、勝手にどこかにいなくなることくらいタリアの行動力を考へたなら容易く想像できたにも関わらず、ゆかりはそれを思いどまらせんくらいの信頼関係はとつぐにできているものだと思い込んでいた。

「私、ちょっと捜してきます」

ゆいが立ち上がりうつとするのを、ちなみに制した。

「一年生は走り込みでしょ」

「でも、この前の人何かされてたら……」

「そうだとしても、あんたが行くのはだめ」

明らかに不満そうな表情になつたゆいは、意見を求めてゆかりの方を見た。ちなみに考へてることに何となくの見当をつけて、ゆかりは説明する。

「前にもタリアがいなくなつたことはあつて、そのときは私が捜しに

いつたんだけど、結局タリアは一人で戻ってきて、私がイカリングじぱつたり出くわしかやつたの」

「イカリングと出くわすつて……何ですか？」

そこで初めて、まだイカリングとゆいのボーイ・ミーツ・ガールが行われていなかつたのだと、ゆかりは氣づいた。ちなみは呆れたよう

に額に手を当てて前髪をかき上げている。

「簡単に言つと男版ラクイーンみたいな感じ。同じよつにタリアを狙つてるわけ」

「じゃあ、やつぱりタリアを見つけないと…」

扉を開けよつとするゆいの後頭部を軽くチョップして、ちなみは言葉を続けた。

「ゆかりの話聞いてた？ 捜しにこつこつと出くわしたら、あんた一人でじうにかできるの？」

「でも……」

着替えるときに外した腕時計をかばんから取り出したちなみは、そろそろ練習が始まる時間だと確認して、ゆいの肩に手を置く。

「最初の休憩までにタリアが帰つてなかつたら、私とゆかりで捜しにいく」

しかし、ゆいはまだ不服そうだった。彼女にとつて、この学校で心置きなく話ができる数少ない相手がタリアなのだから、その心配はもつともだとゆかりは思つた。

「私も行きます！」

「だから、走り込み」ちなみは強く諭すような口調で言つた。「一年生がこの時期に練習を抜けたらどう思われるか、分かる？」

その言葉に渋々ながら納得したらしく、ゆいは肩を落として俯いた。それから改めて時間を確認した彼女たちが部室を出よつとしたとき、忍が勢いよく扉を開けて入つてきた。

「ユウ… もつ練習始まるよ」

今からやつと思つてこたことをやれと言わると腹が立つものだが、それどころではない三人は空返事で済ませた。

「ん、どうかしたの？」

「ちよつと『氣になる』ことがある……」

「『氣になる』こと？」

これ以上の追及を逃れるためか、咄嗟口をしたかったのか、ちなみに優輝の話を持ち出して誤魔化すこととした。

「たぶん恩田のことですよ。今日の一時間の体育サボってましたから

「え、優輝が授業サボった？」

「そなんですよ。忍先輩から、『がつん』と叫んでやつてください

い

すると、忍は困ったように笑った。

「がつん……つてのは無理かな。私たち、そんな感じの関係じゃないんだよね」

ゆかりはその口調が、片親しかいないと告白されたときより深刻な問題を語るように聞こえた。

「そんな感じって……？」

尋ねた後で、自分の相変わらずの無神経さにゆかりは嫌悪した。やはり、それは忍にとって答えににくい質問だったようで、彼女は難しい顔をして後頭部をぽりぽりと搔いた。

「中学生になつてから口数も少なくなつたつていうか、心配ではあるんだけどね」そして、弱音を吐くように小さく呟いた。「やっぱり男の子には父親が必要だつたのかなつて思つちやつたりも……」

再び部室の扉が開き、忍は振り返つて口を開ざした。志穂が呼びにきたのかと、ゆかりが扉の外に目をやると、そこには大事そうにカバンを抱えた優輝が立っていた。

やがて隣に志穂もいることに気付いた。気まずそうに、「まずかつた？」と顔でゆかりたちに問いかけていた。

「……ふざけんなよ」

低い声だがはつきりとした口調で言つと、優輝は校門の方へ走つていった。

部室の中で忍ひとりだけが困惑することなく、諦めと何かを耐えるよな表情で彼の後ろ姿を見送つていた。

4 3・後の席のイヤなやつ!

優輝が去った後、部室には戸惑こと氣まずさによる沈黙が訪れた。ゆかりにとっては彼が女子ソフトテニス部の部室に現れたことの方がよっぽど驚くべきことであり、なぜ去ってしまったのか考える余裕はなかつた。

つい数日前まで優輝と忍が姉弟の関係にあるとゆかりが知らなかつたのは、どちらもその話を口にしなかつたからであり、校内でも彼らが一緒にいるところを見たことがなかつたからだ。

もちろん、優輝が部活中の忍を訪ねてきたことは一度もない。だから、彼が来たのには何か大きな理由があるはずだとゆかりは考えた。

「あー……、忍？ 大丈夫？」

やがて志穂が躊躇いがちに口を開き、優輝の姿を隠した校舎の角を見つめたままの忍ははつとして何でもないよつに装つた。

「大丈夫って？」

それはあまりにもわざとらしく、「」の場の誰一人として「」まかされることはないなかつたが、彼女たちはそのフリをした。

「恩田はどうしてここに？」

「何かゆかりに用があつたみたいだけど」

「ちなみに尋ねると、意外な答えが返ってきた。

「え、私に？」

彼の目的はおそらく忍との面会だと思つていただけに、ゆかりは訳が分からず必死に優輝が自分に会つて来る理由を考えた。そんな彼女をよそに、志穂は頷く。

「うふ。告白でもするのかつて茶化してたんだけど……、私が怒らせたからどうか行つちやつたつてことはないよね？」

「恩田がゆかりに告白なんて、あり得ませんって」

ゆかりが気の利いたリアクションをしてみせればこの場の雰囲気も和らいだのかもしれないが、とてもそんな気にはなれず黙つたままでいると、再び部室内は静まり返つた。

扉のところから顔だけのぞかせていた志穂は、小さくため息を吐くと部室の中に入ってきた扉を閉める。そして、忍の前に立ち真面目な表情を見せた。

「……」

左肘を右手で掴み肩身を窄めた彼女が、志穂からはっきりと目を逸らすのをゆかりは見逃さなかつた。まるで追求を逃れるよりで、その仕草からこれ以上は関わつてほしくないと思つていることが分かる。

「……何が？」

知り合つて一年しか経たないゆかりにも見抜けたのだから、彼女と一年間もペアを組んでいる志穂がその言葉から何も読み取れないわけがなく、小さく頷いて微笑んだ。

「そう。じゃあ、私は先にコートに行つてる。もう時間だからね」部室を出るとき、志穂はゆかりたちに向けて一瞬だけ口元を緩めた。それを受けて、ゆかりもラケットを背負い立ち上がる。

「私たちも行こ」

ちなみにゆいは不思議そうな顔をして忍の様子を窺う素振りを見せたが、ゆかりにならつて練習に向かつ準備をした。

「ゆかりさん？」

先ほど優輝と初対面を果たしたばかりで彼が忍の弟であることを知るはずもないゆいは、訳が分からずに不安そうな声を出した。説明しようにも、ゆかりにはどうして優輝が怒ったのか知る由もなく、また知る必要もないようを感じた。

これは忍と優輝の問題であつて、彼女たちの介入する余地はない。だから、ゆかりは何も言わずゆいの手を引っ張つて部室の外へ出た。

「先輩、コートで待つますね」

振り返ると、部室の中にいる忍はひどく憐れに見えた。そこには、これまでゆかりたちの前を進み続けた頬もしづく凛々しいキャラプロンの姿はなかつた。

ゆかりよりたつた一つ年上の、ビルでもこなじく普通の中学生。それが恩田忍だった。

「……」

忍の顔から憂慮が消え、穏やかな表情になった。

ゆかりたちがコートに向かおうとして歩き始めたとき、最後に部室を出て扉を閉めようとしたちなみが言った。

「これ、恩田のかばんじゃない？」

扉の横には見覚えのある通学かばんが置かれていた。ピンク、赤、白、青の花が一輪ずつくっついて小さな花束のようになつている「デザイン」のキー ホルダーは、男子にしては珍しい趣味だと印象に残つている。

「間違いない、優輝のだ」

忍が屈んでキー ホルダーに触れたとき、かばんの中で何かが大きく動いた。それは、ゆかりが授業中に何度も悩まされたあの現象とそつくりであり、他の可能性は考えられなかつた。

「ゆかり！ ちなみ！ ゆい！」

ファスナーをこじ開け優輝のかばんから顔を出したタリアは、ここが部室の外で忍の目の前であることも知らずに、嬉しそうに言った。

「タリア……」

安堵して微笑むゆいを見て、案外と図太い神経を持つてゐるんだなとゆかりは感心する。この場合、正しいリアクションはちなみのように頭を抱えて頑垂れるか、忍のように硬直するかの二つに一つである。

弟のかばんから現れた喋るぬいぐるみを凝視したまま、頭の中を様々な思考がぐるぐると回つてゐる忍に、タリアは首を傾げてみせた。

「あれ、ユーキはどう」「タリア？」

「え？」

とりあえず再び部室に入つて扉を閉めると、ゆかりは「どうして優輝のかばんに入つていたのかタリアに質問したい気持ちを抑え、まずは忍の混乱を処理することにした。

練習が始まるまで時間もないため、説明はタリアの紹介だけに済ませた。途中でゆいが口をはさみプリキュアのことを持ち出しましたが、それはちなみによつて止められた。

「信じられない、妖精なんて……」実際に目にしている存在を言葉で誤魔化そうとしているようだつたが、ゆかりたちが揃つて頷いたため忍は肩を落とした。「優輝も知つてたつてこと?」

「そんなはずはないんですけど……」

タリアは相変わらずにじにじして、忍を新たな友人として迎え入れていた。ゆかりは田線の高さをタリアに合わせて、丁寧な口調で尋ねる。

「ねえ、タリア？ どうして恩田くんのかばんに入っていたの？」

「間違えちゃったリア！」

優輝の席はゆかりの席の後ろだから、タリアなら間違えても不思議はない。いずれにせよ、入るかばんを間違えたということは、一度からばんから出でていたということだ。誰にも見つかっていなければいいが……。

「でも、恩田が来たのってタリアを返しにきたんじゃない？ だとしたら、やっぱり恩田にもばれたつことになるけど……」

タリアがいなくなつたことに気付いたのは、一時間目の体育が終わつて教室に帰つたときだつた。そして、優輝だけが体育に遅れて來た。タリアが彼に見つかり、ゆかりたちのことを話したのは疑いようがない。問題は、どこまで話したのか。

「恩田くんとはどんな話をしたの？」

妖精の存在を認めたとしても、彼女たちがプリキュアに変身して巨人や獣の怪物と戦つたなんて話を優輝が信じるとは思えないが、一応は確認をしておくに越したことはない。

「お母さんと、お父さんの話リアー！」

「え……

これまで黙つてただ困惑していた忍が微かに声を漏らした。

「ユーキはお父さんがいなって言ってたリア。ボクと一緒にリア」「妖精を動物に分類してもよいのか曖昧ではあるが、タリアはそのような直感からか忍の方を見た。「でも、お母さんがいるから大丈夫リア。ボクも、ユーキも!」

「……優輝が、そう言つてたの？」

忍の忍るといった様子で、忍は尋ねた。

「『ヨーキはあまり喋らないリア』」

慎重に交流を試みる忍とは対照的に、タリアは相も変わらず能天気に応える。そんなタリアを見て、忍も相好を崩した。

「うん」

緩んだ口元を手で隠す。

ちなみにから優輝の名前を聞いたときは、自分の知らない弟のクラスでの一面を垣間見ることができると思つたが、やはりと言つべきかちなみが一方的に食つてかかっていただけで、忍にとっての彼の印象はこれまでと変わらなかつた。

そんな彼のかばんから妖精なる生物が出てきたとき、弟の秘密を知ることができたと忍は驚きながらも嬉しかつたのだ。しかし、その妖精に対しても優輝はいつも通りに接していだといふ。

クラスメイトや先生や、母や、姉と同じように。

少しくらいには驚いて面白いリアクションでもしたのかな、と考えてみたが、普段の彼からは想像できない姿であり上手くイメージできなかつた。

妖精にすら口数が少ないなんて、実に彼らしい。忍はくすくすと笑いながら、そんなことを思った。

「でも、ボクには分かつたりア」

「分かつたつて？」

かばんから這い出てきたタリアは、小さな花束のキー ホルダーを手で示した。

「『ヨーキの気持ちリア。ヨーキはすぐ優しい心を持つてるリア』」

すると、怪訝といつも葉を調べるときのお手本になれるくらいこの声で、ちなみが口をはさんだ。

「はあ、恩田が優しいー？」

「ちなみはすぐ怒るリア。ヨーキとは大違イリア」

悪びれた様子もなくそんなことを言つものだから、ちなみも怒るに怒れず、タリアを掴み上げてくすぐつた。

「なに？　じゃあ、私は優しくないって言いたいわけ？」

無邪気に笑いながら、タリアはもう一度キー・ホルダーを指さした。

「あの花みたいに」「キーからは色々な気持ちが感じられたリア。でも、それをせんぶ優しさで抑えてたリア」

「気持ちを、抑えてた？」

忍が姿勢を低くしてキー・ホルダーを見たので、ちなみにほくすぐり攻撃をやめてタリアをかばんの横に戻した。

「最初、ユーキの心はこの青い花みたいだつたりア。でも、お母さんの話をしたときはピンクの花みたいに感じたリア。さつきは赤い感じだつたりア」

「赤つて……」

ゆかりの視線は自然とちなみの方に向けられた。タリアの言う花の色が、感情の曖昧な表現だとしたら、キュアルビー やオコリンボーの例によると赤は怒りを表す。ちなみにそれに気付いて、ポケットから真紅のブレスレットを覗かせた。

「怒つてるつてことじょううか？ 赤つて活発とか攻撃的なイメージが私にはあるんですけど……」

間違つていたらどうしようつとこつた感じでおずおずと口を開いたゆいは、忍の表情に緊張と後悔が表れたのを見て、申し訳ないようになにか言ひた。肩を竦めた。

「でも、ユーキの赤はすぐ青に変わつたりア」

ほとんどの場合、赤と青は対照的なものとして考えられる。ゆかりがぱつと思いついたのは、火と水、朝と夜といつたイメージだつた。彼女にとつて青は落ち着いた印象の色であり、どことなく憂いを感じさせれる。

「青つていうと、冷静だつたり泣いてる感じ？」

「分からぬりア」

「いや、タリアが赤とか青とか言い出したんでしょ」

文句を言つちなみを見ていると、やはり彼女は赤い“怒りのプリキュア”にぴつたりだなとゆかりは思つた。“怒り”はともかく赤は彼女の好きな色のはずで、とてもよく似合つてゐる。

しかし、優輝はどうだらう。ゆかりはどうしても彼の色といつもの

をイメージできなかつた。それは彼女が彼と知り合つて間もないためだとはかり思つていたが、忍の話によるとさうでもないらしい。

「だつて、心はそんなに簡単じゃないリア。ボクにはユーキの気持ちが分からぬいリア」

「さつき、恩田の気持ちは分かつた、優しいとか言つてたじゃない」

「ユーキは優しいリア。だから、ボクに自分の気持ちを教えてくれないリア」

支離滅裂なタリアの言い分だつたが、その意味をゆかりは何となく理解することができた。

照れてしまつて喜びを表現できない人や、相手に氣を遣つて怒れない人なんて珍しくはない。優輝の場合、感情に蓋をするものがどういつたわけか優しさなだけなのだろう。

「でも、お母さんの話をしてるときのユーキは嬉しそうだつたリア」「えつ、あいつマザ「コンなんですか？」

タリアとの言い合いで先ほどまでの氣まずさなどすっかり失われたちなみは、冗談っぽく忍に尋ねた。

「ううん、さつきも言つたけど、中学生になつてからの優輝は私ともお母さんともほとんど話さなくて……」

すると、忍に近寄つたタリアは彼女の顔を見上げてまじまじと観察した。

「もしかして、ユーキのお姉ちゃんリア？」

自己紹介がまだだつたことに気がついた忍は、人間以外の生き物に挨拶するのが恥ずかしいのかやや躊躇つて肯定した。

「うん、優輝の姉の恩田忍です」

「じゃあ忍もお父さんがないリア？」

「……そうだね」

困つたように微笑んで優しく応える忍に、タリアは何か思つとこらがあるようだつた。少なくとも、ゆかりにはそう見えた。

心の国の妖精と自称するだけはあつて、または無垢な幼さからか、タリアは人の心には敏感に反応する。特に、正の感情に関してはそれが顕著だ。ちなみとゆいがプリキュアに変身したときの様子から、ゆ

かりはそれを知っていた。

「ゴーキはお父さんがいたら嬉しくないって言つてたリア。忍もそういうア？」

家族の話題を後輩の前であるのを氣にして、忍はちぢりとゆかりたちを見たが、やがて開き直つたように口を開いた。

「どうだろ？ 私は今までもいいナビ、やつぱり父親がいたら もうとよかつたのかもつて悪ひい」とせあるよ」

「ゴーキはそういうア？」

それを聞いて忍の表情には一瞬だけ憂いが戻つたが、ゆかりたちに心配されるのが嫌だつたのかにかゝと笑い、わざとらしくらい元気な口調になつた。

「まあね。父親がいなくとも、私がお母さんを手伝えればジリにかかるし」

彼女が無理に吹き飛ばした憂慮に感染したのか、珍しくタリアが物案じするように咳いた。

「……ゴーキと同じリア」

なぜタリアからいつもの無邪氣さがなくなつたのか、ゆかりには分からなかつた。姉弟が同じ思考をしてくるところは、喜ぶべきことのばずなのに。

彼女と同じ謎を抱えた忍は、それを解く鍵を持つていたらしく、立ち上がると時計を気にする素振りを見せた。

「ねえ、頼みがあるんだけど……」

「はい、何ですか？」

不思議そうな顔をする二人の後輩と、自分以上に優輝のことによく理解している妖精を見て、志穂がしたのと同じように忍は口元を緩めた。

「志穂に言つといで。今日は私、帰つたつて」

机の上に置んで置いてある自分の制服をかばんに突つ込むと、忍は体操着姿のままで部屋を出た。

昨日と同じ。しかし、昨日とは違ひ結果にしてひと忍は思った。

数日前ポストに分譲予定というチラシが入っていた建設途中の高層マンションの陰で学校が見えなくなつてから、優輝はかばんの行方を気にした。

幸運にも宿題など明日が提出期限のものはなかつたはずだから放つておいてもよかつたのだが、じつにも自分の持ち物を置き去りにするのが気に入らなかつた彼は、遙か上空から聞こえてくる、金属どうし小気味好くがぶつかる音に合わせて右往左往した。

女子という生き物は噂が好きだから、きっと自分のことをばかにしているに違いないと彼は思つた。先ほどの行動を客観的に捉えると、おかしなやつだと思われても仕方がない。

「妖精をかばんに隠してゐる方が、よっぽどおかしいだろ」

どうせ工事の音にかき消されるからと呴いて、彼は今朝の出来事に思いを馳せた。

妖精の子ども。子どもみたいな妖精。妙に明るいやつ。でも、父親はいない。……母親もいなくなつたんだつけ。

そして、扉を隔てて聞こえた忍の言葉を思い出す。

父親が必要。

「…………ふざけんなよ」

工事の作業がひと段落したのか、その瞬間に上空から聞こえていた騒音が止み、今度の呴きははつきりとしたものになつた。

彼はひと月後にはマンションになるはずの鉄の塊を見上げた。およそ二十階くらいだらうか。もっと高いかもしれないし、低いかもしれない。いずれにせよ、彼とは縁がない話だ。

父親がいたら、こんなところにも住めたのかなと彼は思つた。男女平等がどうとか言っても、やはり男の方が収入は多いイメージがある。食費なんかは今より増えるかもしれないが、それでも暮らしは裕福になるだらう。

そこまで考えたところで、彼は家に向かつて歩きだした。

とりあえず、今は忍と会いたくなつた。すべてが上手く運べば、タリアはゆかりに保護されて、かばんは忍が持つて帰つてくれるだらう。

いや、あいつのことだから、俺のかばんって分からんじゃないか。

鼻で笑いながらそんなことを思い、財布もかばんに入っていたことに気がついた。彼は舌打ちをして冷蔵庫の中身を思い出そうとしたが、そこから夕飯のイメージまで辿りつけなかつた。母がそれを把握しており、買い物をして帰つてくることを信じるほかない。

忍が優輝の姿を見つけたのは、マンションの工事の音がちよつど気にならなくなるくらいの交差点だつた。優輝は持て余した両手をポケットに突つ込み、すぐに落ち着かない様子でポケットから手を引き抜いてたりして信号待ちをしていた。律儀にも、点字ブロックから一歩下がつたところに立つてゐる。

体操着姿で二つのかばんを抱えている受験生というのはどうも格好が悪そうだと、すぐにでも優輝に声をかけかばんを渡してしまったかったのだが、忍はそのきっかけを掴めずに彼が気付いてくれるのを待つことにした。

しばらくすると、彼女の後ろから大げさに足音を鳴らして長身の男がやつて來た為、優輝はちらりとこちらの方を見た。姉の姿を見つけた彼は一瞬ぎょっとした表情になり、すぐに視線を向こうの信号に戻してしまつた。

やがて信号が青に変わり、彼が気まずさついに横断歩道を渡りきつてから忍は声をかけた。

「優輝、ほら、かばん」

まるで壊れたロボットのよう、ゆっくりと首を回して自分と忍のかばんを見分けると、さつと自分のかばんを手に取つた。

「……部活は？」

まさか彼の方から話しかけてくるとは思つていなかつた忍は、自分の言おうとしていたことを抑え込まなければならなくなつた。

「休んだ。今日もお母さん遅くなるって言つてたし、昨日は優輝に晩ご飯つくらせちゃつたわけだから、今日こそ私がするよ」

これは彼女にとつてかなり前向きな発言だったのにも関わらず、優輝はさらに素つ氣ない態度になり、地面の踏みしめ方からはストレス

が感じられる。

「いいから、練習戻れよ」

「ねえ、さつきの怒つてるなら……」

途端に優輝は早足になり、忍との会話を打ち切りたいといつ意思をはっきりさせた。これには彼女もむつとしだが、姉としてここは下手に出るべきだと判断した。

「ごめん。その……タリアって妖精？ 知ってるんでしょ？ あの子に言われて気付いたんだけど、私、普段から優輝に家事押し付けてることあった。部活で忙しいせいもあって、勝手に家事も頑張ってるつもりでいたけど、でも、これからはちやんとするから

すると、優輝は足を止めて彼女を鋭い目つきで睨んだ。

何か言ひのを忍は待つたが、まるで見限るように視線を足元に落として優輝は再び歩き始める。

「ちよつと……」

先を行こうとする優輝の手を掴み、忍はすぐに声を荒げたことを後悔した。普段はほとんど表情の変化を見せない優輝が、そのときばかりは怒りを顕わにして、彼女の手を振り払う。

これまで抑えていた怒りが溢れだしたなら、啖どることのない暴言を吐いたとしてもおかしくないと彼女は覚悟したが、優輝はすぐにつもの冷静さを取り戻したようだった。

タリアの言つていたように、赤が青に変わったのだ。

やがて忍は、自分の方を振り返ったはずの優輝の視線が、まるで見当違いの方向に向けられていることに気付いた。彼は明らかに彼女より後ろにあるものを見ている。

忍が後ろに目をやると、そこには先ほどの交差点で見かけた長身の男が右手をこちらに突きだした格好で立っていた。その掌は、薄黒い赤で染まっている。

「おいおー、こんなに強い怒りを持つてゐてのに、喧嘩しないなんて勿体ないぜ」

氣を失い倒れかけた優輝の体を支え、忍はその男の手から赤い光が広がつて巨大な人の姿を形成する様子を呆然と見つめた。

生み出された巨大なオコリンボーは、夕方の穏やかな町にパニックを起こすには十分すぎた。

町の人々が怪物から逃げるなか、彼女は弟を抱えたままその場にへたり込んだ。

部活までサボッて、弟とはうまくいかず、その弟の体から現れた赤い光が怪物となつて町を襲つている。巨人となつた光には不満、鬱憤、暴力といったものが込められてあり、それらがごちゃ混ぜになつた爆弾のように感じられた。

あれが、そうなのだろうか。タリアの言つていた赤、怒りの感情。そうだとしたら、優輝のそれはあまりにも大きすぎた。

部活中のゆかりたちが町の異変に気付いたのは、前衛練習を終えたときだつた。

遠くの方から砲弾のような地響きが聞こえてくると思えば、次第に音は近くなり、巨人の姿を肉眼で確認できるまでになつた。

部活で校内に残つてゐる生徒たちはそれを映画の撮影と勘違いしたり、自分の目がおかしくなつたと疑つことなく、こちらに近づいてくる現実離れした存在の危険性を時間をかけて判断していった。

「あれって……」

ゆかりは息を呑んで巨大なオコリンボーを認めた。初めて戦つたときの体育館に收まつてゐたものとは、まるで違う。体長はその三倍はあり、強い怒りが感じられた。

「なんか……やっぱそいつ」

ようやく危機感を覚えた部員たちは、たちまち部室に置いてある自分の荷物を片付け始めた。地響きが大きくなるにつれて、校内も騒がしくなる。

「みんな落ち着いて！」

志穂は部員に呼びかけたが、そのほとんどは彼女の注意に耳を傾ける暇があるなら少しでも遠くへ逃げたいといった様子だった。

「先輩！ どうしたらいいですか？」

こんなときに限つてキヤブテン代理を任せられた不運を嘆きながら、

一人だけさつさと走り込みを終わらせた悦ちゃんの質問に答えられない自分を志穂は嫌悪した。地震や火事なら避難場所は明確だが、体育馆やグラウンドが巨人の進撃を防ぐとは思えない。

「まだ走り込みに出てる一年生を呼び戻してきて！ 人数が確認できたら、固まつて安全などこに避難するの。いい？」

「はい！」

悦ちゃんはすぐに回れ右をすると、ランニングコースを逆走し始めた。そんな彼女を見送った後、ゆかりは不安になる。

オコリンボーが現れた原因はただ一つ。こちらの世界にやつて来たイカリングがタリアを捜すついでに、誰かの怒りを操ったのだ。そして、タリアを守るためにプリキュアになつてあの巨大な怪物と戦わなければならないのだが、今回のそれは学校の校舎を踏みつぶすべり造作なくやってのけそうな大きさである。

戦つて、勝てるのか。みんなの見ている前で、町を守ることができるのか。タリアのために、命まで懸けなければならないのか。

そんな彼女の葛藤をよそに、志穂はみんなが逃げるのとは反対方向へ走り出した。

「どこに行くんですか、先輩！」

「あのが来た方角に、忍の家があるの！」

躊躇つていい時間はないし、ゆかりは判断した。これまでのところ、イカリングたちによる犠牲者は出ていながら、これからもそうだとは限らない。

彼女は戦うためにプリキュアになつたのではなく、タリアと入学式を守りたくて変身できた。母親を捜している妖精と、それを連れ戻そうとして野蛮な行為に及ぶ者の奇妙な関係に挟まれ、訳も分からず戦つてきた。

ただし、今回ばかりはイカリングを敵と認めなければならない。そして、ゆかりは立ち向かう能力がある。ゆかりたちだけが、町を守ることができるのだ。

「待ってください、私が行きます！」

呼び止められた志穂がこちらを振り返ると、慣れない責任と緊張の

ためか、これまでに彼女たちが見たことのないくらい切羽詰まつた表情になつていった。

「何言つてゐる！ 私はあんたたちの先輩だし、忍は私の友達なんだよ！ あんたたちを行かせるわけにはいかない」

志穂に追いついたゆかりは、息を切らしながら頭を下げた。そのとおり、ちらりと後ろを見ることができ、ちなみにも着いてきてくれていることがわかつた。

「お願いします。私にとつても忍先輩は大事な先輩ですし、恩田くんはクラスメイトです。だから、志穂先輩はみんなを避難させね」とに集中してください

「でも……」

後ろから駆け寄ってきたみなみも、どんと胸を張つて心配いらないところへと大げさにアピールした。

「私たちより、先輩の方がみんなをまとめるのは得意でしょ。ここはお互い、できることをやりましょうよ」

このとき、ゆかりは部室でのやつとの一部を思いだしていた。忍が母を手伝つと言つたとき、タリアは消沈したように彼女の考えは優輝と同じだと言つた。どうして姉弟が同じ気持ちなのにタリアが浮かない顔をしたのか、今なら分かる。

「私たちに行かせてください。お願いします！」

やがて諦めたように志穂は前髪をかき上げて、彼女たちの手を握つた。

「わかつたよ。でも、様子を見て危なそうだつたらすぐに戻つてくること。いいね？」

「はい……」

志穂がこちらに背中を向けるのを確認すると、一人はオーロリンボー目指して走りながら体操着のポケットをまさぐる。それぞれ指環とブレスレットを取り出ると、それを装着した。

「プリキュアー・ハイーリング・」

キュアリンクとキュアルビーは高く跳躍して、民家の屋根に飛び乗つた。地面を走つていいくよりこちらの方が遙かに早い。

しかし、オコリンボーの進撃を食い止めるのが早くなつたとはかぎらない。彼女たちがやられる時間が、少しばかり早まつただけかもしないのだが、それでも立ち止まるわけにはいかなかつた。

4 4・後ろの席のイヤなやつ!?

夕日によつて真つ赤に染まつた空に巨人が引き寄せられているようだつた。

固いアスファルトにへたりこむと小石が足に食い込み、忍は顔を歪める。膝の上で眠つている優輝の表情にも、苦しみと怒りが表れていた。

どうすればよいのか。何が最善の行動か。

答えの出ない自問が頭の中で堂々巡りして、彼女の脳は疲弊しきつていた。目眩に襲われて、景色がぼやける。

遠くから微かに悲鳴が聞こえた。続いて、瓦礫が崩れるような音。巨人がどこかの建物を破壊したのかもしれない。

「何なのよ……」

呻き声をあげる弟の顔を見つめて、忍は呟いた。

優輝の体から現れた赤い光の巨人。それが町を襲い、人々を混乱させている。あれは優輝の一部なのか、それともまったく別のもののか。彼女にとって、それが何よりも重要なことだった。

赤い、怒りの怪物。タリアの言つことを信じるなら、優輝がこれまで溜め込んできた抑圧された感情の塊。

「お父さんのことじやないなら、何がそんなに嫌なの」

弟の口数が減つたことを気にしたのは、彼女が中学生に上がつてからだつた。それまでは近所の友達と一緒に仲良く遊んだりもして、さすがに高学年になるとお互いに同性の友達とばかり集まるようになつたが、それでも姉弟の仲は良好な状態を保つていた。

そして、母も気付かないほど少しづつ、彼は家中で喋らなくなつていつた。

反抗期なのよ、と母は言う。難しい年頃だし、男子特有の悩みを相談できる父親がいないせいだと、忍も思つた。

母に夕飯の準備を任せられた日にかぎつて、彼女は部活で帰りが遅くなる。その度に、優輝が代わりに家事を済ませてくれていた。彼は何

も言わない。だから、忍はとりあえず「ごめん」と言へ。

それだけでは、許されなかつたのか。

顔を上げて巨人を見ると、学校の方へ向かつていた。部活中の志穂たちがいる。しかし、優輝を置いて行くわけにもいかない。もちろん、巨人を止めるこことなんてできるはずもない。

自分の無力さに嫌気がさして再び俯くと、花のキー ホルダーが目に入つた。四色の花によつて成る、優輝のキー ホルダー。ところどころ錆びて、色も剥げている。

弟の物持ちのよさに感心しながら、彼女はそれを手に取つた。

これは優輝が物心つくかつかなかの頃に買つたものだ。あのとき、両親はすでに離婚していたが、当時の忍には見当もつかない夫婦間の取り決めにより、たまに四人で出かけることがあつた。

デパートのアクセサリー売り場で、彼女がこれを見つけた。四色の花を自分たち家族に例えて得意そうにしていたら、父親が買つてくれたのだった。

帰りの車の中で彼女がキー ホルダーを自慢していると、優輝が物欲しそうな目でじつとそれを見ていたから、仕方なく譲ることにした。

優輝がそのときのことを覚えていて今でもこれを大事にしているのだとしたら、彼にとって四色の花はどんな意味をもつんだろう。

幼い彼女が自分たちと同じと言つた花束と、今は数が合わない。花は四輪なのに、家族は三人だ。それなのにこのキー ホルダーを持ち続けていいということは、やはり彼が父親を必要としていることにはならないだろうか。

「おい」

そんな失礼な呼びかけが自分に向けたものであることに気付くまで時間がかかり、ようやく忍は巨人を生み出した長身の男がまだこの場にいたと認めた。

「あんた、優輝に何をしたの」

恐怖を感じられないほど彼女の心は麻痺していたため、得体の知れない相手に険しい口調で言葉を返すことができた。

「今にわかる」

イカリングが右手をかざすと、忍はまるで心といつ器官が体のどこにあり、それを驚掴みにされているような苦しみに襲われた。

やがて苦痛は心の内から沸々と溢れてきた怒りに変わる。

その怒りを解放することで、苦しみから逃れられるような気がした。彼女は思つ。どうして我慢しなければならない？

優輝の怒りが私のせいなら、私の怒りは優輝のせいだ。

不満があるなら話してくれたらしい。家族なのだから、と。そう考

えると、彼女の怒りは抑えがきかなくなつた。

ひとりで勝手に怒つて、あんな怪物まで生み出して、そんなの私の知つたことじやない。家事を手伝うのが嫌なら、やらなければいいのに。帰りが遅くなるのは仕方ない。だって、キャブテンなんだから。部活も家事もあんなに頑張つてたのに、何が不満なの。それらの感情は赤い光となつて、イカリングの掌に吸い込まれていく。

「何だ、お前もかよ」イカリングの小馬鹿にしたような言い方が気に入らず、忍は彼を睨んだ。「怒りつてのは発散させるもんで、溜め込むもんじゃねえんだよ。自分の気持ちもはつきり言えないなんて、情けねえ奴らだ」

彼女の体から現れる赤い光が大きくなる。すでに言葉を発する気力さえ忍には残されていなかつたが、怒りはますます増幅していく。それは、イカリングに対する怒りだつた。

何も知らないくせに、勝手なことを言つてほしくない。

忍は誰ともなしに心中で訴えた。

父親がいないのだから、母は仕事で忙しいから、弟に負担をかけたくないから、姉である自分が頑張らなければいけない。部活ではキャブテンとして、みんなをまとめなければならない。試合だつて近いのに、夕飯の準備も任されている。

そんな現状に、少しも不満を感じないわけがない。

でも、これを誰にぶつければいい？

仕事を頑張つている母にも、部活のチームメイトにも、もちろん後輩にだつて言えない。そして、優輝への不満も抑えるしかなかつた。

きつと優輝は父親がいない家庭が嫌で、家事を手伝わなければいけないのが嫌で、夕飯の時間が遅いのが嫌なんだ。

意識が朦朧として視線を落とすと、彼女はいつの間にか自分に言い訳をしていたことに気付き、自身の怒りの本質を理解した。

四色の花のキー ホルダーと、タリアの言葉。これだけで優輝の心を知るには十分だった。

結局のところ、父親を必要としていたのは優輝ではなく自分だったのだと、彼女は悟った。部活と家事の両立、姉としての責任。これから逃れるには、父親がいないというのは体のよい言い訳になつた。優輝の気持ちなど関係なかつた。ただ彼女がそうじじつけただけであつて、彼は今の家族を大事に思つていた。家事だけ手伝つてくれていたのに、姉としての面目を保ちたいが為に、自分に都合のいい人物に仕立て上げた。

「最低……」

ようやく喉から絞り出せた声は、自分に向けられたものだつた。忍の怒りは色を変え、はつきりとした赤になつた。こんな状況になるまで省みることのできなかつた、自分への怒りだつた。

「さつきからぐだりねえことじゅぢや考へてるみたいだが、もうじき樂にしてやる」

これから自分はどうなるのか、忍は一瞬だけ想像して、これこそくだらない考えだと思つた。おそらくは優輝と同じように、巨大な赤い怪物になるだつ。自分がどうなるかと、それは当然の報いのように思えた。

しかし、優輝は違う。何としても弟だけは助けなければと忍は最後の力を振り絞りうとしたが、抗う氣力は残されていなかつた。

轟音と地響きにより、忍の意識は怒りと哀しみの混沌から無理やり現実に呼び戻される。

あの巨人 自分のせいで優輝が溜め込んでしまつた怒りの権化が、またどこかの建物を破壊したのかもしれない。そう思つて顔を上げた忍は、先ほどまで獲物を見つけた捕食者のようにこちらを見

ていたイカリングの視線が何か別のものに向けられていることに気が付き、その視線の先を追った。

夕日の眩しさに目が眩んで初めはよく分からなかつたが、驚きのあまり忍の意識は徐々にはつきりとしたものになり、やがてそれを現実と認めることができた。

巨人が、倒れている。

勝手に転んだのか巨体が重力に負けたのか、そのどちらかだと思つて彼女が目を凝らすと、二つの点が小さく動いているのが見えた。次第にそれらは大きな影になつて近づいてくる。

「やつと来たな……」唸るように言うイカリングを振り返つた瞬間、強い風と衝撃が起こつた。「プリキュア!!」

反射的に腕を頭の前で構え、いつの間にか瞑つていた目をおさるおそる開いてみると、それまで忍に向けられていた右手でキュアルビーのパンチをイカリングが受け止めているところだつた。

「忍先輩から離れる！」

赤子の手を捻るようにイカリングはそのままルビーの拳を大きな手で鷲掴みにすると、彼女の体を後方へ放り投げた。

すかさずキュアリンクも民家の屋根から飛び降りて、正面から彼に飛びかかる。それを見て空中で体勢を立て直したルビーは、建物の外壁を蹴りイカリングを背後から急襲した。

イカリングは軽い身のこなしでリンクの攻撃を避けようと、彼女の足首を掴んだ。彼の腕力に抵抗する術もなく、彼女の体は振り回され宙を舞いルビーに激突した。

「おい、タリアはどうだ」

支え合つて立ち上がつた一人は、今にも倒れそうなほど疲弊した様子の忍と、氣を失つている優輝を認め、未だに巨体を起き上がらせることのできないでいる巨大なオコリンボーを見た。

「じゃあ、あれは恩田くんの……」

その弦きに反応して悲しそうに目を背けた忍の反応から、リンクはあれが優輝の怒りから生み出されたオコリンボーなのだと確信した。

「無視すんじゃねえ！ タリアはどうにじるのか聞いてんだよ」

彼女たちを誘き出すことに成功したイカリングはあっさりと忍たちへの興味を失つてしまつたようで、牽制するよつに攻撃の構えをとつた。

「教えるわけないでしょ！ それに、町もめぢやくぢやにしてくれちゃつて…」

「どうしてこんなひどこことをするの？」

この場から逃げることさえ出来そうにない忍たちを背後に庇いながら、一人はイカリングから距離をとつた。先ほどの取つ組み合いで、正面からの単純な攻撃では力負けすることが分かつた以上、迂闊に近づくことはできない。

「ひどい！ ふざけたことぬかしてんじゃねえぞ！」

心外だと言わんばかりに声を荒げたイカリングは、憤慨した様子で大げさな身振りを付け加えながらリンクの言葉を否定した。

「俺がやつてんのは人助けだ」彼は忍と優輝を軽蔑するような目で見た。「どいつもこいつも情けねえ。相手に気遣つて不満の一つも言えないなんてよ。それを優しさなんて勘違いしてやがる。本当は自分を甘やかしてるだけのくせしやがって」

忍には何かを言い返す氣力も残つておらず、ただ逃げるように視線を落とした。優輝は苦しそうに呻くばかりで、起きる氣配はない。もしも、自分が父親のせいにしないで弟ときちんと話し合つていればこんなことはならなかつたのではないかと、彼女は自責の念に潰されそうになつた。

「だから俺が代わりにお前らの怒りを暴れさせてやつてんだ。礼のひとつでも言ってほしいくらいだぜ」

中学生になつてから優輝の口数が少なくなつた理由は、どんなに考えたところで忍には分からぬ。愚痴をこぼすこともなく黙々と家事を手伝ってくれる彼を見て、彼女は申し訳ない気持ちになることがあつた。

本当は家事なんてやりたくないのに、我慢してくれていてるのはないか。そして、その不満を彼が口に出せずにいたとしたら……。忍は悔しさのあまり歯ぎしりした。この男も、タリアという妖精

も、姉である自分より優輝のことを理解している。ちなみにやゆかりだつて、仲の良し悪しさともかく彼と関わらうとしていた。

しかし、彼女は自分から弟との接触を避けてきた。家族のために家事を頑張ろうと心に決めたはずなのに、たった一人の大事な弟をないがしろにしていた。そのことに今まで気づけなかつた自分が情けなくて仕方なかつた。

「そんなの間違つてゐる」

忍は顔を上げてキュアリンクを見た。妖精や巨人よりもな格好はしているものの、ピンク色のコスチュームに身を包み空から降ってきた彼女は、忍にとつて異様な存在であり、また近しいようにも感じた。

「怒りも優しさも、自分の気持ちにどうやって向き合つかはその人が決めること。あなたが勝手で弄んでいいものじゃない！」

「弄ぶだと!? さつきの話を聞いてなかつたのか？」すっかり頭に血が上つた様子のイカリングは、冷静さなどまるつきり失つて声を荒げた。「あのオーリンボーを見ろ！」

夕日よりも赤い巨大な怪物は倒れたまま、その巨体を持ち上げるのに苦労しているようだ、それと同調するように優輝も呻き声を上げた。

「あれだけの怒りをずっと抑え込めるわけがない。俺が何もしなくても、いつか爆発してただろうよ」

「だつたら何!?」ルビーが言つた。「恩田が怒つたら悪いワケ？」

「怒るのはいいさ。ただ、俺はうじうじしてゐる野郎が気に入らねえんだよ」

変身する前と違い、リンクの心情は不思議なくらい穏やかだつた。巨大なオーリンボーへの恐れより、イカリングへの哀れみや怒りの方が勝つていた。

「せつま、志穂先輩と言ひ合ひになつたとき氣付いたの」

「きなり何を言い出すのかといつた表情でイカリングがリンクを睨んだが、彼女はそれを氣にせず言葉を続けた。

「怒りだけじゃない。誰かを思いやる気持ちだつて、ぶつかることが

あるんだって。だから恩田くんはあまり本心を口にしなかつたんだと思う」「

忍は部室でのタリアの言葉を思い出していた。能天気な妖精が不意に沈んだ口調になり、彼女と優輝が同じだと言つたときのこと。それを聞いて忍が導き出した答えは間違っていたのだと、キュアリンクに気付かされた。

思いを口にしないだけで、彼も忍と同じくらい、またはそれ以上に、家族のことを考えている。

「何が言いたい？」

大人しくしていられない性分なのか、これ以上の話し合いを続けるつもりのなさそうなイカリングは苛々した様子で彼女を急かした。「情けなくないし、勘違いでもない。あの怒りを生み出したのも、怒りを溜め込んだのもまぎれもない、恩田くんの優しさなんだ」彼女はイカリングを睨み返した。「だから、その優しさを踏みにじったあなたを、私は絶対に許さない！」

二人がかりでもイカリングに敵うか分からなかつたが、リンクは決心した。これまでのタリアやちなみを守るための戦いとは違い、彼女は体の中から沸々と敵意が溢れてくるのを感じた。

町を破壊して人々を怖がらせ、彼女の大事な人たちを傷つけたイカリングを容赦するなんてとてもできそうになかった。

「それはてめえの勝手だが、あれを放つておいていいのか？」

まるでゲームを楽しんでいるかのような口ぶりで、イカリングは今にも沈みそうな真っ赤な夕日を示した。

彼女たちがそちらを見ると、オコリンボーがのつそりと起き上がり再び学校の方へ歩を進め始めようとしていた。

「リンク！」「こゝは私に任せて、早く！」

慣れない攻撃の構えをとりながら、ルビーが早口で言つた。先ほど格闘からルビーだけではイカリングに勝てないことは火を見るより明らかで、リンクは彼女の指示に素直に従うことはできなかつた。

「でも……」

「志穂先輩にも言つたでしょ、お互ひできることをやろうって。それ

に、私だって、あいつに言つてやりたい」とは山ほどあるんだから」リンクは冷静に今の状況を分析した。あの巨大なオコリンボーを一人で止められるだろうか。ここに残つて一人でイカリングと戦い、すぐに決着をつけてオコリンボーの下へ向かうのでは間に合わない。それに、イカリングに勝てる保証もない。

まずオコリンボーを一人で倒しに行つたなら、その隙にイカリングは再び忍から怒りを吸い取るだろう。

どのパターンもほとんど絶望的であったが、それはルビーだつて分かっているはずだ。その上でイカリングの相手を受け持つたのは、彼女にとってこれが唯一の微かな勝ち筋だと考えたからだろう。

リンクは黙つて頷き、民家の屋根に飛び乗つた。オコリンボーを目指して走り出したとき、背後では鈍い打撃音が聞こえた。

建設途中の高層マンションから作業員たちは非難を済ませており、キュアリンクは今のところ一番高い位置にある鉄骨の上に飛び乗つた。それでもまだ、オコリンボーの顔は見上げなければならぬ高さにある。

「ここから先には行かせない」

彼女は無理に自身を鼓舞して、オコリンボーに飛びかかった。渾身の力を込めたパンチで確かな手ごたえを感じたにも関わらず、少しのダメージも与えられなかつたようで、オコリンボーは彼女に構わず歩を進める。

オコリンボーの肩に着地したリンクは、まるで暴走する列車を止めようとするパニックアクション映画の主人公になつたように感じた。しかし、列車とは違いブレーキの役目を果たすものはもちろん、誰かと無線で連絡をとることもできない。そして、映画のようにハッピー・エンドが約束されているわけでもない。

やけくそになつてオコリンボーの顎の辺りをでたらめに攻撃してみたが、やはり反応はなかつた。

「止まつて、恩田くん……」

ほとんど無意識に吐いた弱音だったが、心なしかオコリンボーの歩

調が緩やかになつた気がした。

教頭やちなみのオコリンボーと戦つたときは氣にもしなかつたが、これはイカリングの命令に従つて暴れる怪物であると同時に、優輝の心の一部でもあることをリンクは思い出した。

「聞こえる？ 恩田くん！」

オコリンボーは呻き声を上げて苦しそうに身悶えした。間違いない、リンクは確信した。優輝の心は、まだ微かに残つてい。 「落ち着いて、こんなことじや何も解決しない！ 恩田くんもそう思つてたんじやないの!?」

左肩に乗つているリンクを振り落とそうとして大きく体を揺すり、右の拳でリンクを攻撃したオコリンボーは、攻撃を避けられたことで自身がダメージを負うことになった。

「これ以上、忍先輩を苦しめてもいいの!?」

頭に飛び乗つたリンクはまともに聞こえているかも分からぬ相手に呼びかけ続けた。倒すことができないかぎり、このオコリンボーを止められるのは優輝本人だけであり、リンクもその可能性に賭けるしかなかつた。

希望を見出すことができて油断した一瞬の隙に、リンクは自分の体が宙に浮いているような錯覚を感じ、それが錯覚でないと気づいたときにはオコリンボーのパンチが目の前まで迫つていた。

いつの間にかオコリンボーの頭の上から放り出されていたリンクに攻撃を避ける時間は残されておらず、巨大な拳が直撃した途端、あまりの衝撃に氣を失い建設中のマンションの鉄骨に激突して無理に意識を呼び戻された。

全身が麻痺したように感じた後、徐々に痛覚が機能し始めて彼女は耐えられずに悲鳴をあげた。

4 5・後の席のイヤなやつ!?

「よや見してんじゃねえ」

オーリンボーの攻撃を受けたキュアリングの体が鉄骨に強く打ちつけられたのを叩きして、ルビーには大きな隙ができた。

咄嗟に攻撃に備えたが、イカリングの拳は既に彼女の防御をすり抜けたところまで達しており、ルビーは吹き飛ばされるのと民家の壁にぶつかる衝撃をほとんど同時に味わうことになった。

「お前が俺と喧嘩したいっていつから付き合ってやってんだ。がっかりさせんなよ」

ゆっくりと歩いて近づいてくるイカリングからは余裕が感じられ、ルビーが慌てて起き上がろうとするが、箸のようにした手で喉元を掴まれて壁に押しつけられた。

「キュアルビー……、お前なら分かるよな？ 喧嘩ってのはお互いが本気になるから面白いんだ。売った喧嘩を買わない相手なんてつまらねえ」

力の差を見せつけられたルビーは、改めてイカリングを自分たちとは違った存在だと認識して背筋が冷たくなった。圧倒的な強さに対する恐怖ではなく、怒りへの異常なまでの執着に気味悪さを覚えたのだ。

呼吸が苦しくなり、喉元を締め付けられていることで嘔吐感もこみ上げてくる。勝てない相手だからといって、諦めたくない。しかし、どうしようもなかつた。意識は薄れ、全身から力が抜けていくのを感じる。

「俺はタリアを連れ戻す為にお前を倒す。だが、お前は俺を倒してどうするつもりだった？」

声を出すことはできず、言葉も見つからなかつた。ゆかりを一人で行かせるわけにはいかないとこの理由でついてきて、プリキュアだからという理由で戦っていた彼女は、イカリングの問いかけに対する答えは持つていなかつた。

「……分かつてねえのか。これが俺とお前の本気の違いだ。お前には何も守ることはできねえ」

無理に首を動かして、ルビーは忍たむの方を見た。不安そうな、怯えた表情の忍はどうにか意識を保とうとして必死に目を凝らし、弟の苦しそうな顔を見つめていた。

彼女は優輝を守ろうとしている。家族の為に、部員の為に一生懸命だった。

それなら、トルビーは思つ。自分も、敵わない相手でも、せめて一生懸命やってやるつ。

「約束したんだ」

勝利を確信していたイカリングは、すっかり戦意喪失したと思われていたルビーに手首を掴まれ目を見開いた。

「志穂先輩とゆかりに、約束したんだ！ 忍先輩を任せつて…」

痛みに耐えられずルビーの首に宛がつている手を自ら振りほどいたイカリングは、もう片方の手で握られた手首を擦りながら彼女を睨む。ルビーは空気を大量に吸い込み、一気に吐き出した。

「それに、喧嘩の先約もあることだしね」

優輝の怒りを田の当たりにして、自分にも責任の一端はあると彼女は感じていた。家庭の事情など気にもしないで、無神経なことばかり言っていたように思える。しかし、後悔はしていなかつた。

イカリングの言つことは必ずしも間違つてはいないと、ルビーは考えていた。感情を抑え込まず、彼女の言葉で嫌な気分になつたならそう言えばよかつたのにと思う。そうしていれば、イカリングに付け込まれることもなかつたのに。

ただ、それが優輝の優しさだとこいつのなら、そういうことにしてもおこつ。彼女は思つた。

家族には恥ずかしくて言えないことでも、友達には簡単に言えたりする。優輝はその友達すら、積極的につくつくりとはしなかつた。それは彼の責任だ。

ルビーにとつて優輝がイヤなやつであることに変わりはなく、この騒動が片付いても同情してやるつもりはない。しかし、せつかく席も

近いのだから、もうちょっと仲良くやつていろいろかなとは思えた。
だからこそ、負けるわけにはいかないのだ。

もう一つの戦いを気にしてオコリンボーの方を見ると、小さな影が
見えた。すぐにはその正体は分からなかつたが、やがて思考が冴えて
それが明らかになり、彼女は不敵な笑みを浮かべる。

「プリキュア！ プレジャー・プレス!!」

複数の光の球が巨大なオコリンボーの周りに出現し、体にぶつかることそれぞれが小さな爆発を起こした。

「何だ!?」

イカリング同様、何が起きたのか把握できないでいた忍は、今さらこの状況を理解しようなんて無謀なだけだと自分に呆れながらも、倒れるオコリンボーから離れてこちちらに近づいてくる影に目を凝らした。

「よそ見してんじゃないわよ！」

相当のダメージを受けたはずのキュアリンクがどうやってオコリンボーに反撃できたのか、呆気にとられているイカリングの隙をついてルビーは右手のブレスレットに力を込めた。

「プリキュア！ ルビー・ショット!!」

防御が遅れたイカリングは無理な姿勢から、ルビーの拳を象った赤い光を受け止めた。彼女の力に押されてじりじりと壁際まで追い込まれた結果、威力を打ち消すことができなくなりエネルギーの塊が爆発するようにして壁に激突した。

「てめえ……」

すっかり頭に血が上った様子で、立ち上がつたイカリングの顔は真つ赤になつていていた。“怒りの王”が本氣で怒つたらどれほどのか、ルビーには想像もつかなかつたが、直感的に追撃ではなく相手の攻撃に備えた。

そのただならぬ雰囲気は忍にも伝わり、自分に何もできないと承知の上でキュアルルビーを底おうとしたとき、キュアリンクを抱えた白いコスチュームの少女が空から降りてきた。

「何だお前？」

キュアプレジャーは彼の問いには答えず、深手を負っているリンクと彼女の通学かばんを忍に預ける。

「リンク！　ユーキ！　大丈夫リア？」

かばんから飛び出したタリアは自分がそもそももの原因であることなどすっかり忘れてしまったようで、純粹に彼女たちを心配していった。そんなタリアを見て、イカリングは嬉しそうに呼びかける。

「タリア、やつと来たか」

その言葉に確信を得たプレジャーは、ルビーに近づき現状を確認しようとした。

「あの人、がたこ焼きんぐですか？」

「いや、イカリングだけね」

幸運にもタリアの方に意識を集中させていたイカリングの耳に今 のやり取りは入っておらず、火に油を注がずに済んだ。

「大人しく心の国に戻れ、タリア。素直に従えばこいつら全員見逃してやる」

キュアプレジャーの登場に驚きはしたものの、オコリンボーはある程度の攻撃で倒されるはずがなく、キュアリンクは戦えそうにないと見てとったイカリングは自分がまだ優位にあることを認めたらしく強気な口調だった。

結局のところ、状況は振りだしに戻ったどころかリンクとタリアまで気にしながら戦わなければいけなくなつたルビーは、こいつそりとブレジャーに耳打ちした。

「どうしてタリアまで連れてきたのよ。あいつが水を得た魚みたいじゃない」

「え、イカリングなのに……？」

全身が痛み、起き上がる」とさえままならないリンクはアスファルトに転がったままタリアの頭を撫でた。それは安心させようといった意図ではなく、よく来てくれたという労いが込められていた。

「心の国にはまだ帰らないリア！　ボクにはこんなにたくさんのお友達ができる利亚。みんなと一緒にお母さんを捜すリアー！」

「これほどまでに劣勢な状況でも前向きなタリアの発言にリンクたちは安心させられたが、イカリングだけはやはりそれが気に入らないよつで静かに舌打ちをする。

「いい加減にしとけよ、このくそがき」初めは威圧するような口調だったが、次第に感情をむき出しにして荒々しくなった。「全部てめえのせいだ。プリキュアだけじゃねえ、そいつらみたいに無関係なやつが苦しむのは全部てめえの我儘のせいだ」

彼の怒りに同調するよつて、オコリンボーものつそりと立ち上がる。それを見て調子づいたイカリングは優輝を指差し興奮して言った。

「そいつのオコリンボーは誰にも止められねえ。プリキュアが三人になろうと、あの強力な怒りには勝てないだろ？」「よし！」

隣で苦しそうに眠っている優輝の顔を見つめながら、リンクは思つた。たしかに、自分たちだけでは彼のオコリンボーを止めることはできない。もしオコリンボーを倒せたとしても、彼の怒りに決着がつくわけではない。

これは、彼女たちでどうにかできる問題ではないのだ。

「勝つとか負けるとかじゃなによ」リンクは叫んだ。「倒すんじゃなくて、受け止めなくちゃ」

イカリングに向けた言葉だと思つて聞いていた忍は、やがてリンクが自分の目をまっすぐ見ていてことに気が付いた。彼女は一瞬その視線から逃れようと目を逸らしたが、今度はタリアに捉えられる。

「ユーキの優しさに、ちゃんと応えるリア！」

これまで巨人を従える大男と不思議な格好をした少女たちの戦闘を前にして呆然とするしかなかつた忍は、いきなり全てが現実であることを改めて認識しなければならず、それは彼女自身が驚くほどすんなりと受け容れることができた。

優輝の気持ちと、自分の気持ちを。

「……」「めん」

ぽつりと呟いた。眠っている優輝に聞こえるはずのない、小さな声で。彼女は自分の卑怯さに嫌気がさした。

「ぐだりねえことを……」

忍に近づこうとするイカリングを制止させようとして、ルビーとプレジャーが戦う。その光景を見て心底、自分が情けなくなつた。

優輝が苦しむのも、プリキュアたちが傷つくのも、町のみんなを恐がらせているのも、イカリングでもタリアのせいでもなく、自分せいだと忍は思つた。

今さら、優輝の気持ちに応えることなんて、できるのだろうか。

「くよくよしてるので、忍先輩らしくないですよ！」

格闘の最中、イカリングの攻撃をプレジャーが引きつけている間にルビーが言つた。

「自分に厳しくて、私たちには優しくて、でも叱るときは叱ってくれるのが先輩じゃないですか！　自分の弟にくらいいがつんと言つてやれないのでどうするんです！」

叫んだことでイカリングの意識はルビーに向けられ、攻撃を受けた彼女は電柱に激突する。攻撃後の隙を見てプレジャーが彼を背後から狙つたが、さつと振り返つたイカリングは彼女の攻撃を受け止め、そのまま壁に叩きつけた。

「私たちは大丈夫だから……」

膝に手をつきながら立ち上がつたリンクの体は、小刻みに震えていた。それがダメージによるものか、敵いそうにない相手への恐怖によるものか忍には分からなかつた。その体で戦うことがどれほど無謀か誰が見ても明らかなのに、忍はリンクを止められなかつた。

「恩田くんのこと、お願いしますね

無理やり自身を鼓舞してイカリングに突撃したリンクは、すぐに反撃を受けて地面に倒れた。それでも、また体を起し立ち向かつていく。

その姿を見て、忍はまた「ごめん」と呟いた。そして、優輝の頬に手を当てる。

「それと……、ありがとう」

すると、オーランボーが悲痛な声を上げて苦しみだした。初めて目にする光景だったのか、動搖するイカリングに三人が一斉に攻撃をし

かける。ルビーとフレジャーの攻撃はそれぞれ片手で防がれたが、リンクの攻撃は彼の腹部に直撃した。

ゆっくりと息を吐き、忍は微笑む。これまでの自分を皮肉るようにな。

優輝の優しさを踏みにじったのは、オコリンボーを生み出したイ力リングではなく自分だと彼女は思っていた。母の代わりになつて頑張るために、ずっと彼の好意を無視して否定し続けてきた。それが優しさのつもりでいた。

しかし、それは自己満足に過ぎなかつた。

しつかり者で家事もこなせる頼りがいのある姉という虚像に、いつの間にかすがりついていたのだ。その為に、無口で世話のやける弟、父親を知らない可哀そうな男の子に優輝を仕立ててしまつた。

優輝はきっと、父親も、立派な姉も望んでなんかいなかつた。彼の望みは、もっと小さなもののはずだ。

「いつも家事手伝つてくれて、ありがとう」

オコリンボーは地面に膝をついて、頭を抱えていた。まるで、忍の声が自分の存在を齧かすかのように、徐々に怒りの気配は薄れていく。

どうして今になるまで氣づくことができなかつたのか、それとも気づいていないふりをしていただけなのか、彼女は許してもらえるか怖くなつた。

自分は弱い。できた姉でも、頼れるキャプテンでもない。ただの卑怯者だ。

優しさのつもりで氣難しそうな弟をそつとしておいたつもりだった。しかし、本当のところは正面から彼と向き合つのが怖くて逃げていただけだったのだ。

何を遠慮していたのだろう。弟なのに。かけがえのない、大事な家族なのに。

「早く帰つて、一緒にタジ飯つくろう。私はお風呂沸かすから、優輝は洗濯物してさ……。それで、お母さんが帰つてきたら、三人でご飯食べようよ。家族みんなで」

優輝の表情は次第に安らかなものになり、オコリンボーは咆哮をあげながら鮮やかな赤い光となつて消えていった。

破壊された町も見る見るうちに回復し、キュアリンクも心なしか体が軽くなつたように感じた。

「ばかな……、オコリンボーが……」

形勢逆転とはいえないでも、オコリンボーの消滅によりプリキュアたちの負担が大幅に軽減されたことは明らかであり、三対一という状況のままいたずらに体力を消耗するよりは一旦退いた方が利口だとイカリングは考えた。

「これ以上、私たちに関わらないで」

リンクの要求をイカリングは鼻で笑つて一蹴し、タリアを睨んだ。

「そいつはタリア次第だ」

こうしてイカリングが退散したとき、すっかり日は暮れて辺りは真っ暗になつていた。

「それで？ ちゃんと全部説明してもらいますからね」

忍の追及から逃れられそうになないと判断した三人は、観念して変身を解いた。

「あの、どうして私たちって分かつたんですか？」

プリキュアである自分の姿を鏡で見たことはなかつたが、他の二人の変化から察するにあつさり正体がばれないはずの変身がどうして見破られたのか、ゆかりには不思議で仕方がなかつた。

「あんなに私たちや志穂のこと言つてて、気づかれないわけないでしちゃうが」

呆れたように言つ忍は、つい先ほどまでの苦悩なんてなかつたかのようで、いつも彼女だとゆかりたちは安心した。

今回の騒動は多くの人々を巻き込み、破壊の形跡がなくなつたからといって、なかつたことにはならない。優輝の怒りが具現化したオコリンボーが暴れ、その原因が忍にあることはごまかしようのない事実である。

しかし、こんな事件の後でも、忍がいつも調子を取り戻し、優輝

が目を覚ましさえすれば実害はどこにもない。これをきっかけに二人の仲が少しでも縮められたなら、無理を押して戦つたぼろぼろの体も報われるだろ？と、ゆかりは思った。

「あっ！　ゴーキが田を覚ましたリア！」

黄昏時の道端で姉やクラスメイトや妖精に囮まれながら意識を取り戻した優輝は、自分が置かれている状況が理解できず、とりあえずは大きく息を吸い込んだ。

妙に清々しい気分であり、感傷的もある。何が起きたのかは覚えていないが、煮えたぎる様な真っ赤な景色と、断片的に忍の声が聞こえた気がしていた。

「優輝！」

田を覚ます確証があつたわけではなく、まるで一か八かの大手術から生還を待ちわびるような気持ちでいた忍は思わず優輝を抱きしめたい衝動に駆られたが、クラスメイトの手前きつと嫌がるだろうと思つて自分にブレークをかけた。

「……なんだよ？」

相も変わらず無愛想に応える弟を見て、笑みがこぼれる。寡黙だろうとお喋りだろうと、可愛げがあつてもなくとも、彼は彼女の弟であり、彼女は彼の姉なのだ。このつながりは切つても切れないもので、どんなに仲が悪くても末永く付き合つていかなければならぬのだ。それならば、今のうちに一つでも問題を片付けておいた方がいいに決まつている。

「もう遅くなっちゃつたけど、お母さんが帰つてくるまでご飯つくれないといけないから、手伝つてくれる？」

目を丸くした優輝は、一瞬だけ疑うような目つきで忍を見た後、視線を逸らしてぼそりと呟くように言った。

「……おひ

「それと、これからも部活で帰りが遅くなることがあるかもしない。そのときは、私もできるだけ急いで帰るけど、優輝にも協力してもらつていい？」

しばらくして、微かに優輝は口元を緩めた。それが照れによるもの

か、いきなり積極的になつた姉を面白がつてのものかはゆかりには見当もつかなかつたが、そこに彼の優しさが表れていたようだと思えた。

「俺の料理……」

「え？」

イエスの返事を待つていた忍は不意をつかれて間抜けな声を出した。嫌そうな口つきで彼女を見て、諦めたように優輝が再び口を開く。

「俺の料理、美味くはないかもしれないけど、食べられないことはないだろ……？」だから……

言葉を区切り、彼はちなみにの方を気にした。聞かれたくないような恥ずかしいことを言つつもりなのだろうかと、にやにやして耳を傾けるとゆかりに注意されたため、やむなくちなみに一歩だけ身を引いた。

それを確認すると、近くにいる忍にさえ聞こえにくいくらい小さな声で、彼は言葉を続ける。

「部活……は、やれよ。俺がやつとくから。家事とか、けつこう好きだし……」

彼の料理の腕を考慮すると素直に頷くわけにはいかなかつたが、とりあえず立ち上がるのを手伝おうと忍は手を差し出した。その手を無視して一人で立つた優輝は、彼女の顔を見ようとせず、ゆかりたちを一瞥して歩き始めた。

慌てて彼の分までかばんを拾つと、ゆかりたちに挨拶を済ませて忍は後を追いかけた。街灯がちぢらちらりと点きはじめ、四色の花のキー ホルダーが微かに光る。

大事なのは、家族の数ではないと彼女は思った。両親のいる円満な家庭と比べて優劣を競うものでもない。忍にとって、母と優輝がいる、それだけで十分に家族といえるのだった。

優輝もそんな思いでこのキーホルダーを持つていってくれたなら、譲つた甲斐がある。彼女は微笑み、優輝の隣に並んだ。

「じゃあ、帰つたら早速、基本的な切り方から教えてね」「毎晩……本読んで勉強してるよ

そのときの優輝のむすつとした顔が、子供ものよいでなじみはおかしかった。これから彼が歳をとり、どんなに立派になつたとしても、彼女の弟に違ひはない。

だからこそ、不味い料理にははつきり不味いと言つてやうといつて思つた。それで喧嘩になるのも、たまには悪くない。

5 1・ファイト一発！ ゆいの応援

「これ、どうすんのよ？！」

アンティイークと言い張るには年季の入りすぎた木製のテーブルに、ちなみは容赦なく新聞を叩きつけた。

「ちょっと。それ、うちの新聞」

「あ、すみません」

古びたテーブルと共に数々の重みを支えてきた歴戦の椅子は、今にも折れそうな腐りかけの脚で、それぞれゆかりたち三人のプリキュアと忍の体重を健気に受け止めていた。

それらを擁する部室の扉にも、といふどじろに棘や隙間が目立ち、ちなみの大聲を室内に留めることに苦労してくる。仮に木の妖精なるものがちなみに声のボリュームを下げるようお願いしたとしても、今回ばかりは彼女もその要請を受諾することはできなかつただろう。

「あの、私も読んでいいですか……？」

恐る恐るといった様子でテーブルに置かれた新聞に手を伸ばすと、一面に載せるにはあまりにもお粗末なぼやけた写真と、でかでかと印刷された見出しがゆいの田をぐざ付けにした。

「何て書いてあるの？」

彼女の肩越しに紙面を覗いたゆかりは、“平和な町を巨人が襲う”という見出しを認めると、それに続く小さな文字を素早く読み進め、“怪我人はいなかつた”と締めくくられている文章にほつと一息吐いた。

「タベ、捨てようとしてまとめてるときに見つけたんだけど、数日前の夕刊ね。いつもは朝刊しか読まないから気付かなかつたんだけど」着替えを済ませて練習の準備に向かう部員たちが部室から出していく中、ゆかりたちだけを呼び止めた忍がかばんから取り出したのは、彼女たち女子中学生が興味を抱くにはいささか面白みに欠けた地方のスポーツ大会や地域のふれあいを報じる地方紙だった。

ゆかりは一面の記事に目を通しながら、よくもこんな現実離れした

話をのぞかな地方紙の一面で扱うことにして編集長がゴーサインを出したものだと、半ば呆れ半ば感心していた。

「やつぱり、問題になりますよね……」

困ったようにゆかは咳して、タリアが入っているゆかりのかばんをちらつと見た。

先日のイカリングとの戦いによりオーリンボーが及ぼした被害は、町の住人にとって看過できないものであった。田撃者も多数いるなかで、このような記事が書かれるることは十分に想定できたはずなのに、彼女たちはこの件について話し合つのは今回が初めてだつた。

「壊れた場所が直つたからつて、全部が元通りになるわけじゃないんだよね」

幸運にも関係のない人を巻き込まずに済んだこれまでの戦いとは違い、今回は恩田姉弟をはじめとする多くの人を危険に晒すことになつた。後日、全校集会が開かれ生徒全員の無事が確認されたとき、忍と優輝が大きなストレスや不安を抱えることなく過ごせるならそれでいいと安心しきつていた考えの浅はかさを、ゆかりは思い知られた。

「今まで気にしなかったの？ その……プリキュア？ とか妖精とか、大変なことだつて」

「もちろん思つましたよ！ でも、当人があの調子ですしつ……」

ため息まじりに言つ忍に対し、まるで無罪を主張するような口調で否定するちなみは、責任の所在をゆかりのかばんに押しつけようとしていた。

彼女の意見ももつともだと判断したゆかりは、かばんを開けてタリアを証言台に召喚する。どうやら気持ちよくお昼寝していたらしいタリアは、寝ぼけ眼でとぼけた声を出した。

「おやつの時間リア？」

「そんなものありません！」

叱りつけられるような口調のちなみから守るよつにタリアを引き取つて膝の上に置いたゆかは、部室といつが法廷におけるタリアの弁護人であった。

「タリアに当たらなくとも……。悪いのはあの人たちじゃないです
か」

「別にタリアを悪者にしようつゝもつはないナビさ、そろそろはつきつさせたい」とが山ほどあるわけよ」

しばらく前にゆかりも多くの疑問を抱いてタリアを質問攻めにしたことがあったが、収穫は得られなかつた。その後もトラブルが続いたせいで有耶無耶になつてはいたが、先日の騒動でオコリンボーの存在が世間に認知され、やがてはプリキュアやイカリング達が注目の的になるかもしれない。

それまでに決着をつけなければ、話がこじれる一方だ。いい機会だと思い、ゆかりは自ら進んで尋問役を請け負つた。

「ねえ、タリア。お母さんを捜してはるばる心の国から来たつて言つてたけど、どうしてお母さんがこゝにいるつて思ったの？」

「何となくそんな感じがしたタリア！」

やはりと言ひづきか、少しは話が進展するかもしれないと期待に膨らませていた胸は、タリアの能天氣な一言によつて萎んでしまつた。ゆかりは更なる質問を諦め、背もたれに体を預ける。

「じゃあさ、私から二人に質問してもいい？」

唐突に忍が口を開き、そんな提案をした。詳細なことは何も知らない三人は戸惑い顔を見合わせたが、忍は彼女たちの返事を待たずに言葉を続ける。

「私の他に、このことを知つてる人は？」

「いませんけど……」

オコリンボーにされたときの記憶がそのままであれば、教頭や優輝はゆかりの正体を知つてゐることになるが、どちらも目を覚ましたときにはイカリングに光を吸い取られたことまでしか覚えていなかつた。

ラクイーンと戦つたときは校内から彼女たち以外の人間がいなくなり、変身を解いた直後に悦ちゃんが現れたが、一切の動搖が感じられないことから彼女は何も目撃していないと判断していいだろう。

「じゃあ、誰にも言つてないってこと？　家族とかにも？」

「言えるわけないじゃないですか。私だって初めてゆかりがプリキュアとして戦つてるって知ったとき、やめさせようとしたくらいですか
ら。親に話したら変に心配かけるだけですよ」

ちなみに言い分に頷きながらも腕を組んだ忍は、険しい目つきで三
人の顔を順番に見ていき、やがて諦めるような溜め息を吐いた。

「まあ、それが正しいと思つよ。私も助けてもらつた恩があるからや
めろなんて言えないけどさ、先輩としてあんたたちが心配なんだよ」「
ありがとうござこます。でも、私だってタリアが心配なんです。
放つておいたら、あの人たちに何をされるか……」

新学期の朝にみた、タリアが泣いている夢。いつも元気なタリアが
どうして泣いていたのか。どうして、そんな夢を見たのか。ゆかりに
とつてそれらの謎は謎のままであつたが、タリアと自分は不思議な縁
があるので思わずにはいられない。

ゆいの膝の上で大人しくしていいるタリアの頭を優しく撫でると、ゆ
かりは穏やかな気持ちになれた。初めはただの奇妙な生き物だった
タリアも、今では彼女の大事な友達であり、守るべき存在である。
「私たちがどうしてプリキュアとして戦つてるのかなんて、私たち自
身もよく分かつていらないんですけど……」

頬に手を添えられると、タリアはくすぐつたそつに微笑む。そんな
子どもらしい無邪気な様子を見ていると、ゆかりは嬉しくなる。
「でも、タリアのお母さんを見つけるつて約束したんです。見つけて
あげたいんです」

先日の優輝との一件で、タリアには父親がないことも分かつた。
兄弟や親戚の存在はまだ明らかになつていないが、母親が唯一の身よ
りである可能性もある。単なるタリアの勘違いや行き違ひだつたら
ら、それでいい。

あの日の夢のように、タリアの笑顔が涙で消えてしまわないよう
に、ゆかりは一応の努力はしてあげたかった。

「ま、乗りかかった船だしね。今さらほっぽりだすほど、私もひどい人
間じゃないですから」

「わ……私もです！」

ちなみに続いて決意を表明したゆいは、意見をはつきりと言えたことに満足してある種の自信を手に入れたようだったが、忍の視線を感じた途端に手に入れたばかりの自信は彼女の手からぱりぱりと零れ落ちた。

「どんな船に乗ろうと、あんたたちが好きでやうじるなら私はいいんだけどね。ただ、帰るべき港がある」とも忘れないでほしいのよ」「とこうじ…」

聞き返したのはゆかりなのに、忍の視線は相変わらずゆいに向かっていた。そこにどんな意味が込められていたとしても、ゆいは居心地が悪くなり俯いてしまつ。

「また」の前みたいなことがあって、あんたたちが行かなくちゃいけなくなつたとき、部活中なら私がフォローできる。……ゆかりとちなみだけならね」少しの間、忍は言いにくそうに言葉を詰まらせた。「でも、一年生の恵原さんは難しいかも。咄嗟に言い訳を思いつけそがない

「そりなんですよね。」の前も来るなつて言つといったんですけど」

庇つてくれるわけでもなく忍に同調するちなみに對してゆいが抱いた反感は、ゆかりがフォローしてくれたことで心の内に留められた。

「でも、あのときゆいが来ててくれなかつたら私たち……」

「それはそりだけど、入部したての大変な時期なんだからさ。タリアのお母さん見つけるより、氣の合つ友達見つけるのが先じゃないのつて私は思うわけ」

「別に私は……」

三人のやり取りは、忍がテーブルを強く叩いたことによって収束した。尊い自己犠牲精神をもつ哀れなぼろテーブルの苦勞など氣にもかけない忍は、天板に手を置いたまま立ち上がり、彼女たちを落ち着かせるようゆきくつと話した。

「そもそも、あんな怪物が襲つてきたら部活どいふじやないわけだし。それに、恵原さんだけじゃない。ゆかりとちなみだつて、練習には出

てもらわないと。だつてもうすぐ……」

誰かが走つてくる足音を敏感に察知して、ゆかりがタリアを素早くかばんに隠した直後、部室の扉が勢いよく開き志穂が入つて来た。

「もう練習始める時間だよ、忍！ もうすぐ大会だつていうのに、キヤブテンが部室で何をぼつてんの」

「ああ……」めん、志穂。すぐ行くから

似合わない仏頂面の志穂に急かされるようにして、彼女たちはそれぞれラケットを持ち席を立つた。最後に部室を出たゆいは、タリアの入つているかばんを気にしてちらりと後ろを振り返つたが、すっかりゆかりのかばんが氣に入つたタリアが顔を出すことはなかつた。

「それで、じゃあ気持ち切り替えて、やりますか」

大きく伸びをしながら、ちなみに誰にともなく言つた。自分に気合を入れるためかもしれないし、ゆかりや先輩たちのモチベーションを高めようとする意図が含まれていたかもしれない。

ただ、少なくとも自分に向けられた言葉ではないとゆいは思った。春の大会が近付いたところで、一年生の彼女には関係のないことだ。

呼吸する度に肺が締め付けられるような痛みを感じ、ゆいは校門を通過したところで走るのをやめた。

入部したばかりの頃と比べると、完走できたところは大きな進歩に思えるが、そんなことを考える余裕などない彼女は、後ろに同じソフトテニス部の一年生がいるのを認めるどころではないことにほつとした。

校舎の壁にかかっている時計を見ると、すでに前衛の基礎練習は終わっている時間だった。テニスコートに戻れば、素振りと声出しが待つていて。それを思つと、歩調が遅くなつた。

「まじでや、やつてらんなくない？」

不意に聞こえた声に驚き、ゆいの体は飛び跳ねる。いつの間にか、先ほどまで後ろを走つていたソフトテニス部の一年生が追いついて、彼女の隣を歩いていた。

「あ……」「

ゆいは周りを見渡して自分たちの他に誰もいないことを確認すると、ようやく話しかけられたのは自分のだと確信をもてた。しかし、返事をするには遅すぎたようだ。

「走り込み」

苛々した口調の彼女は、ゆこと回じクラスで悦ちゃんと一緒にいる子だった。

「え、あの……」

「陸上部に入ったんじゃなにつけーね」

呼吸が乱れたままのゆことは違う、彼女は涼しい顔をしている。これまで話したことのない相手に困惑い、気が付くと何も言えないまま部室の前に着いた。

「美^み愉^ゆ、恵原さん、お疲れ……」

冷水器から顔を上げた悦ちゃんが一人を迎える。渡り廊下の影には、彼女たちより早く走り込みを終えた部員が座り込み、タオルで汗を拭っていた。

「お疲れって、悦子はあんま疲れてなわそつちゃん

他の部員と比べて明らかに元気で汗もかいていない悦子を見て、彼女は疑うように言った。

「す、じんだよ。悦ちゃん、十分以上前に帰つて来てたんだか

校舎の入り口にある段差に腰かけた子はまだ走り終えたばかりのようで、タオルを肩にかけ額からは汗が滴っている。クラスでいつも悦子と行動を共にしている子で、名前はたしか快実^{よしみ}といった。

「へえ、たすが悦子」

「美愉だつて足早くなかった? 運動会でリレーの選手とかやつてたし

「いやあ……ペース配分間違えてさ」

美愉の笑い方があまりにもわざといしかったことにゆいは違和感を覚えたが、追求するつもりはなかった。そんなことよりも、部室で待っているタリアの様子を見なければならぬ。

彼女たちが自分を気にかけていないことを確かめて、ゆいは部室の扉に近づく。

「恵原さんもお疲れ! 私たちはもうコートに入るけど、恵原さんもゆっくり休んだら来てね」

悦子に話しかけられて、ゆいの体は飛び跳ねる。振り返ると、快実たちも立ち上がって体をほぐしていた。

「え、もう?」

「うん、私たちはもう休んだから」

「張り切ってるねえ……。まあ、頑張って」

他人事のように手を振る美愉の腕を掴んで、悦子はコートの方に向かって彼女を引っ張つていった。

「ちよっと、悦子。 私まだ休憩してないんだけど」

「美愉は疲れてなさそうじゃん。 ほら、行くよ」

「コートに入つていく彼女たちを見送つたゆいは、部室に駆け込みかばんから取り出したタオルで汗を拭うと、すぐに悦子の後を追いかけてた。

いつもなら一年生が走り込みを終えてコートに戻つたときには、基礎練習が終わり試合練習に入つてゐるはずだったのだが、今日はこれから後衛練習が始まるところだった。

大会に備えて基礎練習を充実させてゐるのか、一年生の彼女たちが走り込みから帰つてくる時間が早くなつたのかは分からないが、素振りをするために持つてきたラケットを置いて声出しするように指示された美愉たちは不満そうであった。

一つのコートを囲むように散らばつた一年生は、入部したての頃に教わつた通りの声出しをする。志穂が慣れた手つきでボールをコートの左右に打ち、忍がそれを対照の位置に打ち返す。

「ファイトーーー！」

隣で声を出す悦子を見て、ゆいも躊躇いがちに口を開いた。

「ファイト……」

思つていたほどの声が出ないで、咳払いをして誤魔化す。ちょうど

忍と入れ替わりでゆかりがコートに入ったところで、所定の位置につくと腰を落としてラケットを体の前で構え、志穂からのボールを待つ。

相変わらずゆいの隣では悦子が一生懸命に声出しをしている。志穂がボールを出し、ゆかりが走り出した。今度は、といった気概でゆいは大きく息を吸った。

「じぶ、一年！ 声出でないよ！」

ゆかりのラケットがボールを打ち返す気持ちのいい打撃音と、ゆいが意を決して喉から出しかけた声援は、ちなみに怒声によつてかき消された。

前衛であるちなみに球出しをする志穂にボールを手渡す仕事を他の部員に任せて、ゆいの方に近づいてきた。声出しができていらない一年生代表は自分だと自覚のあつたゆいは、ずかずかと迫つてくるちなみに思わず身構える。

「やーー わやんと声出してる!?」

ちなみに標的になつたのは、悦子の隣に立つていた美愉だつた。

「えー、出しますよー」

「口が動いてるようには見えなかつたけど？」

怒られたのは自分でないと分かつたゆいはほつとして、ルビーショットを撃たれたくないならその人に口答えはしないほつがいい、と心中で美愉に忠告するだけの余裕をもてた。

「いい？ 声出しある派な練習なんだからねー！」

そう言い放つてちなみにコートの中に戻つた途端、美愉は小さく舌打ちをして快実に言つた。

「何で私だけ……。惠原さんも声出してなかつたじゃんね」

その言葉はゆいの耳にもはつきりと届いた。はつとして何か言い返そうと思つたが、それはできなかつた。

「惠原さんは声出してたよ」

代わりに弁明してくれた悦子に感謝しつつ、ゆいは頷く。

「でも、聞こえなきや意味ないじゃん。快実は聞こえた？」

「ううん、聞こえなかつたけど……」

「気まずやうにゆいの顔色を窺ひながら、快寔は応えた。

「ほら。恵原さん、愛花先輩と仲いいから靈廟されてるんだよ」「違うよ。別に靈廟なんて……」

今度はゆい自身がはつきりと否定した。たしかに自分も声は出でていなかつたかもしぬないが、出でうとしていなかつたわけではない。美愉が怒られるのは当然のことであり、自分に文句を言つるのは不条理だと彼女は思つた。

「でも、恵原さんつていつも先輩たちといふじやん。今日も練習始まる前、愛花先輩やキャプテンとずっと部屋にいたし」「それは……」

部屋でのゆいの言葉を思い出す。ゆいがいなくなつたとして、言い訳を咄嗟に思いつけそうになつたこと。彼女自身ですらプリキュアであることを隠したまま、どんな説明をすればよいか分からずローリもつてしまつたのだから、もつともな意見だつたのだと感じじる。

「ほら一年！ お喋りは後!!」

ちなみに注意されて、ゆいはそのまま美愉に言い返す機会を失つてしまつた。

「え、「コート整備しなくていいんですか？」

辺りが夕闇に包まれた頃、最後の試合練習が終わるのを見届けてすぐによーとブラシを奪取した悦子は驚きの声を上げた。

「大会近いし、私たちはまだ残るから。練習はとりあえず終わりだから、一年生は帰つていよ」

忍の指示を受けて、人数分あるはずもないコートブラシを勝ち取つた一年生はほんの少し落胆した。練習後の片付けにおける役割の中で、球拾いよりも「コート整備の方」が優等だというイメージが彼女たちにはあつたのだ。

「じゃあ帰らつよ、悦子」

「ホールドラッシュの競争に参加していなかつた美愉は、何でもないことのように言つ。彼女以外の一年生はしばらく悦子の次の行動を見守つていたが、居残りをしてまで雑用をする必要はないだろうと各自

で結論を出したようで、美愉に続いてぞろぞろとコートから出て行った。

「そういうわけだから、あんたもさつないと帰んなさい」

いつの間にか悦子と一人でコートに取り残されてしまったゆいは、ちなみの声にはっとして振り向いた。

「一年生は試合に出ないんだし、気を遣わなくてもいいから。ほり、悦子ちゃんも」

ゆかりに言われて、悦子は名残惜しそうに戦利品であるコートブランシから手を放す。

「分かりました。じゃあ、恵原さん、帰ろっか」

「あ、うん……」

今日の練習は終わった。これから時間は先輩たちが大会に備えて自主的に練習するだけで、一年生は帰つても構わない。

それなのに、何となく後ろめたいような気分をゆいは感じていた。

正門から帰るグループと別れて、反対側の門から悦子たちのグループに混ざつてゆいは学校を出た。

最後尾を歩きながら、会話に意識を集中させる。先頭では買つぱかりの新品のラケットをケースに入れたまま振り回し、美愉が愚痴をこぼしていた。

「あーあ、早くテニスやりたいなあ」

「仕方ないよ。コート少ないし、男子のテニス部もあるんだから」

そう言つてなだめながらも、快楽も不服に思つていそうだとこういどがその口調からは感じられた。何人かは美愉の意見に素直に頷き、その内の一人が悪びれる素振りもなく言つ。

「三年生の先輩たち、早く引退してくれたらいいのにね。そしたらコートが空くのに」

「素振りはともかく、走り込みとか声出しどうか絶対意味ないよね」

あまりにも横柄な彼女たちの考え方には、ゆいは思わず顔をしかめた。誰も後ろにいる自分の表情なんて気にしていないだろうと思つてのことだったが、ちょうど美愉がこすらを振り返つたところで、ゆ

いの表情が彼女は氣に入らなかつたようだ。

「あれ？ 恵原さん、何か言つたそつじやん？」

「いや、あの……」

みんなの視線が一斉にゆいに向かれた。そのことを意識すると、喉が閉まるような感覚がして声が出なくなつた。

「私は……走り込みとかも大事だと思つ……」

「え？ 何？」

ゆいが言い終わらないついで、美愉は大きな声で聞き返してきた。

「ちよつと、美愉!!」

あまりにもわざとらしい意地悪をした彼女を悦子が咎めたが、美愉は笑つて誤魔化した。

「だって、恵原さん声小さいんだもん。よく聞こえなかつた」

その後、家路につながる曲がり角にむしかかるまで、ゆいは一言も発することはなかつた。